建築と社會

13

新年號

第二十一輯　第一號・昭和十三年一月一日

日本建築協會

賀正

昭和十三年元旦

三機工業株式會社大阪支店

東洋キヤリア工業株式會社大阪支店

東洋鋼材株式會社大阪出張所

謹賀新年

昭和十三年戊寅元旦

社團法人 日本建築協會

會告

本協會定款第十七條第十八條及第二十條により昭和十二年十二月四日開會の評議員會に於て理事、會長、副會長、常務の選擧を執行致しました結果下記の通りであります。

理事 會長	片岡安氏	理事 副會長	竹腰健造氏
理事 副會長	中澤誠一郎氏		
常務（主記）	井上福藏氏	常務（主記）	伊藤和夫氏
常務（主記）	中西六郎氏	常務（主記）	樋口辰太郎氏
常務（主記）	山手研吾氏		
常務（主計）	鈴木一幸氏	常務（主計）	松井清之助氏
常務（主計）	三浦茂氏		
常務（編輯）	伊藤武文氏	常務（編輯）	堀口甚吉氏
常務（編輯）	八木憲一氏	常務（編輯）	吉田信武氏

（五十音順）

昭和13年1月

社團法人 日本建築協會

建築と社會

第21輯　第1號　　昭和13年1月發行

一月號

目　次

非常時に直面する新春の建築界……片岡　安（1）
昭和12年の回顧……葛野壯一郎（3）
昭和13年への展望……モトノ・セイゴ（7）
時局下に希望をもつ……大倉三郎（8）
時局に際して建築技術者の抱負……酒井勇三郎（14）
建築家の再認識……山口儀三郎（17）
建築論壇のこと……中野順次郎（22）
新工法への拍車……元良勳（25）
小住宅への課題……伊藤正文（27）
建築職工への再認識……鈴木忠五郎（32）
都市に於ける貸住宅經營の實際……政岡基次（39）
建築と繪畫について……豊藤勇（53）
鐵筋コンクリート單筋T形梁計算圖表……藤田靜雄（62）
(1)昭和13年建築界の豫想(2)時局下の建築界に對する感想及び對策…5　7　氏（73）

・時　報・

コンクリート管內鐵筋の應力……（97）

・建築隨想・

建築の前進……本多正道（83）
轉換期を前にして……龜井幸次郎（85）
五年間の編輯後記……新名種夫（90）
ブック・レビュー……堀口甚吉（101）

・新建築欄・

朝日ビル名古屋支店（名古屋）　廣野ゴルフ塲（兵庫縣）　北野劇塲（大阪）
ニュルンベルグの競技塲計畫（ドイツ）　Birmingham 郊外 Dubleyの動物園（イギリス）
Ben Marden's Riviera（アメリカ）　ニューヨークのインターナショナル・カシノ(アメリカ)
マイアミ海岸の住宅（アメリカ）　住宅（イギリス）　Yeovilの映畫劇塲(イギリス)
ヴエーロナ市の新橋梁・Navi橋(イタリヤ)ヴエーロナ市の新橋梁・San Francesco橋(イタリヤ)
ヴエーロナ市の新橋梁・Garibardi橋及Catena橋（イタリヤ）

會　報……（103）



神苑の朝

非常時に直面する新春の建築界

工學博士　片岡安

我國は今や古今未曾有の危機に直面して居る否千歳一遇の非常時局に乘り出したのである。我大和民族が東亞の安定勢力としてその羽翼を大陸に延ばすべき好箇の機會を提らへたので全く天の與へた一大使命達成の活躍舞臺に登つたと見て差支がない。國民精神總動員に依つて一億民衆の緊張振りを彌上にも隆昌ならしめ、戰線の活躍と銃後の護りは相呼應してその光輝を發揮しつゝこの使命達成の序幕は開かれて居るのである。

我々建築界にあるものは一般國民としての奉仕は固よりであるが、建築の專門的識見と技能とに依りてこの輝かしい活躍に奮闘せねばならぬ重大なる責務を有するのである。從來の我國の平和的文化及經濟的施設は今や一躍して國防强化の色彩を濃厚に織り込むの急要に迫られて來たので、內に在りては我々が年來强調して來た都市武裝の實現を急要とし外にありては大陸の勢力圈內に於ける各地の建設工作の急設を企圖せねばならぬ情勢に立到つたのである。都市に於ける防火地區の制定とその實現の急要を叫びつゝ容易にその目的が達成せられざる中に時代は急進して、更に空襲に備ふるの建築物の建設を急務とするようになつたことは、我々國民の重責を增したのであるが、萬難を排してもその計畫を實現せねばならぬ運命に到着したのである。

國防經濟の振興と國防强化の充實の爲めには我國民の全能力を綜合歸一してその實現に邁進せねばならぬのである。而してその實現に當りて現在の如き脆弱なる集團たる都市を本據とすることは如何にも危險至極であつて、現代の空襲戰時代には實に戰慄そのものとも言ふべきである。最近支那各地に於ける我皇軍飛行隊の空襲にその例を見るも、若し彼支那の都邑の建設物が我國の如き木造建築の集團であつたとすれば南中支の支那都邑は今は全く地上よりその影を沒したであろふと思はれる。

我々は我都市の武裝强化を高唱せること數歲、防空演習の催きる每に常に都市建設物の改造の急要を叫んで來たのである。又十數年以前より數次當局に向ひ防火建築の促進を獻策して來たのである。而してその計畫の如何にも遲々として何等見るべきものなく今日に到つたのであるが、この非常時局に直面して尙且つ目覺むるに於ては我國防經濟充實の根本を脅かさるゝの感なきを得ない。我官民一致の協力により國策としてこの重大にしてしかも急要なる問題の解決に努力すべき時機は切迫したのではないか。

昭和十二年の回顧

葛野壯一郎

見出しの様な題目で、建築と社會の編輯の方から何か書けとの事であつた。未だ大分日限も有り、其内には何か書けるつもりで安請合にお受けして置いたが、さて日限も迫つて來た昨日今日となり、書いて見様と思つて筆を採つてみるが、一向頭に纏つたものが浮んで來ない。

建築界に長い間頭を突込んで、何かと斯うして暮しては居るものゝ、一向に世間は知らず、只少いさく自分の周圍の事にのみ齷齪して居る筆者の如きにとつては、何が何やら世間の様子もぼんやり噂に聞く程度で、はつきりした事は何にも分らず、一歩外の世界はまるで夢の様に感じられる外はない。

正直なところ筆者の手元で言へば、昭和十二年は今迄に無い閑散で、然も慌しい一年を暮したといふに過ない。相憎關係の仕事——といつても元より大した事はないが——も多くは前年度で完成し、それに續々新らしい仕物もなく、偶ま何か耳寄りの話は有つても、其儘決まる様な決まらない様な事ばかりで、つい一年は過ぎて了つた。考へてみると非常に心細くも思ふが、長い間には斯うした事も有り得る筈と、自分に都合の宜い様な諦めをつけて、來る可き歳に多少の希望を掛けて行くより仕方がない現狀である。

筆者ばかりが左様かと思ふと、時々事務所へやつて來る業界の新聞記者等が、ふた言目には新らしい記事が無くて困る々々とこぼして行つた。殊に下半季に及んで其れが一層甚しい様に聞かれたところを思ひ合せると、一般には決して宜かつたとは言へないらしく感じられる。

尤も何れの場合にも除外例と言ふものは有つて、反つて平年よりも多い等といふ向も聞かぬではないが、元より特種の場合に過ぎず、設計界でも請負界でも材料界でも一流所は別として、二流三流以下が餘り忙しく無かつたと言ふのが事實では無からふか。

筆者の知人の設計家に人一倍骨を折る努力家が有るが、結果としては餘り良く報ひられ無かつたらしい。何時も會ふ度にこぼして許り居つたのを思ふと、決して宜い方で無い事は明かである。今の世の中は、只骨を折る努力すると言ふだけでは奈何も立ち行けないと言ふのが事實なのではなからふか。是れは考へてみると誠に理窟の合はない話であるが、本當の様に思はれる。つまり其畑や筋をはづれると言ふ事である。いくら骨を折つても筋

がはつれ畑が違つて居ては何にもならない。是れは當然徒勞に屬するのは分り切つた事である。

餘談を許してもらふとして——

大分以前の事であるが、生命保險の勸誘には日本一だと豪語し、又事實其通り、吾々の見た所も尋常保險勸誘員とは全く撰を異にして居る男を知つて居たが、是れがよく此筋や畑の事を話して居つた。其時期々々に依つて、此頃は織物屋さんが良いと觀れば其方に行き、材木屋さんが良いと觀れば又其方に當ると言つた風に、此男は其筋々を良く見分けて普通の勸誘員の様に、人さへ見ればうるさく勸誘するといふ様な事は絶對にしなかつた。そこに此男の偉い所があり、成功があつた様に見られる。

建築と一口に言つても實は多種多方面である。いくら材料や手間が高くとも、いやでも應でもやらなければならね建築が一方に有るかと思ふと、必要は必要としても差當り一年や半歳を爭つて造らなければならぬと言ふ程のもので無い物も相當ある。又其經營が全然個人的に屬するものと、會社其他の公共團體に屬するものとにも大きな差が有り、營利に關すると關せざるとにも亦格段事情の相違がある。

やはり其れ々々の筋が有り畑が違つて居て、それが凡べて萬遍なく活況を呈して呉れると申分は無いので有るが、何時でも左様とはうまく行かぬのが本筋である。

尤も社會的に平穩な、又經濟的にみても、その好況不況は兎に角として、比較的波瀾の少ない歳には、此多種多方面の建築が大體足並を或程度まで揃へて行く事が出來るが、左様でなく其處に何か社會的經濟的に大きな變調と言つたものが現はれて來ると、此足並と言ふものは忽ち亂れて來る。一方に非常に忙しい方面が出來るかと思ふと、片方には反對に閑散な部分が現はれる。比較的忙しい方面に首を突込んで居る連中は、一向に不況らしい何物をも感じないが、反對に閑散な向に居る者には、急に不景氣が襲つて來た様に思はれる。是れは止を得ない事である。

業者でも眼光の見える方は常に經濟界の推移に注意して、常に新らしい筋や畑の開拓を怠らず、其れ々々活躍の場所を發見し、如何にか維持經營が續けられるが、左様でない向になると、急に慌て出してあせつてみても、一向物にならぬといふ結果となる。今の業界を見渡しても、切實に此感が有るやに思はれるが事實は如何か、委しい所迄は筆者には分らない。

設計者の方は業者とは大分事情が違ひはしないかと思ふ。其れ々々の畑があり、其專門とする所、得意とする所が、今では大凡そ分れて來て居る様に思はれる。畑の宜い處を持つて居る人は、何等勞せずして仕事が次から次へと出て來るが、畑が悪いと、いくら骨を折つても一向に仕事は出て來ない。水の無い所はいくら堀つても駄目である。

次から次へと新らしい畑を見出して、其れを開拓して行く事が必要だが、是れは中々骨の折れる仕事である。又建物の種類に依る專門、例令ば工場建築とか銀行建築とか住宅建築といつた風に、其處に自ら得意とする所が分かれて、醫者程ではなくとも、住宅を主とする建築家の所へ、工場建築を擔ぎ込まれる様な場合は至つて少くない譯で有るから、其建物の筋々に依る消長は免れないので有る。

今日の建築家は、大部分の人は百貨店式に何でも引請主義にやつて居るが、最早時代は追々と專門的な權威を要求する時代に入つて居るのではないかと考へられる。尤も綜合的な各權威を集めた大建築事務所の様なものが有るとすれば、自らそれは別問題である。現に最近東京方面では事局對策として、建築事務所の合同が畫策されて居るやにも聞いて居る。どちらかと言ふと斯うしたものが今後は要求せられるので有つて、個人々々のアトリエ式のものは特種のもの以外は、經營に非常に骨の折れる時代に入つたのではないかと筆者は考へて居る。

回顧すると昭和12年は、社會的にも亦經濟的にも、決して平穩無事な歲ではなかつた。前年末の鐵材その他建築材料の異常な騰貴に始つて、急に鐵饑饉の呼び聲が盛んになり、業界人の鐵に關する關心が、嘗て無いデリケートさを示した。一時的だと言ふ者も有れば當分は如何ともならぬと悲歎する者もあり、巷說區々の內に日を送る內端なとも支那事變の勃發となり、最初は不擴大と當局も國民も考へて居たものが、北支から遂に上海まで擴がる一方となつた。

臨時議會の召集、多額の軍事費の決議、資金調制法その他統制的戰時立法の成立、鐵工作物許可規則の發令と次から次へ戰時色は濃厚となる許りである。かうした社會的經濟的な大變調に終始した昭和12年が、色々の點に於て吾が建築界に影響し、吾々其業にたづさはる者にも深刻なものを感じさせられつゝ有るは、元より當然の成行である。

一般に世間では、建築物は大半一種の贅澤品位に考へて居る人が可なり多いのでは無いかと思はれる。當局を始め一般にも此觀念は相當深い様に認められる。大部分の建築即ち生產擴充殊に事局に直面して必要止を得ざると認められる以外のものは、如何でも成る物の様に考へられて居るらしい。

官廳方面の訓示事項を示した印刷物をみても、眞先に「家屋の新築增築は此際見合せる様」と、頭から建築の禁止的文句が印刷されて居る。果して建築とはそんなもので有らふか。自分のタツチして居る仕事の上に於ける、單なる利害關係や職業意識を離れて、公平な立場から觀て、かうした頭から禁止的な訓示には、非常な物足りなさを感ぜざるを得ない。一般に建築といふものは、全く贅澤に造るもので、場合に依つては如何にでもなるものゝ如く思はれて居るやの感が有るからである。此場合「贅澤な家は遠慮せよ」「務めて

實用的にせよ」「鐵材を節約せよ」「國産を愛用せよ」ならば分るが、頭から建築の如何なるものなるやも理解せざるが如き口吻で、新築改築まかりならぬと言はれたのでは、業界多數者は全く助からないので有る。

國情が全建築を禁止しなければならぬ所まで差迫つたものならば——例令ば歐州大戰に於ける獨乙の様に——元より止を得ないので有るが、日本は未だ未だそんな處まで行つて居らぬのでは無いかと考へる。出來るだけの要意をするのは元より大切な事では有るが、頭から禁止的な言をいはれたのでは、さなきだに枯渇を憂ふる建築界にあつて大きな打撃と感する。

此大勢は此先如何開展するのか、それは事變その物の終局が、今日からは如何とも豫測を許されない限り、何人にも何とも言へぬ譯であらふ。設計者と請負者と材料業者との如何を問はず、建築界には色んな宿題が遺されて昭和十二年も暮んとして居る。折角各位の努力を希望して止ない。(了) (12.12.1)

昭和十三年への展望

モトノ●セイゴ

昭和十三年への展望に就て私は餘り多く言ふ事を持ちませぬ。今支那の抗日に對して敢然立ち上つた吾等は國を擧げて其の事に從つて居る。この事變はやがて來るべき世界平和への一つの階梯であらう。けれども其の道程には世界の一切が一旦は渦中に投ぜられる程の大變亂への前程ではあるまいかとさへ思はれる。若し今の事變の眞相が吾等の祖先から傳へられた魂の世界と今世界の一隅に發生せる唯物的世界觀との抗爭であるならば其の抗爭は唯物的世界觀が姿を消す迄は續けられるであらう。建築が用の上に立脚したる魂の表現である以上吾等は斯る情勢を度外視して建築に就て考へる事は出來ない。

今我國の一切は戰時の色に塗り變へられつゝある。建築の世界も亦其等と軌を一にする斯る情勢の間にあつては靜かに建築の外的表現を味はふ事の餘裕を吾等の內に見出さぬ。斯くして斯る情勢が永久續けば續く程、そうして又强まれば强まる程一切は一色に塗られるであらう。若し斯る情勢が極度迄に到達すれば今迄の建築に對する旣成觀念は一旦全く崩壞するの已むなきに立至るかもしれない。が然し乍ら此の旣成觀念の崩壞と云ふ事は建築界に取つては寧ろ悅ばしき現象であらねばならぬ。何となれば吾等は旣成觀念の殼に包まれて身動きならぬ迄にしめつけられて居るからである。一つの事柄が成熟したる殼を破つて新らしき天地に踊り出る事は容易ならぬ事である。今日の情勢は斯る機會を建築の世界に與へんとしつゝあるのではあるまいか。

物事が混亂し或は停滯し或は腐癈したる時一切を一旦零に還元し、無から新たなる歩みを初めると云ふ事も時にとつては一つの好き手段である。私は日本の現狀が必ずしも混屯と停滯と腐敗とに充ちて居ると云ふのではない。けれども淸算さるべきと思はれる者も相當に多分に存在し、而かもそれ等が敎養の途上にある人々に向つて或は毒素となり、或は魔睡劑となりつゝあるのではあるまいか。斯る時機に際し、一旦一切を單色に塗り、而して後再び眞實に吾等の求むるものを其の中から築き上げて行く事は、眞實に道を拓いて行く爲めによき機會となるであらう。私は今一切が戰時色彩に塗られて行く事を建築界の爲めに悅ぶものである。國を擧げて重大なる時機に直面して居る時に際し建築界に關りを持つ吾等は一齊に來るべき吾等の建築に對して眞實に內省の道を辿るべきではあるまいか。私は今、自分の過去に歩み來りし足跡を省み、又今踏みつゝある道程に內省の眼を向ける時、前に橫はる處の幾多の問題に直面して居る事を感ずる。

生活基調　構造材料　表現効果

等の諸の問題に就而私は今迄になされた經驗の上に更に考察を加へ、來るべき建築に對する用意をなす爲めに今は絶好の機會である事を感ずる。

時局下に希望をもつ

大倉三郎

1

今東洋の天地は妖雲たれ込めて暗く、吾等の同胞は硝煙の巷にあつて日夜身命を賭しつゝある。非常時の聲叫ばれてから既に數年、遂に今日の破局に直面してしまつた。これが結果であるか、何かの原因であるか、今後事變の推移については何人も答ふるすべがないであらう。吾々は眼前の事實を唯直視するより外はない。

吾國は目下「戰勝」を唯一の國家的目的として奔走してゐる。政治も、經濟も、產業もあらゆる社會的活動はすべてこゝにその機能を集中され、この目的遂行のためにのみ、その體制を變革し、整備しつゝある。昔の戰爭は唯兵火の戰ひであつた。それは陸海軍の勝負だけですんだのだが、近代の戰爭はそうでないと云ふ。外交も、經濟も、產業も一國全體の機構がその全力を賭して從軍しなければならない。即ち近代戰は全體戰であると云はれる。吾國は今や東洋に於ては最初のその全體戰を戰つてゐる理である。

全體戰は國家の總動員を必要とする立前から、個人や、團體の自由乃至利害はその前に縛せられねばならない。即ち事變勃發以來、臨時資金調整法案を初め輸出入品措置、外國爲替管理その他の重要六大法案となつて現れてきた。戰ひは何時まで續くか、相手はどう變るか解らない。どんな難局に立たないとも限らぬ。これには先づ戰費の準備が必要である。直接の戰費以外に、滿洲事件費もあり、一方國防充實費も益々要る。このために差當り軍需用以外の不急並に平和事業には一切金をかけない様に調整される。資源の乏しい吾國の物資や經濟力を維持、擴充するために輸出入品目や外國爲替は管理統制される。色々の物の使用は制限される。今日の情勢に於ては、すべてが國家特定の目的のために意識的に、計畫的に、物が生產され、配給されねばならないからである。自由競爭主義では達せられなかつた部分が、今日の時局では最も必要となつてきたからである。だから吾國の様な所謂「持たざる國」に於ては、尙更特定の目的のために、一方的動員と同時に、一方的犧牲が要求されてくるのは明かな結末である。

今政府は之等に萬全の努力を傾注してゐるのであるが、しかし之はまだまだ中途半端な統制であつて、これ以上は自治的統制をせよと云ふ。統制がどこまで進行するか、この際豫想は禁物であるが、或は「產業公化」とか「高度統制國家」とかの言葉が愈々問題となりつゝあることは、全く意味のないことでもないと思はれる。とにかく金と物と兩方面から國家全面的の管理統制をもつていよいよ戰時經濟體制を强化しつゝあるのが、今日吾國の社會的形相である。

この情勢が吾建築界に投げた波紋は大きい。建築は勿論社會全般の活動を背景としてゐる以上、平和事業のみが唯一の對象ではないが、軍需關係の建築は全般の建築事業の一割にも達しない小量であるといはれる。この正確な數字は遺憾乍ら今手元にないが、この社會情勢のために、建築事業は今大打撃をうけることになつた。不況の聲正に深刻に叫ばれてゐる所以である。この情勢が永く續くなれば相當の失業者、破綻者を續出しなければならないであらう。

藏相談によれば、今回の物の統制節約は所謂「撰擇的節約」であるといふ。この言葉は一般國民を指してのことであるが、しかし撰りに撰つてその撰擇に當つたものは全く全面的事業の停止に當面しなければならぬと同時に、一方には益々事業多端を極め、收入の增加する人々のあることも確かである。藏相は述べてゐる「——國民の各方面には收入の增加する向きも相當多いであらうと考へられます。こうゆふ人々が一齊にそれを全部費つてしまつたなれば、どうしても需要增加供給不足となつて物價騰貴が起ります。そこで私は時局によつて收入の增加する人は原則として收入が增加しても生活の程度を擴げないといふことが大切であると思ひます」しかしこの話は國民大多數にとつてはあまりにも緣遠いことの樣であるし、この時局に平和產業の沈滯は又止むを得ないことであるとしても、生活上の要求だけはある程度に與へ得られる餘裕のある「統制國家」でありたいものである

物の統制に就ては、直接鐵鋼工作物築造許可規則が響く、鋼の使用制限は代用品があるし、鋼でなければならないといふものは殆んどないが、鐵鋼は今のところ代用品が無い。その鐵鋼が僅か50噸といふ制限はまことに情けない。吾國に於ける鋼材需要の事業別消費調べを擧げると（單位千噸）

		昭和六年	七年	八年	九年
鐵道	數量	172	232	212	319
	指數	100	135	123	185
土木建築	數量	488	621	732	792
	指數	100	127	150	162
造船	數量	111	159	275	330
	指數	100	143	248	297
機械鐵工業	數量	344	662	1.009	1.003
	指數	100	192	293	292
石油．瓦斯水道	數量	49	60	132	70
	指數	100	122	269	143
鑛山	數量	39	38	65	130
	指數	100	97	167	333
其他	數量	289	413	266	404
	指數	100	143	92	140
合計	數量	1.493	2.185	2.692	3.048
	指數	100	146	180	204

（物の經濟より）

ある官廳の要人は大體建築などに今まであまり鐵を使ひ過ぎだと云つた。これまで多少その非難の言葉は甘んじてうけねばならない點もあつたかも知れぬ。しかし今日一般の建築には、主としてコンクリート造の場合に於て、構造強度上その價格を主眼として合成構造物の最も經濟的組成には堪えざる努力を忘れてはゐなかつた筈である。物それ自體の數量の問題ではなくして、價格と照應した必要數量の問題である。價格が上ればそれだけ鐵鋼使用量も減少を來すだけの用意は充分もつてゐる筈である。しかし今日の絶對的數量の統制に入つた以上、問題は自然消滅である。更に新聞紙の報ずるところによると、木材についても平和不急の建築使用量は、近くある程度の制限準備中であるとか。もし之が眞であるとすれば、建築界は全般的凍結狀態に入ることを餘儀なくされる。

今日法律による統制經濟の制約はかくの如く著しいが、唯これ等の法律に、何れも「臨時」といふ字が冠せられ、又は意味が附加されてゐることに注意せねばならぬ。唯この臨時なる意味は、大藏政務次官の言葉にもある通り「このやり方は無論臨時的のものであつて、事變がすみましたならば廢める立前になつて居ります。法律には事變の濟んだ後一年となつて居りますが、其の一年は今ある法律を整へる關係からでありまして、實體としては事變がすんだら廢める積りであります」（於京都商工會議所談）事變と共に終ることを立前としてゐることは明かであるが、その終了の限界がどこにあるかは全く不明である。あるものは之に反して相當固定化するものもあるであらう、又あるものは言葉通り臨時的なものとして、兵火の終了と共に解消するものもあるに違ひない。

更に大藏政務次官は述べてゐる。「資金調整法を見ますと、調整標準を甲乙丙と分けて金を貸すやうにする、積極的なものは甲であつて、反對のものが丙である。……乙の設備のものでも、だんだん設備が整つてゆけば丙になります。これではゆかぬといふものは丙から乙に上るものもある譯でありまして、特にこの事を決めます委員會に於ても、一定不動のものではない、時局の推移によつて變へてゆかねばならないと云ふことを申上げたのでありまして、云々」物に關しても同じ様なことが考へられる。唯この時一歩を進めて、その時局の推移によつては、國家として廣義文化の發揚の目的のために、物の配給統制に於て、その重要性の段階に充分の認識を以て臨んで頂きたいものである。少くとも一國の文化形成に重要役割をもつ建築については、物に關する絶對的制限だけでも一日も早く解消されんことが望ましい。

3

今こゝに吾國建築界の過去に於ける推移を一瞥するのも無駄ではないと思ふ。昭和十年春、故高橋藏相が「建築は景氣のバロメーターと見ることができる」又「吾國の建築事業に關する完全な統計的資料がないことは、建築資材供給の立場から見ても、景氣觀測上から云つても遺憾である」と語つたことがある。之は吾國建築界の大局から統計的觀測の機運を醸成した最初であつて、果してこの一言は吾が業界に大センセイションを捲起し、

各關係官廳や團體に於て、一齊に之が調査研究に乘り出し、昭和八年以降の統計的調査數字が續々發表される樣になつて來た。唯大正以前の業界については資料が皆無であるが、大體社會的出來事によつて分類しつゝ、明治以降の一般的推移を尋ねて見ると。

先づ第一期は工部省が設立された明治三年から十九年頃まで、專ら先進外國の建築を攝取した搖籃時代である。第二期は明治二十年頃から洋風建築の見る可きものがやうやく實施せられ、諸官廳の本建築に外國の技師の指導で日本の中心を形成した約十年間である。當時日清戰爭を契機として國運やうやく開き初めんとした時代の作品で、主として煉瓦造が多く、手法から云つても一般的に尙外國の模倣といふよりむしろ全く歐化の時代を拔け切らない。

第三期は明治三十年頃から大正初年迄の間で、この間には旣に日本建築家の手で有數の大建築が續々建設され、日本建築家もやうやく外國の盲目的模倣から脫して、獨自の立場から建築的計畫を遂行する樣になつた。この間吾國文化の益々隆盛に向ふに從ひ、社會的活動も愈々活氣を呈し、之に伴ふ諸官廳の建物は勿論、學校、病院、公會堂、會社、銀行工場等盛んに建設され、今日の國家社會隆盛の基礎を固めた時代と云へやう。その末期には旣に鐵筋コンクリート造も實施されてゐる。

次で大正中期に於ける七、八年間には歐洲大戰の餘波をうけて、吾國社會一般に大景氣が到來したことはまだ記憶に明かなところである。吾國の資本主義機構は愈々圓熟して世界一流國に互すまでに發展し、產業界、工業界に未曾有の躍進を遂げた。その間物の動き金の動きはまことに目覺ましく、物價騰貴も突破して、吾國社會は伸展の一途を辿り、益々活躍をほしいまゝにした時代である。建築界一般は前期の踏襲といへ、構造方面に於いては鐵骨鐵筋コンクリートが愈々本格的に登場し、その理論を根底として高層ビルデイングが追々出現し、構造上の可能性をある程度に獲得した。之に伴つてその意匠樣式に於いても新時代の曙光が輝き始めた時代である。多年の懸案であつた議院建築がこの時に本建築に着工し、諸官衙、學校等も本格的計畫に乘り出し、大ビルデイング、百貨店、劇場、ホテル、工場など近代都市のあらゆる機能形態が備はり出して來た。大正八年には市街地建築物法も初めて制定されてゐる。之を第四期とするなれば、次に大正十二年突發の關東大震災を以て第五期の幕を開かねばならないであらう。

關東の大震災の經驗は、あらゆる意味に於て吾國建築界に劃期的進展をもたらしたことは多言を要しない。技術方面に於ては特に構造計畫に於て多層架構の耐震理論やコンクリートの調合、施工等に續々と新しい研究の成果が發表され、材料規格や、施工基準等の施定、建築物法の整備を初め、新しい建築技術の啓蒙普及と共に着々實施された。之によつて吾建築技術は全く世界一流のレベルに達したのである。

帝都復興の大事業はかゝる新しい技術の基礎の上に築かれ、各地方大都會に於ても之に應じて都市計畫事業は續々促進遂行され、建築の增改築せらるゝもの目覺ましき多數に上

り、各都市共こゝに全く近代都市としての面目を更改するの著についた。

抑々全國の諸官廳、學校、病院、工場、商店等の建物は、第三期の明治三十年乃至四十年前後に木造又は煉瓦造を以て建築されたものが大部分で、之が大正末期頃やうやく老朽の域に達したのみならず、時代變遷に遭遇して最早使用に堪えざる狀態となつたゝめ、丁度關東震災の復興大計畫と時を前後して、一齊に改築、新築の要求が叫ばれてゐたのであつて、更に之に加ふるに新時代の社會的活動は、經濟、產業、交通を初め、或は社會施設娛樂、スポーツ等に新しい躍進をもたらし、すべてが近代的意圖の洗禮をうけ、新しい構築を以て新裝されねばならない要求に迫られたのである。

土木方面では交通網の充實、港灣の構築を初め、都市計畫事業に伴つては道路の鋪裝、河川改修、橋梁の架替へ等續々新計畫が實行され、建築に於ては中央官衙はもとより、之を地方官廳に見ても近年改築されたる府縣廳、市役所等は約その三分の一以上に達してゐる。政府が救濟事業として各地方における此等事業の起債を續々認めたのも手傳つてゐたのであるが、同じ樣なことが銀行、會社等に見られた譯で、更に全國に一萬以上を數える小學校が大震災や過般の風水害の經驗による鐵筋コンクリート造化への傾向があり、一方都市のビルデイング、百貨店、商店、停車場、劇場、工場、病院、ホテル等の改築、新築は目覺ましい限りで、吾建築界は過去何れの時代にも見られなかつた大躍進を僅か十年位の間に經驗したのである。昭和五、六年頃の緊縮時代に官廳方面ではやゝこの建設事業は一時小康を呈した觀があるが、一般の趨勢は略之に關せず今日に至つてきた。この間俄然として昭和六年の滿洲事變が勃發した。

歐洲戰亂、更にロシヤ革命以來、約二十年を經、こゝに歐洲の天地は思想界、政治界に一大轉換を來しつゝ、再び風雲不測の急迫を豫想せらるゝ情勢となつてきた。一はこれ等戰亂のあとくされに多くの遠因ありと云へ、思潮の流れは近代科學文明の大發達と共に一大奔流と化して、全世界を二つの交叉する渦卷の中にたゝき込んでしまつた。思想の對立有つものと有たざるものとの張合ひは斷じて相通ずるところがない、障壁はいよいよ高く平和の波を押返してゐる。受身の戰法では最早收拾できなくなつてきた。そして滿洲事變から次で、國際聯盟の脫退、上海事變と推移するに及んで、今日の吾國はかつて經驗した如何なる時代よりも大なる劃期的時代相に當面してゐると云へやう。之を第六期と云ふより、むしろ滿洲事變以後を新しい第二期とすることが出來る。

國家的統制は既に滿洲事變を轉機として、日本精神の興揚に初まると云つてよい。やがて日本精神を加味せうとする建築が自覺的に初まつてきた。その精神の具現形式については多くの議論はあつても、その精神を基本とする趨勢は今日の建築樣式上の一つの相となつてゐると見ることができる。この間軍需工業、人絹工業の躍進に從つて、工場建築が急激に增大してきた事も耳新しいところである。

昭和十一年末政府はいよいよ彭大豫算を閣議にのせんとするや、鐵鋼材は全く驚異的大

騰貴を來した。政府は之が對策としてあらゆる手段を講じつゝ、尙極力軍需關係の需用に向けつゝあり、一般の各種工事亦價格の暴騰にもめげず、着々計畫され實施されつゝ今日に至つた。そして遂に今回の支那事變勃發と同時に大障壁にぶつかつてしまつた。やがて昭和十二年も早や倉皇の中に幕に近づきつゝある。

事變は何時まで續くか、建築界の冬眠狀態は何時解消されるか。

皇軍の目覺ましい奮鬪に依て、豫想外に早く著々と所期の効果を收めつゝある今日、遠からず兵火の戰ひは一段階に近づくものと見てよさそうに思はれる。尤も事變直接の目的は達しても、これによつて今日の非常時局が全く解消されたとすることは出來ない、寧ろ時局は愈々多端なることを覺悟しなければならないであらう。しかし吾國の立場は既に再三政府の聲明で教えられてゐる樣に、東洋平和の根基と、在外權益の保護助成の確立に永久不拔の足場を固むる點にあつて、外に何の野心を腹藏しない限り、好んで自ら事を構えるは全く信じ能はないところ、而も吾國民性は古來平和と信義の愛好者であるは、あへて多辯を要せざる程人共に無言の中に信じ來つたところである。

一朝戰火矛を收むるや、友邦と共に吾が文化的建設に兵戰以上の努力を以て、協力を措しまざることは吾等が夙に提唱し、實行し來つたところである。歐洲大戰終るや、その戰後工作は早や平和協力の握手ではなくして、暗默の中に針を含む白眼世界を現出した。之は既に日本人の心理ではない。大手術のあとくさりは綺れいさつぱりと解消して、平和と繁榮の文化建設工作こそ戰後唯一の關心事でなければならない。かくして資源の開發は持つものへの高度經濟へ移行し、吾國を中心とする東洋の一部に撩亂と文化の開花すべきは早や時の問題に過ぎない。

今日の妖雲はやがて日本晴れの躍進への展望とならねばならない。世界の中心は既に大西洋を去つて、太平洋時代に入ると云はれる、この時代こそ明治以來の第六期ではなくして、新紀元を劃する新しい第二期への飛躍とならねばならない。

昭和十三年を以てその第一年を迎え得るかどうか。新時代のリベツトの音を耳朶に想望しつゝ……。(昭和12.11.23)

時局に際して建築技術者の抱負と自覺

酒井勇三郎

土木建築事業は國家非常時ですら、不急の事業の如く考ふる認識不足の爲政者もある位であるから、まして國家の非常時局に際しては、何等の制限抑壓が無くとも相當不振を來すことは止むを得ざる所であるが、今時の支那事變に際しては、過去の國難非常時に於て嘗て行はれた事の無い統制抑壓を加へられることとなつた。時局はそれ丈け過去のそれよりも一層重大性を物語るもので、萬止むを得ざるものではあるが、今度の統制抑壓は、臨時資金調整法に始まり、これに關聯する鐵鋼工作物築造許可規則、臨時輸入指置法、地方債許可制强化等、土木建築界に未曾有の抑壓統制が加へられた譯である。何等の抑壓統制を加へずとも、斯る非常時局に際しては、緊急缺くべからざる事業以外は自然に統制せられて、土木建築界は一時若干の不振を免れなかつたが、今回の如き統制抑壓强化の下に置かれた以上、建築界今後の不振萎微は蓋し甚大なるものがあらうと思はれる。

此の時局に處する當面の問題は建築當業者の直接講究を怠らざる所であるから、予は茲に精神的の方面を少しく述べて見やう。世上の通弊として事業閑散の折は兎角安逸に墜して、研究努力を怠り、事業の勃興隆盛に及んで實力の不足を悔み、或はその適任者なきを歎じ俄に研讃に着手し、應急糊塗を敢てするが何れの事業に於ても之れ皆然りといふ狀態である、學生生徒の應募狀況に於ても、その當時の好況學科に對して志願者は案中し、激烈な競爭を實破して入學した秀才も、卒業頃には經濟界の逆轉を來し、職を求むるによしなき皮肉の狀態が常に繰返される事實である。また夜學校の如きも、事業閑散で勉學に充分餘裕あるべき際には志願者極めて少なく、事業界多忙を極め勉學の餘裕は容易に求め難き場合に必要に迫られ、心身の無理を忍んで通學するか如き矛盾の行爲を敢行するのである。斯く觀じ來れば、全く泥繩式處ではなく、新名君の所謂盜人を捕へて稻を植える類か否種子を播くの類で、全く刹那的の盲動とも見られ誠に寒心に堪えない。

國家百年の大計たる實業教育事業の如きも、今日の非常時局の到來は既に自明の事實であつた。然るにその施設は全く盜人を捕へて種子を播くの類で、今日の體たらく、應急糊塗より一步も出でず、それでも爲さゞるに勝るものとして、自ら慰むるか如きは誠に沙汰の限りであるとの批評も甘受せざるを得まいと思はれる。

遠き慮なければ近き憂があり、未だ雨降らざるに庇は設けらるべきもの、機會の到來は、遁がさず捕捉すべき萬端の準備は平時に整へ置くべきものである、今や大なる機會は將に吾人の窓を窮はんとして居るのである。

常時に於ける經濟界にも不斷好不況の浮沈があり、殊に過去に於ける我が帝國の非常時

は、それを劃界とする一大飛躍時で、我が帝國發展の障壁突破であつた。日清戰爭然り、日露戰役然り、歐州大戰亦然り、此等大國難非常時の後に於ける、我が建築界の發展進歩は實に目覺ましきものがあり、殊に關東大震災は誠に高價な犧牲ではあつたが我が建築界に曠古未曾有の得難き實驗を提供して、所謂轉禍致福の諺を如實に實現して、今日の偉大なる發展を促進せしむるに至つたのである。

飜て我が國の將來を達觀するに、今日の時局は實に遠き慮りの結論逆行で、非常時中の非常時、此より大なるものは過去には勿論無く、將來も亦あるとは思へぬ時局であり、從つて其の後の我建築者の活躍舞臺は擴大せられ、その使命も實に大なるものがあるのは、決して識者を俟つて知る所では無い、その時に際會して自己の實力の不足を歎じ、その使命を果すべき任に當るもの自ら省みて不安を感するが如き事があつてはならぬ。機會は再び來るものでは無く、この到來すべき機會に處する爲め、今日國家統制の抑壓下に於て一時不振の狀態に置かるべきその時局を善用して、豫め來るべき機會を捕捉すべき充分なる準備を整ふべく有らゆる努力を傾注して研鑽相勵み、萬全を期するこそ我々の責務であらねばならぬと思ふ。

時局の重大性を確認し、我が國民に課せられたる大なる使命を自覺し、其の抱負を實現すべき確信を促す爲めに、更に他面より今少しく述べて見やう。

西歐の諺に「支那の一世紀より歐羅巴の五十年」といふ誠に誇りがましい言葉がある、これは支那一世紀の進歩發展は歐羅巴は五十年で爲し遂げ得るといふ、其の優越性を誇つた格言であるが、我が帝國民をしていはしむれば「歐米の一世紀は我が帝國の貳拾五年」と云へ得ると思ふ。

嘉永六年六月米艦浦賀灣頭に現はれて以來、我が國民は三百年長夜の夢より蹶起して、努力奮闘を遂げた結果は有ゆる世界の文明を攝取し、咀嚼し、同化し、以て我が帝國の偉大なる文明を成就した、即ち歐米人が三世紀も費した努力進歩の道程は、我が國民は僅々七十年の短年月を以て此に追ひ付き、否これを凌駕する域に達したことは決して誇言でも空言でも無い。

更に眼を世界文明の潮流に轉じて見るに「太陽の視運行と其の軌道を一にする」といへ得ると思ふ。甚だ突飛な奇を好んだ言のやうではあるが、今日世界の人類に多くの福祉を齎した物質文明の潮流は、太陽の運行と等しく東より西に流れるものと見做し得ると思ふ勿論その運行の道程に於ては、激流の渦紋は方向の不明に屬するもの、一箇所に停滯するもの、或は逆流と見るべきもの、其の他隨分複雜多岐に亘るものもあらうが、これを達觀すれば必ず其の方向の大勢は誇らざるものと認められる。

元來世界文明の發祥如何の穿鑿は學者の研究に委ね、假りに東西兩洋の中間斯波の沃野近傍に萌芽發達したものと假定し、一派は東に向つて印度より支那に達し朝鮮を經て我が帝國に及び東洋人の思想界に偉大な貢獻を齎し、人類福祉の增進を來したが太陽の運行に

逆行せるもので今やその進展は停頓の狀態に置かれたものと認めることも出來る。

他の一派は東より西に流れて土耳古に移り、希臘に渡り、更に羅馬帝國を席卷して西歐大陸に瀰漫し、遂に西班牙を經て遙に大西洋を彼のコロンブスに依つて亞米利加大陸に移植せられた。この文明の潮流が更に嘉永六年太平洋を橫斷して、米艦の渡來となり、我が帝國に齎され、帝國發展の導火線となつたもので、主として物質文明に屬し所謂二十世紀の文明として世界人類の福祉に貢獻して今尙赫々たる光明を放つ太陽の運行に伴ふ文明の潮流である。

斯くして此潮流は地球上を一周して其の終端を我が帝國に留め、茲に東西文明の結合融和を來すべき所謂文明革新の秋が到來したのである。換言すれば東西文明の二大潮流は我が帝國に於て融合統一せられ、新に精神物質文明を一大坩堝に投入せられて、有ゆる文化的要素を鎔鑄陶冶し、以て未知の新元素を分析摘出し、若しくは合成化合せしめて貴重なる合金を創造するが如く、過去の文化を蟬脫して、新に我が帝國民に依つて眞の世界文明を建設創造せらるべきで、直言すれば、眞の世界文明の發祥地は我が日東大帝國であり、その創建者は我が日東君子國民であり、日出づる君子國を起點として旭日の隆々たる如く世界の人類を其の文明の惠澤に浴せしむべきであつて、眞に世界の平和を實現して我が日東帝國民の傳統的大理想を實現すべき機會が到來しつゝあるので、今や國民奮起の秋であり、決して時局は單に現時の國難では無く、此の時局を突破して更に來るべき、我が國民の理想實現であらねばならぬと思ふ。

此を我が建築界のみに就て更めて考察するも、東西兩洋の建築を充分理解し融合統一し更に發展せしめ、世界の文化に貢獻すべき有らゆる資料は既に我が帝國民の腦裏に永く培はれたる素質であり、我が國民を除てはその使命を果し得る素質と抱負と自覺とを有する國民は決して他に求め得ざるべく、更に時局に伴ひ新に建築界に投ぜられたる容積に對する諸問題の研究併に解決の如き、其の使命は播種者として此を收獲すべき權利と責務を有するもので、益々奮勵努力を要する秋である、從つて建築技術者は、今日の時局に鑑み一時の不振を忍び、我が國民の使命を自覺し、遠大なる希望に燃え、奮起精勵、其の責務を分担し、世界人類に依つて未だ嘗て顯現せられざる創造文化の爛漫たる美花を我が東洋に開かしめ、豐潤なる成果を收めて人類の福祉に貢獻して爰に所謂金剛石文化を完成し、新興日本の意氣を世界に發揚し、嘗て先進を以て誇りし彼等をして、我が後塵を拜せしめねばならぬと思ふ。若しそれ斯る大任を果して我が國民が完成し得るや否やとの疑念を抱くものありとすれば、そは莊子の所謂蜩と鳩鳩の徒で大鵬九万里の大搏を自己の微力を以て忖度するもの、共に日を同じうして談ずるに足らざるものである。

建　築　家　の　再　認　識

山　口　儀　三　郎

1. ま へ お き

新しき年を迎へるに際して全く何物をも感じない人は恐らく絶無であらう。然し其の感じる事は人によつて皆異り之が完全に他人と一致する事も亦事實上あり得ない。他人の異つた意見を拜聽する事は非常に興味の有る事でもあり又時に思はぬ啓發、暗示を受ける事もある。建築と社會の新年號にも先輩諸賢の各方面からの各異つた有益な御意見が揭載される事と思ひ今から樂しみにして待つてゐる次第であるが、不肖私にも愚見を開陳する機會が與へられたので、何等の取柄の無いものと卑下し乍らも、喜んで筆を執り私の建築界に對する昭和十三年度への期待を若干述べる次第である。

建築を單に『衣食住』の住の問題に對應するだけと考へられた昔もあつたが、今日に於ける建築は住は素より更に進んで生産手段として、販賣手段としての重要な要素となりつゝある。又一方建築は其の國文化の程度を表徵するものとしても又外敵に對する防衛手段としても實に重要な地位をを占めてゐる。建築學が幼稚であつたり又は之に對する國民の理解が乏しくて、貧弱且つ不完全な建築物しか持たない國民は、不衛生なる生活狀態の下に産業の能率も不良不振に陷り、國外からは輕視され、國家間の實力爭闘に於ても一たまりも無く潰滅されて了ふのである。斯く考へる時は吾々建築家の任務は實に重大であつて何とかしなければならないと言ふ感じが、ひしひしと身に迫つて來るのである。茲に於て私は二個の問題に遭遇する。一は、現今に於ける一般民衆の建築に對する認識は果して充分なりと言へ様か、これで良いだらうかと言ふ事と、他面建築關係各特に請負及び建築事務所等が從來取り來つた營業其の他の組織なり態度なりが果して今時代に順應し適正であると言へ様か、其處に大なる變革の必要が無いのであらうかと言ふ事である。

2. 一般民衆と建築

建築學の長足の進歩、建築業界の革新と相關聯して是非共必要な事は一般民衆の之に對する理解と認識である。之無くしては如何に勝れたる建築理論も之を施すに其の機を得ず又如何に合理的な業界の組織も之を發達せしめる事を得ない。其の意味に於て吾人は先づ一般の民衆に向ひ建築物の持つ重大性を認識せしめ之に對する正しき理解を求めなければならない。

今日建築に關する通俗的の書籍は頗る多い。一般民衆に對して建築學の常識化を計る點に於て誠に結構な事であり將來益々其の傾向の盛なる事を希ふのであるが、世上動もすれ

ば單に其等の數冊を讀破することにより、直ちに充分なる建築知識を得たりと過信し、自己を以て一流の建築家以上のものと妄想、正統なる建築家の援助を無用のものとし自ら建築物の設計、施工監督等をなし得意然たる者あるの傾向も見逃す事が出來ない。常識は何處迄も常識であり正統なる學術とは確然と區別しなければならない。斯る不確實なる知識に基いて出現する建築物は、其が住宅にせよ商店にせよ、將又工場にせよ其の機能低劣にして然も過多の勞力と材料とを要し、其の人のため又國家のため、人的に物的に、不經濟極りない場合を屢々目擊する。私は之等の傾向に對しては重大關心を禁じ得ない。之等の多くは建築に對する認識と理解の不足から生ずる一適例と言はずして何ぞ。

元來建築に對する一般民衆の認識不足の罪は、其の大半を、建築に對する何等の深き學術、技能をも持たずして自ら建築家然として營業を營む所謂自稱建築家の罪としなければならない。所謂自稱建築家の一部のものは、事實に於て其の有する知識は通俗書の領域を一步も出ない場合が決して尠くない。通俗醫學の書籍を如何に數多く讀破しても決して醫師となり得るものでない。通俗醫學の書籍は素人療法を奬勵し以て醫師の不要を說くには非ずして、之により少しでも一般民衆の醫學常識を高め以て治療に際し醫師に良く順應せしめ然して治療の目的をより良く達成せんとするにある。建築常識の書籍も之と同一であり建築を良く諒解せしめ以て良く建築家に順應せしめるものでなくてはならない。

建築に對する一般人の認識を是正せしめるには、著書もさる事乍ら、何と言ふても建築學を携げ一般人に接觸する者即ち世の建築家が、一般人を信服せしむるに足る充分なる知識經驗の所有者でなければ、到底之を望み得るものでない。然るに今日の吾國は建築家たるに對して何等の資格をも規定して居ないから、如何なる人が建築家なりと自稱して如何なる重大な建築事務に關係し樣が、之を防ぐ何等の方法をも存しないのである。尤も建築法規によつて空地、高、構造設備、强度等は手落なく取締られては居るが、之が反つて一般人をして其等の規定を心得える事が建築學の大半を占むるとの謬見を抱かしむる傾向あるを奈何せん。私は一般人の建築に對する認識を是正し、不健全なる建築物の出現を抑壓し以て國家百年の計に資するには、建築家に對する資格の規定即ち建築士法の制定こそ最も有効適切なりと信じて疑はない。

3. 建築家の二大別

建築に對する充分なる知識經驗を有する者を玆に漠然と建築家と稱し、之を二大別して見る。但し傍系關係者即ち建築材料商、附帶工事關係を暫く度外視する。建築家の日々の業務が營業的なると非營業的なるとによつて分くれば

A、營業的 ｛建築事務所關係者
｛請負關係者

B、非營業的 ｛建築行政關係者
｛官廳、會社等の營繕係
｛學校、研究所等の職員

同じく建築家であつても、現在の社會機構に於ては、上記營業的、非營業的の區別は極めて根本的であつて、之を考慮せずには建築家を論ずることは出來ない。

4. 非營業的建築家への要請

この部類に屬する建築家は、形式は各異つては居ても、等しく已が有する建築學を通じて、國家なり會社なりに最も有効に盡さねばならない。之等の建築家の地位は多く組織立つて居り、其の職務關係も自ら明瞭である。必要に應じて營業的建築家と連絡をとるの外他念無き筈である。然るに自己の立場を忘れて營業的建築家類似の行爲をとる者あるは誠に慨嘆に堪へない。主旨として營利が目的で無いとは言へ研究の美名に匿れ營業的建築家の領域を荒す事は、其れだけ營業的建築の地位を脅し業界の圓滿なる發展を阻害するものである。此の傾向が增大する時は其處に由々しき社會問題を生ずる。一面それだけ自己の本分を怠る事となり、會社を僞り國家を詐害する事になる。素より私は非營業的建築家が營業類似の仕事をする事の全部を罪惡視するのでは無いが、之を社會の通念に照し容許し得る最小限に止める可き事を要望するのである。私は偶營業的建築家に赴かんとする其建築主が、絶えず營業的建築家の一部のものを誹謗しつゝある其非營業的建築家の甘言によつて、何れに赴く可きかを迷はされて居る事例を目擊し、社會的義憤抑へ難きを經驗した事がある。其場合に於ける營業的建築家と非營業的建築家との建築技術の優劣は暫く惜き其の行爲が建築界の圓滿なる發達を阻害する點に於て、建築家として其の罪正に萬死に値するものと思ふ。此の場合に於ても建築士法の制定を一入希ふのである。

建築界が圓滿なる發展を遂げてこそ社會に完全なる建築物が生れるのであるから、非營業的建築家と雖も此の點に向つて大いに協力せねばならない。

5. 建築事務所の使命

建築事務所は建築物の設計其の他の事務を爲す事によつて相當なる報酬を得る事を目的とするものであるが、少數の例外を除いては、經濟的には甚だ惠まれない狀態にありはしないか。そして其が自己自らが招いた狀態では無からうか。元來建築物の設計は科學的、智能的且つ藝術的の創作である。從つて其價値は決して之に要した材料や時間の數量によつて判斷す可きものでない。其の價値は設計自體の持つ內容の價値であらねばならない。然るに今日設計の價値即ち設計料は其の工事費の幾パーセントとか或は圖面の枚數等に準據する場合あるを聞く。然も他の營業者と競爭の關係上、自ら進んで、或は餘儀なく値下げに値下げを重ねる場合あるを知る。然も斯くして得る報酬は僅小にして、仕事の杜絶へた時機を經濟的に苦痛なく乘切るに充分でない。此の事は間斷なく仕事の連續する事を必要とし、其の爲め更に不合理なる同業間の競爭を生じ結局報酬値下げの傾向を增大する。全く共倒れの競爭であり自繩自縛も甚だしい。斯る狀態に於ては責任の有る優秀なる設計は期待する事が困難である。

斯る狀態が生ずるのは、一般人の建築に對する認識の不足が主因であるとは言へ、一面建築事務所の責任も亦大なりと言はねばならない。

建築事務所は其の業務の性質上もつともつと權威を持たねばならない。權威を有する爲めには其の業務に關し事毎に一般人を信服せしむるに足る實力と實績を擧げねばならない其の爲には其の業務を現在より、もつともつと專門化し、自己の事務所の專門外に屬し、自信無き業務は之を謝絶する樣しなければならないのでは無からうか。そしてすべての場合に於て單なる目前の自己の利慾を度外し、場合によつては依頼者の單なる主觀的意見は之を叱正し、眞に國家社會の大乘的利益のため所謂設計報國の誠を盡さねばならないのでは無からうか。斯くしてこそ遂には吾人の理想とする建築界が生れるのでは無からうか。

6. 請負界競爭の緩和化

建築請負界の競爭は事務所方面にも增して激烈である。此の競爭のため請負界は多年苦められて居り之が高度化すれば共倒れは必要であるにも不拘之に關し別段何等の方策の施されつゝあるを聞かない。競爭も其の餘地の有る場合は甚だ結構であるが、今日の請負界に其の餘地が有るであらうか。

元來建築請負は一定の圖面、仕樣書に基いて工事を完成するのであるから、多少の出來不出來はあるにしろ、請負人が異つても結果は大體同一の筈である。故に註文者は少しでも低額の相手方を撰ぶ關係上、競爭を餘儀なくされるのである。然し理論上同一材料により、同一程度の工事をするには誰がやつても其の建築費は同一の筈である。元來建築請負は衆人公知の單價の材料を使用し、公衆の面前に於て一定の物理的仕事をするのであるから秘密工場に於て秘密原料により製品を製造する化學工業の樣にボロイ儲は全然あり、得ない。又一面比較的小資本でも營み得る關係上競爭相手は遠慮なく增加し得るに對し、工事の方は斷續極りない。材料の購入方法を工夫して見ても建築費を左右する程のものでもなく、又施工の方法に於て特種な方法を考案し能率を上げて見ても、公衆の面前でやるから、直ちに同業者は易く追從する。故に請負界に於ける競爭は血の出る樣な競爭であり、結局自分の身をつめる以外の何者でも無い。

以上の次第であるから業者は自他の正當なる利益のため適當なる協定へと進まねばならない。協定の最も完全な形態は、業者同志の合同合併と合理的分業化である。之は今日の請負界には適合しないであらうか。請負によつて一擧巨利を得ようとする事は全く不可能であつて、之を目企するの士は建築請負界から一刻も早く退く事を要する。地味に眞面目に共存共榮を希ふ者のみが今後の建築請負界に適する人物なのである。否社會の各方面を通じて皆然りである。斯く考へれば上記の考へも決して机上の空論では無い。

百步讓つて他の方法を考へる。

一の入札に於て幾多の請負人が群がり、各自の積算に基いて入札した結果が、其の金額

に於いて甲と乙とで二割も三割も異る場合が屢あるが、其の積算は明らかに誤謬である。感違ひ又は見積落しのために自己に落ちた工事は其の請負人を如何に苦しめる事か、又其が如何に悪影響を業界に齎すか。

又甲に於ては仕事の關係上過剰であり、徒らに倉庫の錆となりつゝある施工機械が、若し乙に於ては必要緊迫之無きが爲め工事に一大支障を來しつゝあるとしたら、之が國家として如何に不合理不經濟な事であるか。人事に就き又然りである。

又一人の苦境に立つ請負人が萬策盡きて企方無く爲す悖德行爲が、一般人をして請負人全體の信用を如何に失墜せしめ以て業界の發展を如何に阻害するか。

之等を未然に防止し安定せる業界を出現せしめるには、何と言つても業者間に於て適當なる共同機關を設けねばならない。尤も今日に於ても共同機關が全然無いのでは無いが、其の機關を少しでも上記の目的に近づけて行く必要があるのでは無からうか。

建築請負は正當なる最低以上の單價に於て、地の理人の和に於てのみ他と競爭を爲す可きである。重ねて言ふ一擧にして巨利を獲得せんとするの士は建築界を去る可きであり又此の社會から去る可きである。共存共榮こそ今後の建築界の常道である。

建築論壇のこと

中野順次郎

數年前に較べると最近建築界に於ける論壇はめつきり靜かになつて來て、何となく淋しい樣な氣がする。ある席での話しに二、三の人からこんな感想が出たが事實建築界の言葉は少くなつた樣に思はれる。

時潮と云へばそれもあらうが、一つには建築界に論議される樣な問題の種が次第に減つて來て適當な題目がなくなつたことも理由の一つではあるまいか。以前にも云はれたことであるが、最早議論の時代では無いどしどし新しい技術を實行して行くべきだとされたことから所謂實行の時代になつてゐるとも考へられる。

ある人の話しには、過去は合理主義の建築が研究されたが現今は既に新經驗主義の時代であつて、以前の樣な建築論議の必要が無くなつたのだと云ふがこれも一つの狀態を指摘してゐると思はれる。

こんなわけで建築の論壇が鳴りを靜めてゐる理由は種々に解釋されることは出來るが、扨てそれでいゝかの問題である。

コツ、コツ、と新しい建築技術の研究が積けられてゐると同時に建築家も社會と平行して活潑に社會生活をしてゐなければならぬと思ふが、技術に立籠つて建築家の立場を守ることはもとより大切の一面としても所謂建築家の狹いドグマに陷入つてはならぬのでは無いか。增してお互ひ同志の技術の批評を怖れてゐたのでは話しにならぬ。

進んでは建築家の立場から社會を刺戟しもつと積極的にやることがあれば大いに立働いて行くべきではあるまいか。

話しは少し歷史のことになるが、40年も前、ウキーンに起つた、セセツシヨン運動の頃「藝術(建築)は只必要に依つてのみ支配される」と云つた樣なことがホツトーワグナーの一派から唱へられると獨逸をはじめ大戰前の歐洲から日本へも新建築運動の波がやつて來た。それからである。

先づ分離派の展覽會やら創宇社のこと、關西には日本インターナショナルの動きがあつた。東京でＡＳ會、西で鐵扉社だとか、展覽會あり、講演會ありで誠にもつて若々しい限りであつた。

バウハウスを論じコルブツヂエを檢討する。或はアドルフベーネの合同的建築論あり、そしてオランダのデユドツクの比例論が問題にもなつた。

話しは前後するが大戰後の產業合理化が建築に及した影響も實に大きかつた。新興建築

の論ぜらるゝや先づ以て目的論が起り、續いて構造合理建築だとか、或は表現形式の合理化、亦、建築物機能の構成的合理化、となつて歸するところは建築の最大能率の研究に押進んだ問題として、生活最少限のことが建築國際會議の議題ときへなつた位ひである。

其同じ頃であつたか、日本趣味の問題が喧しく論議されて懸賞競技設計に對するボイコツトが起つたことがある、ジードルンクや都市の問題に於ける研究會があれば、一方には乾式構造から伸長形式の技術に至つて實に多く論議され且研究されてゐた様に思ふ。

斯くの如くにして一わたり舶來の合理主義が論議されてから今度は日本建築の認識論になつて來た。タウトがやつて來る。茶席のことや民家の研究熱は以前に增して盛んなものになつて來て、日本の建築家が日本的建築のよさを正しい常識として認識することになつたことも忘れてはならない論壇の賜である。

僅かに40年と雖も決して平凡ならざる半世紀の歷史と云ふべく建築界の1900年以後は實に論議の多く且進歩の瀝然たるものがあつた様に思はれる。

啓蒙時代と云へば確かに當つた言葉である如く過去の狀態は建築論壇の活躍に負ふべきものが相當に多かつたのではあるまいか。

斯くの如にして現在の有様を考へてみるに時の動きとは云ふものゝ決して過去の様に若々しく活潑の狀態であるとは思はれないのではあるまいか。勿論講演會にしても、展覽會或は研究會の有様が以前に較べると整理されて來て、建築學會なる團體の下に各種のことが統制ある機關の動きとして活動する様になつたことは悦ぶべきことである。之が爲めに無責任な論壇の跳梁を防げつゝあるとも考へられるから、あながち靜かになつたことを以て淋しがる必要なしとも云へる。が、併しもつともつと論じ合つてよいことがあることも見逃してはならぬのである。例へば、新しい建物の出來た際の檢討にどこか人目には悪く云はれて評判の悪い建物があつたとする。設計された建築家にすれば少くも相當の研究を積んで苦心の結果技術と、常識と、あらゆる點から技術家の責を果した積りであるに違ひないことが考へられるのである。

こんな場合に當の技術家も默つてゐるし批評する者も蔭でコツソリ酷評をすると云つた程度で少しも技術の交換もなければ進歩も認めることか出來ない場合があるのである。

增して社會一般の人に正しい建築的常識の推移を教へることなぞ夢にも出來ないのであつて誠に惜しい限りであると思ふ。

住宅の展覽會があつてもそうである。建物の好き嫌いや展覽場の空氣から殆んど批評することを避けて了つて結局は素人の購買率のよかつたものを以て建築家も認めなければならぬと云ふ様な狀態が屢々あるのである。建築家は技術を賣ることも考へる必要があると同時に建物の良否を大衆に判斷してやるべき大切な役目をも忘れてはならないのでは無いか。

今一つの例を百貨店にとつてみる。甲と乙の百貨店が肩を並べて街頭に表はれた。す

ると購買を目的とする大衆の客は直に以て購買心理の比較をする。そして買いよい店の方が何も彼もよくなつて來て遂には建築の價値を判斷する重要な要素が出來上るのである。何程購買心理は建物に影響することが大きいことは爭はれぬが、それかと云つて建築物全部が責任を負ふべきものでは決して無い。こゝに建築家の言葉が足りないのである、建築家がもつと明確なる批評なり判斷を下して置かないからこそ好い加減の世論が起るに至るのである。折角苦心の建築家の設計もこんな場合には實に氣の毒に堪へないものがある。

亦反對の例として官廳の設計になる建物でこれはどうも困つたものだと技術家お互が思つてゐても一寸論議し兼てゐると再び似た樣な俗惡極るところのものが實現すると云つた樣なことも起るかも知れないのである。

例りを擧げると却へつて云はんとするところを狹めて了ふが兎に角もつと論壇は大いに活躍して差支へないのでは無いか。

建築家が大きく伸びる爲めにも或は社會を建築的に敎導する立場からも優秀なる論議の繰返へされることが望ましいのであつてこれが建築家の仕事の中でも一つの重要なことであると思ふのである。

新工法への拍車

元良勳

年初に當つて將來への見通しを語る事は一つの吉例となつてゐるが、近頃のやうに社會狀勢の轉變が劇しく、それを推進して引く力が一體何處に在るのか判らないやうな狀態では、將來を展望して合理的に演繹して行く事は殆んど不可能に近いやうである。しかし現在吾々の上にノシかゝつてゐる色々な不利益な狀況、之れがオイソレと急には退いて呉れないだらうと云ふ事は、甚だ有り難くない事ではあるが、決定的の事實と考へて間違ひなさそうである。若しそうであるとするならば、勿論吾々は徒に悲鳴をあげてゐるべきではなく、此の苦しい現實に對處して、如何なる態度方法を採るべきか、之れこそ吾々に課せられてゐる最も重大な問題であると考へ度い。

業界不振の餘波を受けて閑散になつた或る設計事務所の所長が、此の思ひ掛けない暇が出來たのを勿怪の幸ひとして、所員は此の際理論の研究に精進せられ度い旨を訓示した、と云ふ話しを聞いて思はず手を拍つて之れある哉と叫んだ事である。閑になつても表戸を閉めず何うにかやつて行ける所は上々の部で、大部分は夲に腹はかへられぬと云ふのが實際の所でもあらう。しかしそれにしても此の所長の態度は實に見上げたものだと思ふ。此非常事態に處して毅然と建築家の眞骨頂を發揮して動じない所など、チョツと古武士的な奥床しさゝへ感じさせられる。下手に餘り褒める事は却つて其の人にも御迷惑の事でもあらうが、兎に角、近頃會心のゴシツプであつた。

若い頃には自分の與へられた仕事に興味を持ち、多分に研究的な態度でやつて行く人もやがては熱情を失つて全く職業的に生活に引きづられて行くやうになるのが世の常である此の事實に對しては社會の組織そのものも責任があるであらう。しかし、技術に携るものが修得した知識に固着して、自分の既知の技術のみを最後の防壘として生活を死守しやうとする、小我に執はれすぎたケチな量見に、主として原因してゐるやうに思ふ。

一體、世情の動き、技術の進展は、之れを不斷に推し進められて行く一つの流れとして見るときに、初めて正しく理解し得るのであつて、個々の作品は、要するに其の時々の斷面の一部分を見せてゐるに過ぎない。過ぎ去つた時の斷面を後生大切と持ち廻るのは此の澎湃たる流れを無暴にも堰き止めんとする、嘲ふべき行爲以外の何者でもあり得ない。

今は此の流れが他の壓力によつて堰き止められやうとしてゐる。建築用資金の制限、材料の騰貴並びに缺乏、等々の大堰堤が築かれてしまつた。つまり斷面が固定せしめられてしまつたのである。此處に吾々は足踏みをつゞけるべきであらうか？何等かの打開を講ず

べきであらうか？。

勿論、吾々に殘されてゐる唯一の途は、ダムを避けて別に水路を造り、以つて滯水を疎通せしめて、例へ細く共流れを絶やさない様に努力する事あるのみである。

聞く所によると、市電氣局高速部ではすでに無筋隧道の斷面を決定したと云ふ事だし、市の營繕でも梁の斷面を增して鐵筋量を減らす計畫をやつてゐるとの話しだし、筆者の關係してゐる市橋梁の方でも鐵材節約のプランが續々と考案されつゝある。之れ等の諸工案は今後共どんどん出て來る事と思ふし、又そうなければならない。此の中には勿論一時的便法の域を出てないものもあるではあらうが、全く工法上の新機軸として、技術史上に一飛躍を來すべき偉大な工案のある事も、充分に期待出來るのである。

とまれ、障碍物をして徒らに障碍物たらしめては、科學の名に對して吾々は申譯ないのである。障碍物を、却つて進歩への拍車たらしめてこそ、非常時技術者としての、眞の誇りと喜びが其處に在るのだと思ふ。　(12.11.25)

小　住　宅　へ　の　課　題

伊　藤　正　文

戰爭と住居の問題は、今吾々國民に、又建築家に、新しい一つの課題を與へようとするかに見える。我々は此新しい課題が成り立つものとして、此問題に關する過去の事例を顧みようとする。戰爭の慘過の最も甚しかつたフランス、更に、敗戰國たるドイツに於てはどうであつたか。

1 住居の拂底

大戰後、各國が最も惱まされた問題は、失業者の氾濫に次いで住宅問題（住宅の拂底）であつた。この戰後、住宅の拂底を來せる原因は、各國に於ける、夫々特殊の事情を除けば、大體次の如く考へられて居る。

戰爭勃發と同時に、建築界は、非常な衰微を來した。それは國家機能の一切が、戰爭の目的に動員され建築への資金が、停止されたこと、建築材料が軍事的目的に使用されたこと、等に資金、材料の困窮と共に、更に、戰時下に於ける心理として、新居の建築、或は舊い家屋の修繕すら見合はせる狀態にあつたが爲、戰時中新しい家屋の建築は殆んど停止され、ロンドン等では、建築業者の他職業へ轉職するものが、簇出したと言ふ。

こうした狀態のまゝで、戰爭終了と同時に、住宅の需要が急激に增大して來た。之は主として、戰時中抑制されて居た結婚が、平和の光と共に反動的に增加し、從つて世帶數が急激に增加せること、避難民、移民の歸國、戰後の俄景氣による勞働者の都會集中等に原因して居ると考へられる。試みに、フランス及び獨逸に於ける戰後の結婚數を、戰前のそれに比較して見ると、略二倍の激增を示して居る。

フ　ラ　ン　ス

年　次		結　婚　數
1913		312.036
（大戰　1914—1918）		
1920		623.869
1921		456.221

以下漸減の傾向を示す。

ド　イ　ツ

1914	（戰爭直前）	460.608
1919		844.336

1920	894.978
1921	721.330

以下漸減の傾向を示す。

この結婚數の增加は、言ふ迄もなく世帶數を增加せしめた。

1910年～1919年に於ける人口增加は、584.301 に過ぎなかつたが、世帶數の事實上の增加は922.305である。戰爭はかくの如く、一世帶當りの家族數を減少せしめたが、世帶數を著しく增加せしめ、その結果は住宅需給の均勢が破られ、歐洲主要都市に於ける「空屋」數は、次表に於ける如く激減し、やがて零に至つて居る。

パ　　リ

年　次	空　屋	全住居數に於ける割合
1918	7.427	2.6
1919	4.023	1.4
1920	760	0.27
1921	0	0
1922	0	0

猶、1921年パリ市會の住宅統計によれば、

五部屋以上の部屋數をもつ住居に居住するもの　12.030

一部屋以上の住居にあるもの　1.031.716

一部屋に居住するもの　401.374 であつた。

（1911年於ては365.820）

2　借家人の保護

こうした住宅の拂底に對して、フランス及ドイツに於いて採られた、借家人保護の政策を一覽して見よう。

フランスに於ける借家人保護の政策は、戰爭によつて、直接身體に、若くは財產に打擊を蒙つたものゝ保護を、第一の對象として居る。

即ち、國防の第一線に立つて、身體又は財產を危險に曝らした人々に對しては、家庭に關する凡ゆる煩しさから免れしむる樣、意が用ひられたのである。家賃の引上、或は恣まゝなる通告を免れるばかりではなく、家賃の支拂猶豫が許可され、又場合に依つては家賃の減額、若くは金額免除の特權をも與へられた事があつた。

ドイツでは1923年6月、借家人保護條令が制定され、家主の都合で住居の立退きが要求される場合には、他に適當なる住居が見付かるまでは强制的に移轉せしむるを得ず、又地方當局は可及的速かに適當なる住居を建設する義務を持つ等を規定し、更に昂騰する家賃に對して家賃調停事務所を設けて、借家人の保護に努めたのである。然し、政府のこうした努力にも拘らず、家賃の昂騰は如何にしても制禦する事が出來なくなつた。

パリに於ける家賃指數表の一部を抽出すれば下の如くである。

1920年		1922年	
3月	140	6月	200
6月	160	9月	200
9月	175	12月	200

ドイツに於いては、マルクの暴落に依つて更に彪大な數字を示し、之が對策として1920年及1923年に住宅施設の統制に關する法律を發して居る。

新住宅緩和法（1923年）の主なる條項は次の如くである。

A、建物、又は建物の一部を除去する場合は、前以て市當局の許可を得ること。

B、1918年10圓迄に住居用たりし部屋を他の目的に使用するを得ず（但市當局の許可ありたる場合はこの限りに非ず）

C、數個の住居合併の禁止。

D、空屋を生じたる場合は遲滯なく屆出ること。

E、市當局は空屋を徵發して、之を住居用として改變するの權限を有する。

尙1920年勞働大臣は强硬なる指令を發し、「居住者數に比して大き過る住居」、及「餘分のものと考へられる住居」（別莊等）に於ける空部屋の徵發を實行した。借家人保護に關する他の詳細なる對策規定は建築に直接關係なきものとして割愛するが、端的に云へば之等の法的規定は、應急的、且補助的便法に過ぎず、住宅問題の直接的解決は、云ふ迄もなく建築の勃興以外になかつた。

3 建築に就いて

建築材料の價格、運送費、賃銀等住宅建築に直接影響を及ぼす諸要素に就いて考察すれば、パリに於いては概略次の如き狀態にあつた。

建築材料卸賣價格

（1913年～1922年）指數ハ1913年ヲ100トス

年次	建築用材 床松材（1メートルニツキ）		床鐵骨材（100kgニツキ）		窓硝子（1枚ニツキ）		煉瓦（100箇ニツキ）	
	價格	指數	價格	指數	價格	指數	價格	指數
	（フラン）		（フラン）		（フラン）		（フラン）	
1913	192	100	24.33	100	83	100	83	100
1919	896	467	87.96	362	460	554	370	446
1920	1.068	556	124.75	513	442	533	370	446
1921	656	342	65.75	270	327	394	410	494
1922	633	329	60.29	248	312	376	302.27	364
1923	710	369	80.58	331	——	——	——	——

建築材料ニ對スル運送費（200キロメーター　佛トンニツキ）

材料名	從來料金	1921年ニ於ケル料金
	（フラン）	（フラン）
煉瓦並ニタイル	5.60——10.50	25.20
切石	4—— 7	20.40
板	7.50——10.50	31.20
石灰並ニセメント	4—— 8.50	25.20
漆喰（300キロメーター）	4——10.75	33.60
砂石	5.25—— 7	25.20
屋上用スレート	4.50—— 8.75	25.20
砂	3.25—— 6	15.20
鐵並ニ鋼鐵ノ斷片	6.65—— 18	33.60——43.20
金物	12—— 17	52.80
錠前用物品	18—— 27	74.40

建築職工平均日給　1921年（第一期）

職名	1911年	金額	指數（1911年ヲ100トス）
パリ	（フラン）	（フラン）	
煉瓦工	8.55	28.00	327
ペンキ工	7.22	28.00	388
大工	9.00	28.00	311
煉瓦製造工	5.00	18.00	360
他都市			
煉瓦工	4.80	19.72	411
ペンキ工	4.75	19.43	408
大工	5.05	20.24	401
煉瓦製造工	3.25	14.01	430

前表に示さるゝ如く、直接建築に必要なる諸要素は非常なる昂騰を來し、借家の建築に對する個人的投資は莫大なる資金を要するが故に極めて困難となり、又そうした經費に依つて建設されたものに家賃の統制が加へられる處がある時、營利事業としての借家の建築が殆んど停止せるは、又當然の事である。

かくして新住宅の建設は政府或は公共團體自身の手に依るか、若しくは政府の相當の補助を受くるに非ざれば不可能なる狀態に到達した。

獨佛兩國とも新住宅の建設は政府の統制の下に自治團體が之に當つたが、資金の不足を主たる原因として、その結果は必ずしも良好なものではなかつた。政府の補助金も亦決して潤澤であつたとは云へない。新住宅建設に關して幾多の法令が發せられたが結局經濟狀

勢の跋行的現象が解消されない限り、住宅問題は依然として、日暮れて道尙遠き狀態にあつたと云へる。

1918年ドイツ聯邦議會の通告に依る補助金に關する規定は、「小さな、或は中型の住居」に對し優先的特權を與へたものであるが、一年後の1919年聯邦政府の之に對する負擔は、（補助金は現金で支拂れる）6億5千マルクに達して居る。又建設費の殆んど總てが借款に依つて賄はれたのであるが、1922年アルサスローレンスに於ける住宅改築の爲の借款は、280.064.000フランに達した。

建築費の捻出以外に、建築振興方法として採られた方策には次の如きものがある。

ドイツ政府の建築振興方法

1. 免稅～1918年以後の建築物は免稅される。
2. 建築費を減少せんとする試み、建築材料生産の奬勵以外に、軍需品をして可能なる限り建築に利用せしめた。

   戰時中嚴重に行はれた鐵、煉瓦、石灰、セメント等建築材料に對する統制を繼續した。低廉なる、且勞力を節約し得る建築材料の發明發見の勸奬に努めた。
3. 建築敷地の開放

   政府所有地（軍部所有地、時には要塞すら）を小住宅建設に開放した。

   地方當局は建築用地の開拓を企て、道路敷設と同時に電氣、水道、ガス等文化的施設の完成に努めた。

   之等の方策と共に建築規約緩和も併行的に行はれた。

之等政府の對策に對して、ドイツでは戰後建築從事員自身に依つて、個人的利益の排除並びに共同組織を目的とする建築組合が作られたが、勞働組合の熱心な援助の下に、建築費を不當に昂騰せしめた投機的建築業者に對して勇敢なる挑戰をなした事は注目すべきである。

以上戰後の住宅拂底の問題に就き、獨佛の事例を極めて斷片的に想起して見た。

今後、內地に、或は北支に於ける重要課題として住宅問題が登場するか、否かは、云ふ迄もなく日本の將來に對する正確なる見通しなくしては、豫斷し得ない處である。

我々は、或は空爆に依る慘澹たる都市の殘骸を思ひ、戰爭と住居とが如何に關係深きかを思ふて、時局推移に、絕へず正しく注意深き觀察を續くべきであらう。

建築職工への再認識

鈴木忠五郎

はしがき

昭年十三年への期待として建築職工への再認識を先づ擧げたいと思ふ、筆者は建築教育界にあるなれば或は一部の主張となるかも知れない。併し建築界低度のもの、低度のものと云ふと語弊があるかも知れないが、職工の教育向上をさせてこそ一般建築業界の進展は見られる。人間の教育を絶叫する筆者の氣持には恐らく異議なからうと思ふ。エヂプト・ローマ時代の土木建築ならいざ知らず、奴隷でない自由勞働者によつて大成される土木建築が職工教育技術教育を考慮されず明治、大正を過したさへ業界の一大異觀ではあるまいか。併しこれは他の工業とても同じである。學問をするのは指導者になる爲の國民觀念の然らしめた所以である。

併し支那事變後の工業界は一つの異なつた方向にこれが常道であるが力強い歩みを伸ばした。產業五ケ年計畫と重工業の勃興で職工の不足、就中熟練工の不足には當局も業界も困り抜いた。

此處に於て熟練工養成の爲に國家は自ら陣頭に立ち、六ケ月一ケ年の養成然かもその入學資格として中等學校卒業資格と決定した。これ業界の一大刷新と見られる。勿論短期間に於て果して圖面を見て製作し得るまでに到達出來るやはあるとしても、中學教育を卒へたものゝ教育意識職業意識を以てすればそれ等の不備はやがて取返せるかも知れない。それよりは機械職工になる爲には中等學校を出なければと云ふ氣持は工人の人格向上に、工場刷新に一大貢獻をなすに違ひない。其校長の言によれば建設工業は、指導者の教育で充分である職工の教育等なす必要がないと言明してゐる。なぜ建設工業の職工は舊來のまゝでなしに、その昔の諸國修業技術修業さへ妨止された現狀で充分であるか、的外れも甚だしい意見と思ふ。我田引水の結果の極言ならば我々は許し得るかも知れないけれども教育家としてはいさゝか「ピント」が外れては居りやしないかと思ふ。先づ建設工業と云ふも土方ばかりではない手傳ばかりではない。機械工でもグライダー工、熔接工、鑄工、旋盤工其他の技術とその熟練さに於て大工左官石工と頭腦を要する故指導者と設計家との關係に於て、上位にあるとも下部にはないと思ふ。更に工場は機械さへ完備せば熟練は返つて能率增進を阻害するものであると、理研コンツエルエンの大河內博士は實際の經驗から科學工業低上に發表されてゐる。これも一般性はないと思ふが機械工は練習する期間と材料とを與へ得るが建築土木關係は唯一設計の唯一の工事なればそれは不可能である。此等の點を考慮すれば建設工業の職工も教育向上される必要もあり、亦技術教育の必要さは他の機械工業界同樣に要求して少しも不思議はなく、當然の事と信ずる。

建築工不足を過去に於て經驗したそれは大正十二年關東震火災後職業補導會の一部門として出發したが大した效果を收め得なかつた、六ケ月の短期間に無理があつたのが、指導方法に缺ける所があつたかは知らないが。

滿洲事變後、滿洲建設の爲に建築工の大不足を生じた、支那事變終了後の北支開發に我が業界が參劃するとせば一層その不足を感ずる時期が到來しやうし尙產業五ケ年計畫が進められる限り建設工業も尙繁忙を極めやしないかと推察される。來るべき時機に計畫的に熟練工養成の方法を考慮しをきその效果に萬全を期したいのと一方教育計畫國家の教育計畫からも業界の組合からも協會からも放任されて居る建築技術工の養成に他の工業職工同樣進展せしむべき義務は建築關係全體が感ぜねばなるまいと思ふ。併し此處に大きな觀念的の意見の相違が存在しては居らないかと思ふ。尙適當な教育機關なしでどうやら間に合ふではないかとの消極的な意見が存在する。併し時代は此の迷夢を醒さずには置くまいと思ふ。產業統制、產業の合理化（之は業界不振の折柄烈に叫ばれる問題ではあるが）の力强い迫力は一層强く業界に迫るに相違ない。業界の合理化は技術の合理化、機械化、營理の合理化から最後はやはり、人間丈も大部を占める技術工の合理化にあると思ふ。中には一人の熟練工が居れば棟梁さへしつかりして居れば他は熟練工でなくても仕事は出來るとゝふかも知れない。併し全部之は實際問題としては難しいが熟練工であり得たなら一層能率を擧げ得るものと考へられる。これ等は手を懷にして待つたとて到達せられない。建築職工への認識をかへて貰ひ一方社會的の認識を高め一方在來の放任をやめて、技術の向上練磨人格向上を期すべき機關を求めなければならない。左官工の實際養成をなしてゐるのに鳥取縣下の某校があるだけで、他は東京實科工業の左官科、京都第一工業の建築裝飾科だが何れも乙種程度のものではあるが廣い日本にこれだけとは一寸遺憾である。大工學校は全然ない、北海道釧路に夜間に講習會式で學科を教へる大工學校があるとか聞いてゐるが、それには技術教育はして居らない。眞の大工養成學校否塾でもよい、養成所でもありますか若しありましたなればもう依然に大工なれば看板の書き方、棟梁なれば見積の方式位とうの昔に解決されて居らねばなるまいし、左官にしてもセメント壁の龜裂位の問題はもつと明瞭になり得る筈だと思ふ。私は昭和十三年への期待を此處にまづ期待をかけたいと思ふ。更に以下に評論したい。

支那事變と業界

今事變により經濟統制の必要から建設工業界は可成の統制を受けてゐる。

即ち臨時資金調整法、鐵鋼工作物築造許可規則、臨時輸入措置法、地方債許可制の强化等が擧げられる。

これが爲先づ不造のバラツク建が一般に當分廣くなり、鐵筋鐵骨の重量構造は一時下火になりやしないかと思ふ。併しこの業界不振の時こそ過去への精算とやがて向上への準備に困難を克服して進むべきではないかと思ふ。

即ち建築職工への再認識をなし職工の質の向上と技術の進展を企圖すべきであると信ずる。此がやがて建築合理化の下地を作り得るものと思ふ。次に業界の合理化、機械化は勿論企業の合理化もあらうし、管理の合理化もあらう、當業者の多い前で書くまでもないと思ふ故、此の位で。

次に、木造建築への再認識、重構造への木造建築の進展、防空見地から耐火塗料の研究工大の建材研究所では略完成し、20～30坪のものなれば30圓乃至50圓にて耐火的に木造を化し得るとの話我々大に氣を強くし得る。次に鐵筋コンクリート鐵骨造の鐵の節約と基礎構造への節約と新研究昭和十三年度への期待は益々多い、筆者は事變のもたらした第一項につき更に考へて見たい。

人口から見た土木建築業

昭和五年の國勢調査によると第1表に示す如く六番目にある。機械工業等より遙かに上位にある。尙第2表により十年間の人口の増加率が24.1%なれば、昭和十三年は8年目にあたる故19.3%の増加となり109.8萬人を示すことになる。從業者百萬人は動かぬ所と見られる。第3表によれば雇主 12.7%單獨33%使用人 54.3 %單獨も時に助に廻るし亦雇主も下請に廻る故眞の獨立雇主は遙かに少くなるに相違ない。第4表によれば大工が47.8% 35萬人その約半數を占めてゐる。

第1表　職業別有業者（昭和五年國勢調査）

職業	男女合計		男	女
	實數	構成比率		
	千人	%	千人	千人
全有業者	29.221	100.0	19.090	10.131
農耕ニ從事スル者	13.574	46.5	7.479	6.095
商業的職業	3.263	11.2	2.497	766
接客業ニ從事スル者	1.143	3.9	477	666
紡織工業ニ從事スル者	1.013	3.5	469	544
運輸ニ從事スル者	940	3.2	910	30
土木建築業ニ從事スル者	912	3.1	908	4
家事使用人	806	2.8	87	719
木竹草蔓類ニ關スル製造ニ從事する者	685	2.3	625	60
金屬工業機械器具運搬造船用具製造ニ從事スル者	670	2.3	646	24
漁業ニ從事スル者	568	1.9	521	47
其他	5.647	19.3	4.471	1.176

第2表　十年間ニ於ケル職業別人口ノ變化

職業	大正九年（本業者）	昭和五年（有業者）	十年間ノ増加率
	千人	千人	%
總數	27.378	29.225	6.7
農耕、畜産、蠶業	13.939	13.983	.3
物品販賣業（商業的職業）	2.108	3.263	54.8
纖維工業（紡織工業）	1.381	1.013	−26.7
運輸業	923	940	1.8
金屬及機械器具製造業	815	670	−17.8
土木建築業	735	912	24.1
旅宿、飲食店、浴湯業（接客業）	714	1.143	60.1
木竹草蔓類ニ關スル製造業	647	685	5.9
飲食料品、嗜好品製造業	536	481	−10.3
漁業製鹽業	558	592	6.1
其他	5.022	5.539	10.3

第3表　主要職業ニ於ける有業者ノ産業上ノ地位ニ依ル分類
（昭和五年國勢調査）

	職業	總數	産業上ノ地位		
			雇主	單獨	使用人
		千人	千人	千人	千人
實數	農耕ニ從事スル者	13.574	4.190	672	8.712
	商業的職業	3.263	668	1.138	1.457
	接客業ニ從事スル者	1.143	257	121	765
	交通業ニ從事スル者	1.108	69	124	916
	紡織工業ニ從事スル者	1.013	91	107	815
	土木建築ニ從事スル者	912	116	301	495
	金屬工業機械器具製造造船運搬用具製造ニ從事スルモノ	670	73	77	520
		%	%	%	%
構成比率	農耕ニ從事スル者	100.0	30.9	4.9	64.2
	商業的職業	100.0	20.5	34.9	44.6
	接客業ニ從事スル者	100.0	22.5	10.6	66.9
	交通業ニ從事スル者	100.0	6.2	11.2	82.6
	紡織工業ニ從事スルモノ	100.0	9.0	10.6	80.4
	土木建築ニ從事スルモノ	100.0	12.7	33.0	54.3
	金屬工業機械器具製造造船運搬具用製造從事スルモノ	100.0	10.9	11.5	77.6

第4表　土木建築ニ從事スル本業者内譯

（大正九年國勢調査）

職業	男女合計		男	女
	實數	構成比率		
	人	%	人	人
大工	351.015	47.8	350.861	154
土方、鳶職	99.150	13.4	96.255	2.895
左官、泥工、セメント工、煉瓦工	73.876	10.1	72.787	1.089
石工	73.126	9.8	72.146	980
土木建築請負業	50.636	6.9	49.823	813
屋根職	31.156	4.4	31.062	94
ペンキ漆其他塗料職	15.126	2.2	14.591	534
土木建築設計測量ニ關スル業	7.910	1.1	7.799	111
潜水業	2.155	.3	2.070	35
其他ノ土木建築ニ關スル業	30.869	4.0	30.189	680
合計	735.018	100.0	727.583	7.435

左官工石工尚設計測量師より遙かに多い。從來の工業學校が設計計劃を目的として技術養成を目的としたのは1.1％を目標としたわけ更に渡邊圭吾氏の主張によれば施工者としての教育を望むこれで1.1％から8％への飛躍が出來たわけである。筆者は大工左官石工ペイント工其他あらゆる技術工へと進展少くも目標だけは80パーセント以上までは少くも到達させたい。それがなし得たとするも實際は目標の半分かも知れないとの疑念が差入れられるならば40％だけしか實現出來ぬことになる。併し40％の向上せる技術工がもし得られたと、するなれば建築界は一般の進展をなすに相違あるまい。

一方業界も現在良職工、熟練工が少くて困つてゐる、亦職工自身もその必要と技倆の不備を自覺する。日進月歩の建築界にて教育されずに放任されて居ながらどうして時流に棹をさし得るか思はざる損害を蒙ることあるは當然である。此處に於て或左官組合等は技術向上のために左官博覽會を開き、技術の練磨と社會への認識向上に一歩を踏みだした處もある。尚或組合では最新の技術をパンフレツトにしてその不備を補ふてゐるとか聞いてゐる。職工間既に自覺しつゝある。只制度と機關の發生を阻止する何等かの力強いものがあるに相違ない。この阻止力への突進こそ昭和十三年度への大きな期待である。

阻止力の種々相

建築工は自由勞働者である故に技術教育は施す方法なしと片附けてしまふ例、勿論教育には場所の一定は必要だ併し場所的に不足でもなし得る。電氣工事人の資格試驗等はどうか設計家が監督するし竣工檢査のある配線工事の職工に何の資格等が。現に明治大正昭和と無資格でやつて來たではないか併しその結果は、電工の養成所が出來講習會が生れ、講義錄が發行され、電工の知識技倆が一段と向上しつゝあることだけは否定出來ない。工業學校も電氣科は第三種資格と電氣工事人資格を得る爲にその技術教育を施してゐる現狀で

ある。その結果電工界の合理化統制もとれ易くなるものと信ぜられる。

この一事は何を示すか、制度さへ出來さへすればよい。教育養成機關は心配しなくても必要のある處萬難を排して、新機關が工夫されて來るものと筆者はこれを信ずる。この一事が筆者を不可能と信ぜられてゐる建築職工の資格試驗制度確立を主張せしむる大きな迫力を與へた最近の出來事である。之は次回に讓る。

次には建築工の履歷が問題される。建築工になるものは皆貧困の子弟で家計が苦しいから口數さへ減じさへすればとの考へから徒弟に出されたものだとの考、之は篤と考へ直して貰はねばならない點である。此の點なれば機械工にも理髮工にも電工にも商店員にも給仕にも變化はないと筆者は信ずる。貧困と片輪のアンマの徒弟を考へる時アンマの資格等こそ慘酷の樣に思ふが當業者にとつては喜びであり、業界進展向上の爲にどれだけ貢獻してゐるかを思ふ時、かゝる捕はれた過去觀念を取り去るべきだと思ふ。現に大工の一部調査の結果尋卒は殆どなく高二卒又は高三卒、農學校卒業生も交つてゐる現狀、高三なれば都會なれば乙種工業程度である。これを思ふ時口數減じの爲等云へたものではない。親は子弟の教育に對して眞劍だ。それが爲に食費自辨又は小使道具自辨で入門してゐるものも少くない。大いに反省して貰ひたい。

亦一步退いて考へても見なさい。不幸家貧困なるも、理髮の徒弟は受驗を受けさせて一人前にして呉れる。アンマの徒弟さへ資格を得るまで親方は面倒見て呉れる。親分子分の情愛の美しさは此處に生れるではないか。大工を見よ左官を見よ、他の職工を見よ、年齡だけで年が明けるではないか、國家の認むる工人なりとの考への努力、得た喜び、年期明け努力と勉强こそ人間を作り、技術を向上せしめ得ると信ずる。

「インテリ」職工は困るとの考へ

今事變で完全に此の考は覆へされた。無知な支那兵を强くするのは督戰部隊だ。教育のある日本の强さは教育の齎らした國民的自覺國民精神だ。職業意識の徹底責任觀の强固は技術教育と離れることは出來ない。技術の向上合理化刷新は此に發生する。次に「インテリ」の定義である、建築職工を少くも筆者は乙種工業程度にまで引上げたい最小の意見を持つものである。然らば前の調査によれば農學校卒高三卒はもうある筈ではないが、只一般化しない點で筆者の主張する所以、この點了解されるならば「インテリ」は問題になるまい。亦一方建築界は詳細に考察すれば各建築職工の綜合技術の結晶ではないか、如何に立派な現場係も監督も大工術不完全なる時手に取つて之を指導し得るや、左官其他の技術に對してそれは不可能の事、要は圖面と仕樣を唯一の目標として說明し職工の技術により完成されるその說明を了解し圖面仕樣をよく體得して仕事を完成し得る職工こそ建築界の熟練工であると定義したい。それが爲には少くも教育は或程度なさねばならない少くも監督の言葉意志の推察も出來る迄の程度にほしいと思ふ。かゝる熟練工がどしどしと養成されてこそ設計家も監督も工事も樂になり能率を擧げ得る樣になるのではないかと筆者は思ふ。かゝる點でも機械工と比較して見たい。機械は次第に精密化する。その製品に魂をたゝき込まねばと主張する。併し建設工業はかゝる精密を要しないと併し建設は機械化する分は少く、手工業による技術は機械の工作機械の精巧化によりその「コツ」とも稱すべき

呼吸分野は次第に少くなつて行くが、建築の職工任せは將來とも多くなると思ふ。この點からも教育は少くも同等までは進める必要はあると信ずる。亦一方學校出で大工になる輩があるか等自ら業界人が建築職工を卑下すべき理由があらうか。理髪工、電工、グラインダー工、旋盤工と並び大工、左官、ペイント工、石工を社會から眺め産業界から眺め、且つ自分の職業意識から見て他がより以上必要であり有利であり高貴であるものだと誰が斷定し得様か。職業に貴賤なしは古いかも知れない。職業には存在の意義がある。各職業は時勢に應じ進展し向上しなければならない。そのまゝ時流に添ふて進展しなければ添はざるものは添ふ様に改新して行かねばその職業は衰微してしまふ當然なことである。

今や教育は社會一般に向上しつゝある時建築職工界も大いに思ひを新にして指導しなければ悔ひを後に殘すことになりやしないかと思ふ。

建築綜合協會の設立を望む

建築學會、建築協會、土木建築組合、建築資料協會、左官組合、大工組合、其他あるが之がある一點で共通の目的の上で一致の行動を研究し當局に進言するための機關として建築綜合協會の設立を望む。その目的とする所は業界向上策、技術の綜合研究、業界合理化策等を企圖する機關としたならばと思ふ。當分は夢かも知れないが綜合研究はかゝる機關ならでは出來まいと思ふ。

建築職工資格檢定制度確立の必要

論理は充分に重ねて言ひ盡くしたと思ふ。それが實行には建築綜合協會等の力強い團體が生れねば永久に駄目かも知れない。合せて昭和十三年度の話題に提供し，御批判に與りたい。

結　　び

前二項も恐らく話題にすら上らずに本年度は過ぎてしまふかも知れない。一部の人々はそれより先づ經濟策業界繁榮策を考へた方がよい。生活の安底さへ付けばそれから考へても遲くあるまいと云ふ方も少くないと思ふ。技術向上と生活保障の平行を希望するは當然であるが、全般の社會この原理は一部は眞理なるも他には通ぜぬ事が少くない。殊に自由勞働者としての建築職工の團結は中々面倒の様である。

來議會に通過の見込みのある國民健康保險法案等は建築職工の爲に設けられたと考へてよい位好都合に出來てゐると云はれてゐる。業界の爲生活安底の爲一致の行動をとるのもよいことである。之は內務省が一人當り年額5圓位補助さるゝ由なれば、それ等の補助金にて、醫療機關の完備一部を後輩教育機關の整備、更に業界向上に資せられたなら等考へられてならない。

此の千載一遇の自由勞働者への福利法案通過を考へ昭和十三年を想ふ時建築學會も協會も土木建築請負業者も一般建築愛好者も惠まれざる業界工の向上と福利增進の爲に御聲援あらんことを祈り筆を擱く。（昭和12年11月19日脫稿）

都市に於ける貸住宅經營の實際

政岡基次

はしがき

近來都市の異樣的な發展に伴ひ、住居の問題は益々多方面に研究す可き問題を提供してゐる。本稿では、これ等住居問題考究の一面として、都市住宅の中、大多數を占める營業用貸住宅に就き、大資本によるものは別として普通一般の經營に於ける經濟的の考察を試み、最後に在來の經營方法によるかゝる貸住宅の眞の利廻りを求め、これに或程度の批判を加へやうと思ふ。

說明の便宜上、又一方には、かゝる問題の一般的考察には、その假定する處に種々の紛雜さを伴ふ處があるから、本稿では一つの實例を採り、數値を擧げ乍ら考察を進める事とする。採用した例は大阪市に於ける長屋であつて、經營方法各支出項目、統計値等はこの地方のものによる事とした。貸住宅に對するこれ等の事柄は地方的に大に異るものも少くない。從つて各項目一々については、如何なる場所でゞも一般的に直にあてはまるとは限らない事を豫め斷つて置く。尙當大阪地方の貸住宅は、ことに舊市內に於ては、疊、建具(內部標準寸法のもの)無しの所謂裸借家が大多數を占めてゐるが、本稿では一般的な意味から、此等造作付きのものを論じる事とした。又かゝる營業の性質上、相當長年月の將來の事迄考へるから、從つて物價指數の變動を加味しなければならないものであるが、徒に繁雜さを伴ふ危險があるので觸れない事とした。

從來、貸住宅の經營には、其支出が經營者にとつて適確な豫算が立たなかつた事、賃料不拂に對する危險性が多かつた事、不動產評價が極めて不統一であつた事等に依つて、一部高利的なものもあつた樣であるが、又これとは反對に、舊市內中央部に於てみる如く、舊素封家の經營にかゝる、利益率を度外視したものも相當の數に上つてゐる。然し將來は不動產價額も取引所等の發生を待つて、評價が容易になるであらうし、又從來除り大して採算上の問題とならなかつた公租公課が、今日では見逃す事の出來ない大きな支出項目になりつゝある事、更に又一方、株式の普及によつて、投資が至極容易に、正確に出來る樣になつた事等からして、從來の不動產の利廻りの不均等さは、漸次或一定の標準に向つて近付くものと考へられる。

この小稿が、借家經營の實際家に對し、又出來得可くんば、都市住宅問題研究の學究徒に對し、一顧の資料を提供する事が出來得れば望外の幸である。

本稿を草するに當り、諸種の資料聚集に多大の御援助を賜つた先輩工學士吉田信武氏、

理學士池田章氏並びに各關係官廳の皆様方に、此處に深甚の謝意を表する次第である。

本篇はその内容にみる如く、不動產經營、建築技術、材料價額、稅務等頗る廣範なる智識を必要とする。筆者、もとより其の一をもよくするものに非ず、各專門の方々によつて、叱正を仰ぐ事が出來得れば幸である。

目　　次

Ⅰ　投資額及家賃　　Ⅲ　純益金、附利廻

Ⅱ　利益の部　空家率、取立不能率　　Ⅳ　結　　び

Ⅲ　損失の部　地租、家屋稅、火災保險料

諸修繕費、管理費、減價償却費

Ⅰ　投資額及家賃

家屋に對する投資の高は、各土地の情況に依つて異るものであるが、大體從來の土地所有者が家を建てる場合、地價に對する收益率を等閑視する傾向があつた。この事は、土地の改良其の他による價額の上昇に伴はず、いつまでも、粗雜な木造家屋が建設される一つの大きい原因となつてゐる。從來最も一般に行はれてゐる投資額決定の方法は、先づその土地柄に應じた家賃を推定し、それによつて建築費を割出す方法である。即その一は一ケ月家賃請求高の50倍を以て家屋建築費と定めるもので、之を逆に云へば、建築費の$^{2}/_{100}$を以て月當り家賃額としたものである。俗に一年を十ケ月に勘定して、五年で只になる家と云はれるのが即これである。この方法は土地に對する考慮が定率的に極めて粗雜にしか拂はれてゐないものであつて、祖先傳來の地上に建物を建てゝ經營してゐる大多數の家主はこの方法を採つてゐる。然しこの方法の不合理な事は實際に於て、土地に對する公租公課の增加によつて漸く一般に認められる様になつて來た。

其の二は、上の方法をいくらか改善したもので、土地價額の上昇に對する考慮を今少し取入れ、土地建物を合した價額に對し、家賃請求高を月當り $^{1}/_{100}$～$^{1.5}/_{100}$とするものである。俗に月一、又は一・二に廻る家と云ふのがこれである。然し$^{1.5}/_{100}$と云ふものは、新築當初の利廻の極くよいものか、若しくは一種の處分的に賣買されるものであつて、普通は$^{1}/_{100}$內外のものである。

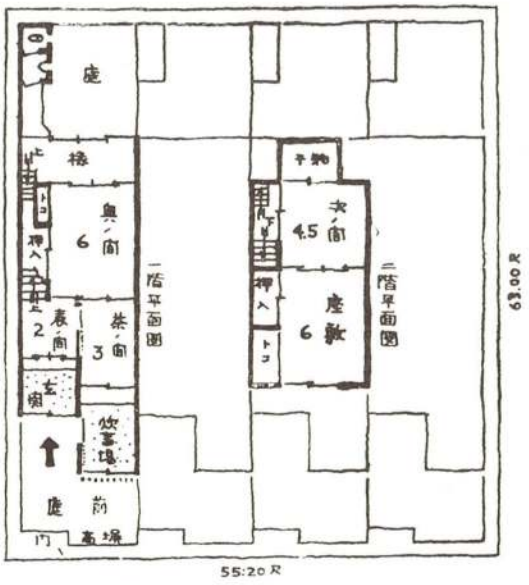
其の三は、土地が借地の場合に專ら行はれてゐるもので、家賃請求高から、土地の賃借料を差引いた高が、投下資本に對し月當り大體$^{1.5}/_{100}$見當になる様定めるものである。

今實例として第1圖の如き平面圖を有する貸住宅を採る事にする。

先づこの例について概略の説明をするに、敷地奥行十間半は、在來の貸住宅のそれに比すれば、極めて大である。即ち大阪舊市の周圍部に於ても、奥行7.5間が普通であるが、最近の傾向は、內務省都市計畫課の方針によつて、勞働者住宅で10～15米、普通住宅で、

15～25米健康住宅で25～40米の劃地が標準である。この區劃の定め方が從來の貸住宅經營に、一つの新しい轉換期を與へつゝある事は、見逃す事の出來ない事實であつて、現在では平面上に一部その彌縫的計畫の現れが見受けられる。この奥行の深さは、既に現在に於て、最大限度に達してゐるのであるから、將來尚奥行が深められる様な事になれば、その對策による様式の變化が、他の諸種の影響と並んで構造の變更をさへ招來する一つの原因となるのではないかと考へられる。

第1圖　四戸建貸住宅平面圖



さて、再び本例にかへつて、敷地面積に對する、建築面積の比を見るに、兩端二戸に對しては、51.10%中央二戸については、57.80%で住居地域の最大限度60%に近いものである。

今この敷地の價額を、坪當り單價50圓と假定し、建築費を建坪當り、造作付き（門塀を含む）130圓とする。こゝで云ふ建物の坪數は、大阪地方の慣例に做ひ便所を除いた建坪（大工坪）による事とする。以上の如く假定すると、敷地坪數は、96.60坪であるから、この價額4,830圓となる。新に買入れたとするば所有權移轉登錄稅$\frac{33}{1,000}$及不動產取得稅（府、市稅）$\frac{29.79}{1,000}$を要し、稅額304.29圓となり、土地の價額と合して5,134.29圓となる。登錄稅の課稅標準である地價は、登記所の査定にまつもので、現在一般の情勢は、實際賣買價額よりも高價である事が屢々である。

建築物の方は、建坪42坪であるから建築費は5,460圓となる。これに要する不動產取得稅は課稅標準である建築費1,000圓につき府稅7圓、市稅（本稅1圓につき。以下同樣、）2.857圓特別稅0.40圓である。現在大阪市に於ける建築費の標準は大體、二階建の場合建坪當り100～120圓である。今假に110圓と査定されたとすればこの稅額137.44圓となり、建築費との合計5,597.44圓となる。

即不動產取得に要したる金額は、土地建物を合して、總計10,731.73圓となる。

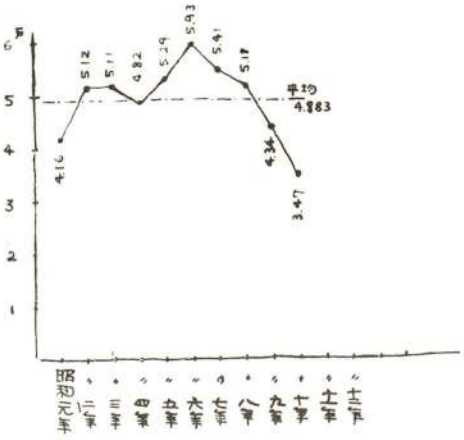
これに對し、家賃は前述其の一の五ケ年で只となると云ふ極く一般の方法を採用すれば109.20圓となり、一戸當り27.30圓となる。この家賃額は、永年間の平均値であつて、新築當初はこれより高く、古くなるにつれ、低下するのは勿論である。かく定めれば、前述其二の方法の土地建物合計投資額に對する收益率は、月當り$1.02\frac{}{100}$となり、大體普通に取扱はれてゐる標準に近いものである。

Ⅱ 利益の部

利益金は明に家賃である。一ケ年の利益金は上の家賃高に空家及家賃不拂による或る割引された率を乘じたものである。

先づ空家率についてみるに、大阪市に於ける昭和元年以降の純住宅（自己所有住宅をも含む）の空家率は、第2圖に示す如くである。

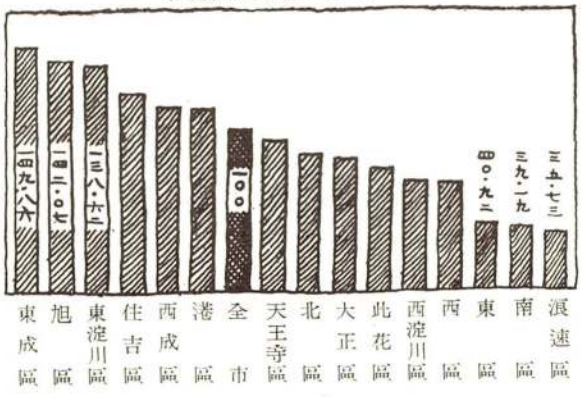
第2圖　大阪市内總住宅百ニ對スル空家數
（昭和十二年四月發行大阪市統計書ニヨル）



而して、これを各區別に見る時、市周圍部に於て比較的高率であり、中央部で低率なる事は云ふまでもない。即ち、昭和十年末に於ける大阪市の統計は、第3圖の如くである。

本稿では、假に第2圖の平均率 4.883% を採る。而してこの數値は、總住居に對する空家率であるから、營業用の貸住宅については、これより高率となる。即ち都市計畫大阪地方委員會の調査(昭和十一年秋)によれば局部的ではあるが、四貫島方面での調査總戸數6,406戸につき、總純住宅數4,527戸、其中貸住宅數4,061戸、都島方面での調査總戸數 1,345 戸につき總純住宅數790戸、其中貸住宅數732戸となつてゐる。即ち之によつて總純住宅に對する貸住宅の率をみるに、90.14%となる。（但しこの調査中に空家として、四貫島方面に16戸都島方面に24戸が擧げられてゐるが、用途が明記されてゐないから算入しなかつた。）即前述の空家は凡て貸住宅であつたと假定すると貸住宅 100 に對する空家の數は 5.417 戸となり、從つて、空家を除いた利用率は、94.583% となる。因に○○公營住宅の昭和四年より、昭和十年に至る利用率は 94.431 % である。

第 3 圖　昭和十年末大阪全市區別空家指數
（大阪市統計書ニ依ル）



次に取立不能家賃について、その割合を見るに、某公營貸住宅約 1,500 戸に付き、昭和三年度より、昭和十年度迄の各八ケ年間の請求額に對する實收額割合の平均値は 98.66% である。又○○經營貸住宅○○○戸に付き、昭和十年及十一年の二ケ年間の平均値は94.50

%である。而して一般的に家賃の集金率は、昭和四•五年を最低として、漸次上向を辿りつゝある。この事は一般景氣の恢復、貸住宅經營の合理化に基因する事もあらうが、思想問題の變遷も亦見逃す事の出來ない原因となつてゐるであらう。

不拂に對する數値は、各經營者が公表を避けるため正確なものを得る事は困難であるが大體に於て4%を越ゆるものである事は想像に難くない。ことに延滯家賃に關し、金利と時とを考慮に入れて計算する時は、その實收率は相當の低率となるであらう。

本例では假に96%を以て、請求高に對する實收高の割合と定める。

即ち、以上の空家及不拂による低下率よりして、一ケ年の家賃高に對する實收家賃高の割合は90.800%となる。

本例について之を見れば、一ケ年家賃高1,310.40圓なるに對し、實收家賃高は1,189.84圓となる。

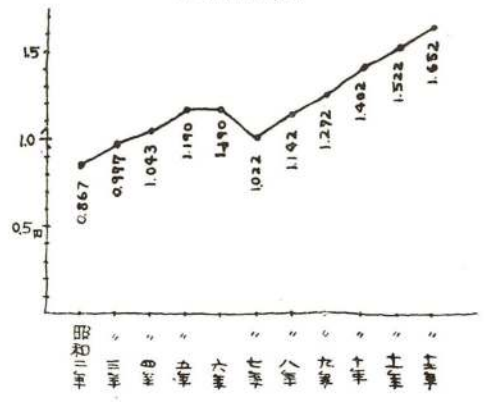
因に、土地賃貸料に對する不拂率は上述の家賃不拂率に比し極めて大である。これは家賃の不拂、空家による收入杜絶が引いて地料不拂に不當に轉嫁されるのも一因であらう。○○○○經營の土地、○萬坪に對する昭和三年以降、昭和十一年に至る九ケ年間の總請求高に對する實收高は、86.182%である。この數字は直に採つて標準とする事は出來ないがその一端を示すものとして役立つであらう。尙この統計に於て、昭和四年には賃料の値下げを、又九年風水害の時には免除を（何れも請求高を減ず）してゐる事を附記しておく。

Ⅲ 損 失 の 部

損失金については、各項目別に擧げて考察を進める事とする。

イ、地租 地租の稅額は、その賃貸價格の$\frac{3.8}{100}$を以て年額とする。即本例に於て賃料を坪當り30錢とし、課稅標準の賃貸價格が3.60圓（56等）と決定されたとすれば、（實際よりも賃貸價格の方が高い場合がある）地租本稅は年額13.21圓となる。而してこの賃貸價格は、十ケ年毎に實地調査をして、周圍の情況をも考慮に入れて改訂される事となつてゐるが、こゝでは不變のものとして計算を進めることゝする。

第4圖 大阪市ニ於ケル地租本稅一圓ニ對スル合計附加稅額



次に地租附加稅をみるに、これは年々增加の一途を辿るのみである。即大阪市に於ける附加稅合計額の上昇過程は、第4圖の如くである。この圖に於て、昭和七年に激減してゐるのは、課稅の標準が地價より、賃貸價格に改められた事によるもので、稅額としては勿論全般的に減少してゐるものではない。

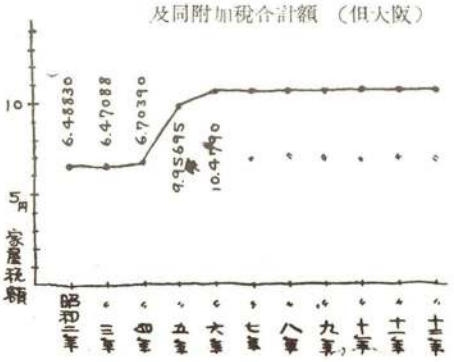
今この昭和七年以後の割合を以て、將

來增加するものと假定すると、30ヶ年を平均して本稅1圓につき附加稅3.542圓となる。附加稅率については、勿論一定の限度があつて、かゝる從來の增加割合を以て將來を律する事は不當であるが、又一方必要に應じて增徵する法は有り得る事である。即ち、この數字をそのまゝ採用すると、一ケ年の地租合計額は59.99圓となる。之を一ケ月の土地賃料に比べれば、2.07倍强となる。

ロ、家屋稅　家屋稅は、昭和十二年度現在に於て、賃貸價格100圓につき、府稅(本稅)1.09圓、府都市計畫稅（本稅1圓につき、以下同樣）0.31圓、市稅7.90圓、市都市計畫稅0.40圓、總計賃貸價格100圓につき10.479圓となる。最近十ケ年に於ける家屋稅の增加の具合は第5圖の如くである。之れを地租と同樣に、昭和二年以降の增加具合を將來30ヶ年間延長して、平均値を求めると、16.465圓となる。

家屋稅の課稅標準たる賃貸價格は三年毎に改訂し、その定め方は、當大阪に於ては家賃月額の十二倍に對し、土地利用による部分の控除を0.385爲し、之に道路等級により割引を5割以內して定める。本例に於て道路等級を36～38とすれば、これによる割引は2割となり、家屋稅額107.15圓となる。

第5圖　賃貸價格百圓ニ對スル家屋稅及同附加稅合計額（但大阪）



ハ、火災保險料　火災保險料金は建物の構造種別、土地の情況、密地關係等によつて定まるものであるが、今一等地として、保險金額1,000圓につき、保險料金2.80圓とし建築費全額につき加入したとすれば、一ケ年保險料金13.52圓となる。年々この金額を計上する事は、建物自體が減價するから火災保險のみの立場からは明に超過保險となるが、火災を起した場合建物以外の損失もあること故幾分かこれ等に對する自家保險の意味で假にこの數値を採用する事にする。

ニ、諸修理費

疊　造作付きの貸住宅に於ては、疊の表替が修理費の中で最大のものである。これはその悪くなつた程度の認定が確然と出來ないため屢々厄介な問題を起す事がある。この不都合を補ふ意味から、借家人にその費用の全額若くは或割合を負擔せしめてゐるものが相當見受けられる。大體裏返しは、一ケ年半毎に、表替も同樣一ケ年半毎位が普通である。即三年目に表を取り替へる事となる。裏返しの費用を一枚當り0.70圓とし、表替を1.30圓とすれば、平均一ケ年の支出は60圓となる。

壁　壁は賃貸人の出入がない時は、些程塗かへを要しないが、一度空家になつて、新な賃借人が入る時には、少しの汚損でも塗替を要求するのが普通である。室內部の壁は、この樣な原因のため、相當頻繁に塗替が行はれる。平均之を六ケ年毎とすると、本例では、

198.70面坪あるから、單價0.80圓として、一ケ年當り26.49圓となる。外壁は損傷を受け易いため、漸次最初の投資額が當むのを覺悟で、金屬板張、タイル張、板張等とする傾向があり、所謂塗化粧は廢れつゝある。本例でも、二階腰壁及妻は全部板張りと假定する。その壽命を十ケ年とし、費用を足場及人造石塗等を合して、面坪當り1.20圓とすれば、本例では高塀共、54.56坪であるから、一ケ年當り6.55圓となる。

錺工事　樋は近來工場の惡瓦斯によつて其壽命が著しく短縮されてゐる。舊市中央部では銅樋を用ふるものが多いが、周圍部に於ては殆んど全部が亞鉛鍍鐵板製である。銅は腐朽し難く、一見有利の樣であるが盜難の虞があり、結局經濟的見地からは、鐵板の比でない。鐵製樋は市中場所に依つては、一ケ年餘りで侵蝕される所がある。こゝでは平均壽命を五ケ年とすると、全錺工事費が72.87圓であるから年當り、14.57圓となる。

建具　建具修理の中で、最も頻繁に起る問題は、車、レール、締り金具の修理及出入口下桟の腐朽取換へ等である。これは材料費は大したものではないが、手間代が相當嵩むものである。手間代に關しては、最後に一括して計上するとして、これ以外のもの、即ち、襖の修理を考へてみる。襖修理は張り替へが主なるもので、これは丁度壁の塗替と全く同樣である。今六年目毎に張り替へるとし、一枚當り平均1.30圓とすれば、一ケ年當り9.63圓となる。

この他ガラスの入れ替があるが、これは空家から、新に賃借人が入る場合にのみ家主が負擔するものであるから、最終項で見込む事とする。

物干　物干の壽命は之を七ケ年と假定し、一基當り18.00圓とすれば、一年當り10.29圓となる。

雜　この他前述の建具直し手間、ガラス破損入替、植木手入れ、竈直し、柱根つぎ、排水、給水設備修理、空家養生費、雨漏修理等々を一戸當り大略12.50圓と見積れば計50圓となる。この外、修理とは別箇な諸種の模樣替天窓、廂、手摺、風呂場、物置きの新設等を賃借人から申込む事があるが、これは修繕でない事は明であるから、損金としての計上から除外する事とする。

ホ、管理費　管理費は一般に、其集金高の$\frac{5}{100}$乃至$\frac{6}{100}$である。これは直接賃貸人が、その衝に當れば、失費が少いわけであるが、諸種の理由から、別に管理人を依囑する場合が多い。大體管理の難易にもよるが、100戸以上の經營では、別に人を傭つて經營する方が有利である。管理費の定め方は、上述の方法以外に、修繕費を集金高から差引いたものに、或歩合を掛けて定めるものもあるが、これは可及的修理費を安くして、實收をあげるのがその目的であるが、修繕費に不正が有り得るのと、少し大きい修繕の場合は、管理人の收入が無くなる等の缺點のため一般的ではない。信託會社等の管理費も大體$\frac{5}{100}$が普通でこの場合充分調査の上、集金の正確なものゝみしか受託しないから、その請求額の$\frac{5}{100}$を管理費とするものが多い。本例に於ては、最も一般的な方法の集金高の$\frac{5}{100}$を管理費に

當てるとすれば、年額59.49圓となる。

ヘ、減價償却費　木造家屋の償却については、或は二十年と云ひ、或は五十年と云ひ、種々異つた意見があるであらう。近來家屋の構造が、益々粗雜に向ふ傾があるから、其壽命は漸次低下する事は免れない。建築的にのみこれを定める事は、營業としての立場から不可であるから、こゝでは全く技術者の立場から懸け離れた、稅務會計の觀點をとる事とする。大藏省主稅局が、法人所得及營業收益の課稅に關し定めてゐる內規では、木造住宅用建物の堪久年數を30ケ年としてゐる。從來これは、35年と定められてゐたのであるが、昭和12年4月以降、30年と改正されたものである。尤も、この年數を定めるに當つては、技術的の研究も充分されたものであらうが、その由つて來る所は筆者に審でない。實例に照してみても、營業用家屋としては、これ以上の壽命年數を豫定する事は難事であらう。

本例に於ては、一ケ年平均支出を求めるために、每年均等償却をなすものと假定し、償却後の殘骸價格は、取毀ちの賣却値段とすると建坪當り5圓內外となるが、こゝではやはり稅務署の內規の通り、一割を以て之に當てることゝする。そして償却は、最初の建築費から殘骸價格を引去り、更に修理の項で述べたものの中30年以內で廻轉するものを引去つた殘高について(これには相當議論の餘地があるが)計算する事とする。かくする時は本例に於ける一ケ年平均償却高は148.08圓となる。因に大阪市では、市有木造建物の使用可能年限を30年と定め、低下率（償却率）を1/30とし、均等償却をする事にしてゐる。而して30年を越へて使用に耐へるものについては30年目の價額、即最初の1/30の價額を以て殘骸價格としてゐる。又借地法に於ては建物保護の見地から、かゝる種類の建物に對しては、借地權存續期間を最短20ケ年と定め、別に期間を定めざるものについては、建物が朽廢せざる限り30ケ年としてゐる。

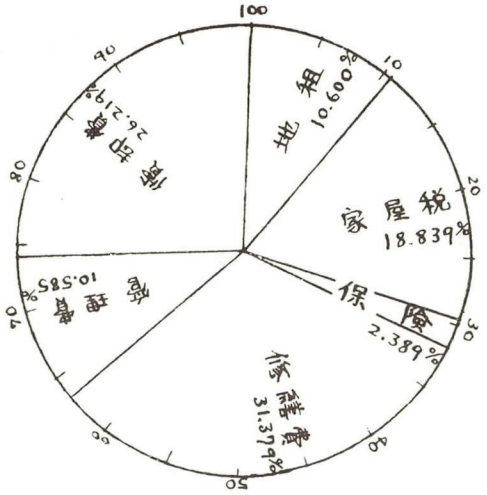
以上を以て、損金の各項目を述べ終つたわけであるが、この外に都市計劃、道路に事、水道工事等による受益者負擔金、造作買取問題、風水害等による損失、訴訟費等があるが一般的に豫想は不可能であり、ことに受益者負擔金、造作買取の如き一種の資本的支出については、理論としては賃料の更改をなす可きであつて、特に前者に對しては借地法、借家法にも賃料の增減を請求し得る樣規定してゐる。從つてこれ等は總て一先づ損金としての計上から除外する事とする。然し以上の場合の賃料增額の請求權は、一方的の意思表示により効力を發生する形成權である事は、學說、判例に徵しても明であるが、實際問題としては、從來の習慣も手傳つて、その增額は相當困難であり、最後的に訴訟を提起する場合でも之を請求權と解して相手方の承諾の意思表示を求める申立てを爲す場合が多い。從つて上に述べた如き諸項目については、實際經營としては、或程度の安全率を見込んで補正をする事が必要である。

即ち、以上算出した損金を合計すれば、年額565.76圓となる。今この損金の割合を明に

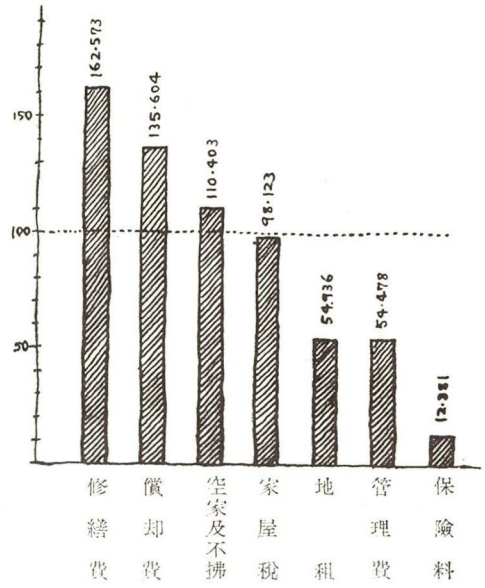
するため第6圖を揭げやう。

又實際の經營者に便な樣に、一ケ月家賃を單位（100）とした場合の、諸項目の係數を第7圖に示さう。

第6圖 一例ニヨル損失金割合表



第7圖 一例ニヨル一ケ月家賃額100ニ對スル一ケ年諸項目係數



IIII 純益附利廻

以上述べ來つた事を總括してみるに、益金は年額1,189.84圓なるに對して、損金は合計565.76圓となり、差引純益624.08圓となる。今十二ケ月家賃額に對する收入、支出全項目を圖示すれば、第8圖の如くになる。

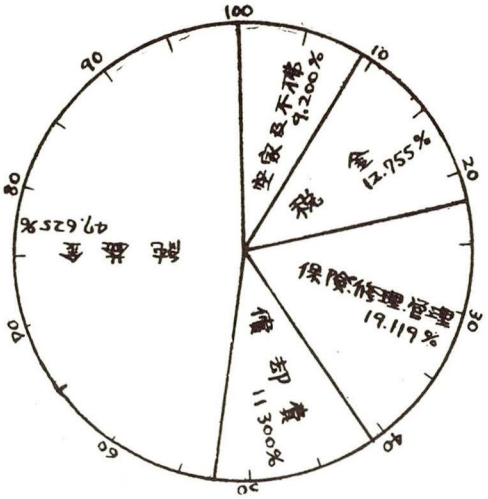
これで投資額、利益金、損失金の一通りの說明を終へ、最後の利廻りに到達したわけであるが、たゞ土地に對する權利金、及び敷金の問題が殘されてゐる。借地に對する權利金は、純住宅に關するものでは、當大阪地方では一般的には未だ餘り問題になつてゐない。故に敷金についてのみ考へる事とする。

敷金を取る事は賃借人の經濟能力の保證がその第一の目的である。最近この敷金に對し利息を附す可しとの問題が提起されて來てゐる。これは賃貸借が正當に行はれる場合、或は當然の事であらう。たゞその利率を如何にするかは、實際問題として、相當困難なものである。敷金を現金として預る代りに、定期預金證書、有價證券の類を當てると、この困難は解消する。將來はかゝる方法によつて保證金利息問題の解決をはかるのも一つの方法かと考へられる。

敷金の高は、現在一般賃住宅では、六ケ月分乃至三ケ月分家賃額が普通である。そして

家賃の低額なもの程、其月數が少く、最近では敷金無しの前家賃と云ふのも相當出來てゐる。今本例に於ては、廣く行はれてゐる如く、現金を以て家賃の三ケ月分の敷金を受取つたとし、それに、年三分の利子を利益金として計上する事と假定する。この利率は、保證金なるものが、假受勘定である限り、何時でも現金にして拂戻さなければならぬ性質のものであるから、これ以上の推定は困難なものと考へられる。この數値によつて、空家率を控除すると、利息年額9.30圓となる。純益に之を合すると合計633.38圓となり、全投資金額 10,731.73圓に對し、見掛けの利廻りは、年0.0590となるが、實際は建物を30ケ年に償却するから、正確には下式によつて求める。

第 8 圖　一例ニヨル十二ケ月家賃高ニ對スル諸項目表(但シ敷金利息收入ヲ除ク)



(純益年額＋償却年額)•i•a_{30}

＝全償却高＋(不要償却元本)•i•a_{30}

こゝに$a_{\overline{30}|}$＝$^1/_{(1+i)}$＋$^1/_{(1+i)^2}$＋$^1/_{(1+i)^3}$

……＋$^1/_{(1+i)^{30}}$

上式から、年利率 i を求めると0.0683となる。但しこの利廻り算出法に於て利益金は一ケ年を通じて、毎月々に入るに對し、損失金は其大部分が、六ケ月以上の周期を以て、後掛けとなるから（但し家屋稅は前掛け）これを各一ケ年平均に見積る處に多少の誤差のある事を斷つておく。

仍つて、以上は土地建物を共に所有した場合の利率であるが、借家經營の實際をみるに土地が他人からの借地である場合、即ち俗に云ふ底無しの場合が多い。かゝる場合の利廻りは如何と云ふに、利益金は前述のものに等しく、損失金は前述のものから、地租を減じ土地の賃借料を加へたものとなる。而して、敷金を地代の三ケ月分だけ入れたとして、之を投下資本に加へると、純益金額345.61圓、投資高5,684.38圓となり、見掛の利廻りは年0.0609となるが、正確には前同樣にして0.0801となる。

因に、この場合の土地所有者の利廻をみるに、利益金は土地の賃貸料（不拂による率を控除したもの。こゝではⅡで述べた數値をそのまゝ用ふる事とする）と、敷金利息であつて、損金は地租のみと假定する(即管理費不要と假定する)と、年利廻り0.0472となる。然し實際の土地經營者の利廻りは、營業費、空地、無收益土地の存在等のため、綜合的にはこれより遙に低下するものである。たゞ土地の經營には、地價の騰貴があつて、この低利

廻の缺點を補正するが、その割合は一般的に述べる事が不可能であり、本稿の目的の範圍を餘りにも越へるものであるから、詳述を避けるが、未完成の土地、即ち、開發途上にあるもの程、その騰貴率の高い事は明かであつて、一方それだけに最初の不毛、土地改良費其他の危險負擔が多く、之に反して完成し切つた土地については、騰貴率が僅少であつて投資金高の複利による元利合計や、物價指數に比較しても大したものではない事を附記しておく。

結論に入る前に、以上取扱つた數値を整理する意味で第一表を揭げやう。

第1表　本稿ニテ取扱ヒタル例ノ數値

資投額	**10,731•73圓**（土地、建物共）		
土地價額	4,830•00圓	土地坪數　96•60坪　單價50圓	
同　登錄稅 取得稅	304•29圓	登錄稅 $\frac{33}{1000}$ 取得稅 $\frac{29 \cdot 799}{1,000}$ 下記建物ノ取得稅割合ニ同ジ	
建築費	5,460•00圓	建坪(大工坪便所ヲ除ク)42坪　單價130圓　(造作付)	
同　取得稅	137.44圓	本(府)稅(1,000圓ニ付キ)7圓　附加稅(本稅1圓ニ付キ)3.257圓	
家賃	**109•20圓**（月額）　**1,310•40圓**（年額）従來最モ一般ニ行ハレテキル建築費ノ$\frac{1}{100}$ヲ以テ家賃金トシタモノ		
空家率	5.417%	大阪市(自昭和元年至同十年)總純住宅100ニ對スル平均空家數4.883　四貫島、櫻島(昭和十一年調)總純住宅100ニ對スル貸住宅數90.14	
不拂率	4.000%		
空家及不拂ヲ控除シタル有効率　**90.800%**　同家賃年額(益金)1,189•84圓			
諸經費	（損金）　年額　**565•76圓**		
地租	59.99圓	一ケ月家賃100ニ對スル割合 54.936	本稅(賃貸價格ノ)$\frac{3 \cdot 8}{100}$　附加稅(本稅1圓ニ付キ)1.652圓(十二年度)昭和七年以降ノ上昇具合ヲ30ケ年間延長シテ平均シタル値
家屋稅	107•15圓	同上 98.123	本(府)稅、賃貸價格100圓ニ付キ1.09圓　附加稅(本稅1圓ニ付キ)8.61圓(十二年度)昭和二年以降上昇具合ヲ30ケ年間延長シテ平均シタル値
火災保險料	13•52圓	同上 12•381	疊、裏返シ一年半毎、表替一年半毎 壁内部六年目塗替、外部十年目塗替 錺、五年目ニカケカヘ　フスマ、六年目ニ張替 物干、七年目ニ取カヘ
諸修繕費	177•53圓	同上 162.573	
管理費	59•49圓	同上 54•478	集金高ノ5%
減價償却費	147•08圓	同上 135.604	壽命年數ヲ30ケ年トシ、殘骸價格ハ全額ノ10%及30年以内デ回轉スルモノヲ當テ毎年均等償却ス

純 益 金	624•08圓	
利 廻		
地付ノ場合	0.0683	敷金トシテ家賃三ケ月分ヲ預ツタトシ之ニ年三分ノ利子ヲ見積ツテ(9•30圓)之ヲ利益ニ加算シタモノ
借地ノ場合	0.0801	地代ヲ月28•98圓トシ之ガ三ケ月分ヲ敷金トシテ地主ニ支拂フモノトシテ、投資額ニ加算ス、家ニ對スル敷金利子ハ地付ノ場合ト同樣

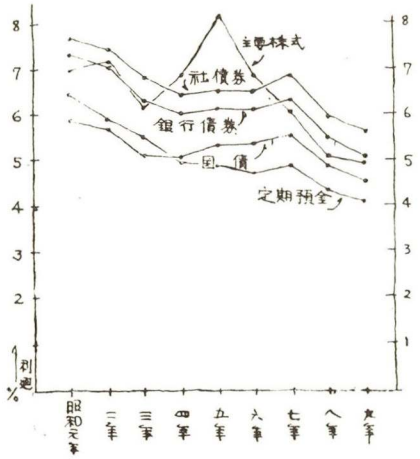
從來漠然ト、稅金、不拂、空家ニ依ル損金ヲ年當リ家賃ノ二ケ月分ト見込ミ（從ツテ收入ノ方カラハ、一年ヲ十ケ月トミル）之デ充分安全デアルトシテキタガ、現在ニ於テ（昭和十二年）上ノ如キ不拂、空家率ヲ假定シテモ家賃月額100ニ對シ、地租 32•10家屋稅 61•90 不拂空家ニヨル損金110•40 合計204•40トナリ旣ニ二ケ月分ヲ以テシテハ不充分デアル

V 結 び

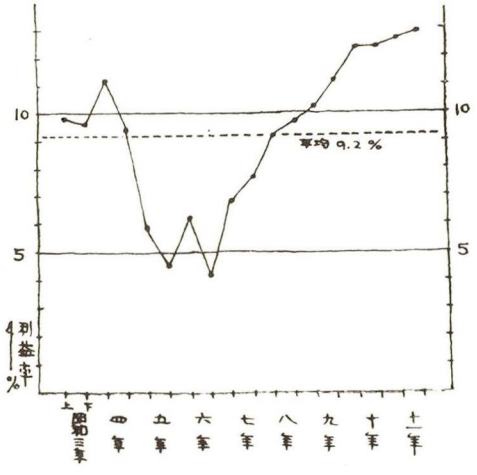
大體上述の計算によつて、貸住宅經營に於ける利廻りは、一般豫測を許さゞる支出を除外して、地付の場合 0.0683（但し第1表に示す如き土地建物の割合に於て）、借地の場合 0.0801なる率を得た。

こゝで一般利廻の情勢を瞥見するために、第9、10圖を揭げる。

第 9 圖 有價證券利廻表
（日本勸業銀行調査ニヨル）



第10圖 主要株式會社拂込資本金額ニ對スル利益率（三菱經濟研究所、昭和十一年下期本邦事業成績分析ニヨル）



一般に、投資に對する利廻は、全く保守的な定期預金から、順次國債、社債、事業へと換價への自由度、安定度の減少につれ、それが高率となる事は當然である。貸住宅に對する利廻りは果して如何なる數値が妥當であるかは、相當議論の餘地があるであらうが、その判定に當つては、上記有價證券等に比し、その投下資本が全く固定される事、換價が容易でない事從つて或程度の流動資金の準備を要する事、其投資額には自ら或一定の最低限

度がある事、任意に分割が不可能な事等を充分考慮に入れなければならない。

筆者はこの利廻りに關し、獨自の立場から下の如き見當が妥當なものではないかと考へる。即ち、家屋のみの經營の場合、之を普通事業に比較すれば特趣技能を要しない事或程度副業的に經營し得られる事等から、第10圖に示した如き利廻（これは大資本のものではあるが）の稍々下廻りを行くものではなからうかと考へる。

土地建物を一體として經營する場合の利廻は、之を一丸として算出する事は前例の如く可能ではあるが、一般的標準を求める事は不可能である。何故ならば土地と建物はその性質上互に相當懸隔のある利廻を要求するものであり、而もその量（價額）の組合せは如何樣にでも出來得るからである。從つて土地と建物と一體の場合は、之を各別に考へる事が妥當であらう。但し純然と各別々に經營したものと同一率である事は不合理である。ことに土地は自己が使用する場合と貸地とした場合は、地上權の問題があるから當然其率は異るものである。そこで土地建物一體に經營の場合の土地の利廻は如何と云ふに、大體上述の缺點と、利點とを併せ考へて、その率は定期預金より上廻りであつて、有價證券よりは上に出ない事は想像に難くない。筆者は將來之を國債と定期預金の中間程度が妥當ではないかと考へる。

次に、Ⅰで述べた從來の投資額決定の方法、從つて引いては家賃額を定める方法について考究するに、

第一の舊來の地付きの場合に多い、建築費の$\frac{1}{100}$を以て家賃とする方法は、本例の如く土地建物が其價額に於て相半ばする場合は、次に述べる第二の方法と大體一致し、而も上に述べた如き私見の利廻に近くなるが、これより土地の額が減少するにつれ高利的になる即ち逆に云へば、市中央部の如く、地價の高い部分程この方法は不利である。

第二の土地建物を合した額の$\frac{1}{100}$程度を以て家賃とする方法は、第一とは逆に土地の額が$\frac{1}{2}$以上になるにつれ、高利的なものとなる。從つてこの方法は將來益々一般に採用される事は想像に難くない。

第三の場合、即ち家屋のみから生ずる利益に、土地の賃料を加へる方法は、上の二つの方法の缺點を除いたものであつて、先にも述べた意味から最も合理的な方法である。地付きのものでもかくして家賃を算出する事が望ましい。この方法を實際の經營者に便な樣に式で示さう。下式の數値は總て本稿で扱つた例によつたものであるから、之等と著しく異つた條件の下では夫々適當な補正が必要である。ことに空家率、不拂率、償却年數、敷金權利金の有無、安全率の取入等は特にその補正の必要な場合が多い事と思ふ。

即ち地付きの場合の家賃月額の定め方は、下式によつて算出する。

（土地價額）×（土地に對する希望の年利率）×0.120

＋（建築費）×（家家に對する希望の年利率）×0.174

第一項土地に關する係數0.120は、この場合家屋と一體に經營されるものであるから、家屋の空家、不拂率をそのまゝ採用し、これに地租の支出を組入れたものを月額に直したものである。管理費については、家屋の方で見るから、無關係である。第二項家屋に關する係數0.174も之と全く同樣にして求めたものである。

借地の場合は、下式による

(地代月額)×1.1+(建築費)×(家屋に對する希望の年利率)×0.174

第一項の1.1は家屋の空家、賃料不拂の場合にも土地に對する賃借料を支拂はなければならないための歩增しで、前に說明した空家、不拂を控除した有効率90.80%の逆數である。從來の方法では、この歩增をせずに、第二項でいくらかの餘分をみてゐるが不正確であるの謗は免れない。

以上、二つの式の、第二項の係數は、地代を本例によつて算出した一定額として求めてゐる。從つて、本例と著しく異る割合の地代を要求される場合は幾分か不正確となるを免れない。而してその誤差は地代が本例に示す如き割合以上に高くなればなる程、上式で求めた第二項の値は、眞實のものより不利になる傾向を有する。

最後に一言、かゝる不動產を擔保として負債を起した場合について述べるに、例へば上述の地付の場合をとつてみるに、その利廻りは、減價償却をせず、全部之を利益と見ても年0.0728である。今假に全投下資本の60%の金融を受けたとし、之が支拂利率を年6分5厘15ケ年に元利均等年賦償還するものとすれば、一ケ年に拂込みの元利合計は、投下資本1に對して0.0638强となる。即ち其の收益との差は0.0090となり、收得金額の殆ど全額が拂込み金として持出される事になる。而して十五ケ年の償還を終へて後、初めて建物の減價償却に取りかゝらねばならない事となり、而も金融を受けない殘りの40%の自己の投下資本については、この間無利息の狀態となる。即その負債の原因が、諸種の公租公課、其他如何なるものであつても、一度上の如き狀態に置かれると、その營利とゝふ點には、致命的な打擊を受けるものである。(完)

建築と繪畫について

豊藤勇

此の一小文は洋畫家としての私が日本の建築家へ贈る一提言である。從つて極めて畫家的な直感を以て散文的に書いたものであることを意識の中においていただきたい。

1

現在は準戰時體制が純戰時體制になり世の中は正に急迫しつゝある。此の非常時局が藝術文化面に及ぼした影響は意外に急速であり，根強いものがある。その實生活をひしひしと追ひつめて決定的な態度を要求してゐるのである。支那に對する重大事は無論のこと、事件後に起る國際的、國內的諸問題は今日の社會情勢を急角度に一變して了ふであらう。美術家の生活其他一般の美術活動は縮小されて來るであらうことを覺悟せねばならない。吾々の關心は美術よりもラヂオニュースであり、號外であり、ニュース映畫である。ニュース館の超滿員列をなせるに反し、如何に美術展覽會の寥々たる事よ。現に今年の某展は入場者極めて少なく意外の赤字で、大阪開催も自力では困難とか聞き及んでゐる。又事實既に美術家や美術關係者の中からも召集され出征してゐるものがあるのであり、今後逐次增加して行くであらうから、美術界も寂寥の度を加へるかも知れない。

吾々は美術人たる前に先づ國民であり、社會人であるから、自己存在を規定する根本的な社會事象の異變に無關心ではゐられないのである。

吾々の藝術文化はいまや次の新時代に向つて一大轉換をしようとする過渡期にある。

此の現象は他の一般社會情勢と一致する。今この國が國際間に占める位置においても同樣に云はれることである。一面的（悲觀的）に見ればこれは「文化の危機」であらう。然し吾々はこれを單に「文化の危機」として默認していゝものであらうか。

此の非常時に於て吾々は何を成さねばならないのであらうか。

此の危機をして辨證的發展の一過程として新時代の創造に努力すべき最も歷史的に重大な時であらう。此の間一方內面的には文化的敎養と頭腦的修練に必要な凡ゆる知識の蓄積が要求される。他方社會面に對して何をなすべきか。

現在多くの美術家が社會生活に對して何等直接に働きかけて居ない狀態にあるのに寧ろ驚かされる位である。現在我が國に洋畫家丈けでも一萬人以上居るであらう。その內副業を持たない專門家が半數の五千人と見ても現在我が國の洋畫の需要から考へてその生活は非常に困難と見なければならない。「繪畫のための繪畫」を描く事丈けが美術家の仕事であつた時代は過ぎたのではないか。

畫家は街頭に出て、レアリストとなり、モニュマンタルにならねばならない時代が來てはいないか。

現在美術家の手に依つてなさるべき仕事が相當あると思ふのである。

例へば都市美について畫家の立場から意見を述べ都市計畫に參加するとか時局に對する勝れた指導的なカリカチユアを描くとか、あらゆる公共的な建築物に壁畫を描くと云つた様な仕事がもつと積極的になされてもいゝのではないかと思ふのである。

此處で一つ問題としたいのは建築と繪畫につゞいてゞある。



ドイツステンベルヒ（ヘレズリニ）

2

然らば「如何なる繪畫が今後の建築に於いて必要であらうか」

此れは建築そのものが社會生活と深い關係にあると同じ様に、その中に入れる繪畫も亦根本は社會生活に依つて左右せられるわけである。

過去に於いて繪畫は建築と同じくその時代、その國の支配階級の感情、觀念、指導、イデオロギーに一致した表現の技術的手段を持つてゐた。即ち希臘、古代ローマ時代に於いては帝王の藝術として臘畫があり、中世封建時代には宗教宣傳のためのフレスコがあり、文藝復興期には油繪を以て風俗畫が描かれたのである。

然るに今日の如き獨占資本主義時代に入つた建築は機械的（合同的）な、合理的な（科學的）經濟的（社會的）な、無定形（無様式）なものであるからして、その中に入れる繪畫も亦此の要求に應ずるものでなければならない。

先年或アカデミツクな洋畫家のグループが銀座の各商店のショーウイドを利用して街頭

展を催した事があつた。それを見ると展覽會場で見せられた繪よりも全體が非常にきたなく見え、まるで骨董品の様であつた。

畵家の教養を通して表現された作品は現實のものより一般に大衆を引きつけねばならぬ筈ではなかつたか。然るに偶然同居させられてゐるショーウインドの商品のエナメルのハンドバツク、ガラス製のコツプや花瓶、時計等の方が高價な額緣に收められた大家のバラの花よりもはるかに近代美があるのである。

人物畵でさへ同様に論じられないこともないのである。

此れを以てしても、建築內の裝飾の一部として繪が壁面を埋める限り、純粹繪畵に於いても、新しい方向を暗示する。殊に大作である場合はそれ自身壁畵としての性質を持つて來る事にならう。

在來のでかでかした彫刻のあるフレームに入つた繪と云ふものは、現代の建築にはどうもぴつたり來ない、そんなものは寧ろない方がすつきりしてゐる。何故ならばそこに用ひられてゐる金屬や、硝子の方が吾々に美しく見えるのである。

此れは建築がその機能として利用更生的なものだけで成り立つものなら丈夫な箱でいゝ筈だが、原始人がアルタミラの洞窟の壁に牛や鹿を描いた様な素朴な必理が新しい材料、金屬や、硝子等に變つて續いてゐる。感覺上の相違はあるだらうが何んとか飾らなければおさまらない氣持は似た様なものであらう。



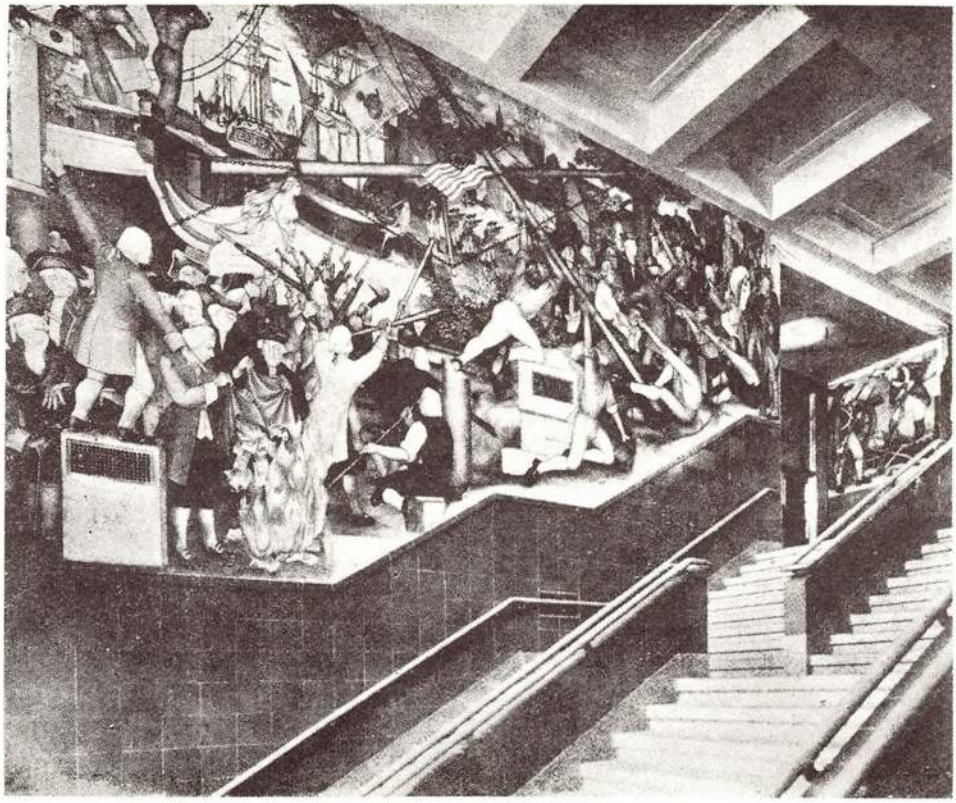
京都朝日ビル壁畵

ところがその建築の機能的要求が眞白な漆喰壁の平らかさをよろこべる場合と、そこに模様が欲しい場合とが出來てくる、その模様の一つとして壁畵がある。

繪畵は機械工業の偉力にも打ち勝つべき强力な精神の手工業である。それだのに機械工業の社會的征覇は、屢々この領域をも襲ひ、危く亡ぼさうとする。

古代の壁畵を想起して見よう。

それらのものは同時代の偉大なる建築物に決して劣らぬ堂々たる構造物である。其處には精神の勞働がある。繪畵は現在ヒユーマニ



アメリカ建國史　ジョーヂワシントン學校壁畵（ヴイクターアーナトーフ）

ステイクな傳統の要素と、幾何學的な形式との對立問題に苦しんでゐる。

機械工業の諸成果の上に立つて人間文化のマツスとしての表現を希ふことは壁畵の形式を當然豫想するものである。其處で新しい壁畵と云ふ形式が要求されて來るわけである。繪畵は在來の額緣を乘り越え建築と直接握手し、此れをフレームとして相互扶助的な役割をなすものである。即ちカーテン、窓、ソファー、テーブル、パイプ、椅子等は壁畵の一部であり、又壁畵はこれ等の一部となる。

眞の壁畵は一般的並びに特殊な人間機能の綜合的な、そして意義深き總和たる建築の缺ぐべからざる機能の一部であり、建築と云ふ機械と、それを使ふ人間社會とを統一し、融合する一つの要素である。此れが壁畵の存在理由である。

かくして壁畵のもつ造形美は建築を一層活かし相互的に美を增すであらうし、大衆と藝術とを親しく結び付けて西洋畵の發展を計る結果ともなるであらう。

3

こゝで新しい壁畵の製作方法が問題である。

現代の鋼鐵、煉瓦、石、セメント、硝子等で構成された建築の効果的な機能的な要素を

發揮するには、タペストリーに似た繪畫即ちカンバス畫を粘布した壁畫は、それが如何に藝術的であらうとも畢竟芝居の幕であり、もつともよい場合ですら非常に高價な壁紙でしかあり得ない、そして一種の悪趣味たることは疑ふ餘地のないことである。

吾々は此の時代性を認識し、把握し、これに從つて行動すべきである。すべての醜悪なるものは、生活によらざる時代錯誤より生するものである。

科學は畫家の領域に新しい技術的手法を提供し、畫家は徐々にその効用性を發見してゆく。下圖の幾何學的理論的追究、計算、寫眞の應用、モンタージユ、エアブラツシユの使用等が考へられる。しかして此の方法は來るべき時代の壁畫の大量製産に順應することが出來、建築に於けると同樣に經濟的となるであらう。

色彩の新しい材料の例としては、デユコラツク、ソヂウム硅酸鹽等を擧げることが出來る。これ等は乾燥度急激なるためエヤブラツシユが使用される。此れを最初試用したのはメキシコの畫家シクエイロス（Sequeiros）とその一團の作家たちが、ロサンジエルスのセンタープレイスに長さ三二米、縦九米の壁に描いたものがそれである。

又ブエノスアイレスでは 200平方米のフレスコを描いた。此の時の方法は石灰と砂の下塗りの上に傳統的なフレスコを描いたのである。

下塗りが乾いてフレスコのほんとうの効果が現はれると、最後にソヂウム硅酸鹽で補筆を加へた。

この技法には寫眞のドキユメントの使用が應用され、電氣映寫機によつて鉛筆のエスキースを大きな壁面へ機械的に移すことが出來る。



メンローパーク學校陶器科壁畫（マクシン・アルブロー）

現在のところフレスコより優秀な壁畵はまづないと云つていゝ。フレスコは本質的に建築的である。その構成材料は石灰、砂、セメント、マーブル、鋼鐵であり、顏料は酸化鐵、マンガニース、アルミニユーム、硫化銅等の化學的變化によるものに限られてゐる。

その構成は煉瓦か石壁に直接に構築される場合と、それ自體が鐵か木のフレームによつて支へられてゐる場合とがあり、本質的に建築材料と同様のものを使用するものである。

フレスコは描かれた壁ではなく、繪畵それ自體が壁を構成するのである。(石灰即ち水酸化カルシユームは空氣中の酸素によつて、化學變化をなし炭化カルシユームとなる……結晶する)



ブラジルコーヒ宣傳所　藤田嗣治氏

移動可能の架は現代建築に於ける空間のよき再分割であり、難なく移動出來る架は鋼鐵によつて樣取られ、强調され、フレスコは古代モザイクの壁畵の如く偉大にして純粹高尙なるスタイルを創造する。而して古代モザイクの堅固さの如く、非常なる現代可動性と完全に一致するのである。

4

建築のもつフオーム、色、構成材料又同建築の機能的要素が壁畵のテーマーを決定する。今迄のシヤヴアンヌ風、或は天平時代を思はせるもの、又は文學的、哲學的、象徵的な壁畵概念を一掃し、實社會のレアルの表現、例へば商工業生産の方向に沿ふ藝術發展の肯定されていゝ時代だと思ふ。

吾々繪畵人の新天地を開拓する意味に於いても、今後日本の工場、事務所、郵便局、銀行、百貨店、待合所、船舶、公會堂、病院、學校、各住宅等の進步的な建築主及び建築家

に依つて、その適當なる壁面をどしどし提供されんことを希望して止まない次第である。

そのためには畫家自ら進んで壁畫製作を試みて、餘り高價ならぬ費用で如何なる種類の需要にも應する事の出來る事を實際に示す必要がある。其處で大阪にも此度壁畫製作協會の成立を見たのである。

尙ほ觀光局、鐵道省、國際文化事業にも大いに壁畫を應用して、ポスター等の微力な姑息な宣傳から意義ある永久的なものへ進まれん事を希望してゐる。

5

壁畫の沿革史を述べるのが此の小文の目的でないから過去に於ける勝れた壁畫について論じる事を省略して現代壁畫の情勢について一瞥して見よう。

現在壁畫製作が最も盛んに行はれてゐるのはアメリカとメキシコである。

歐洲のフランス、ドイツも建築の進歩に平行して壁畫の採用が新しく登場してゐる。

メキシコは壁畫に最も適した氣候である關係上、デイエゴ・リヴエラとクレメント・オロスコの二大畫家がメキシコ市に數哩に亘る大壁畫を描いてゐる。これはメキシコの輝やかしき社會革命史を描いたものであるが製作中、妨害者に備へる爲め左手にピストルを持ち、右手に繪筆を採つたと云ふことである。

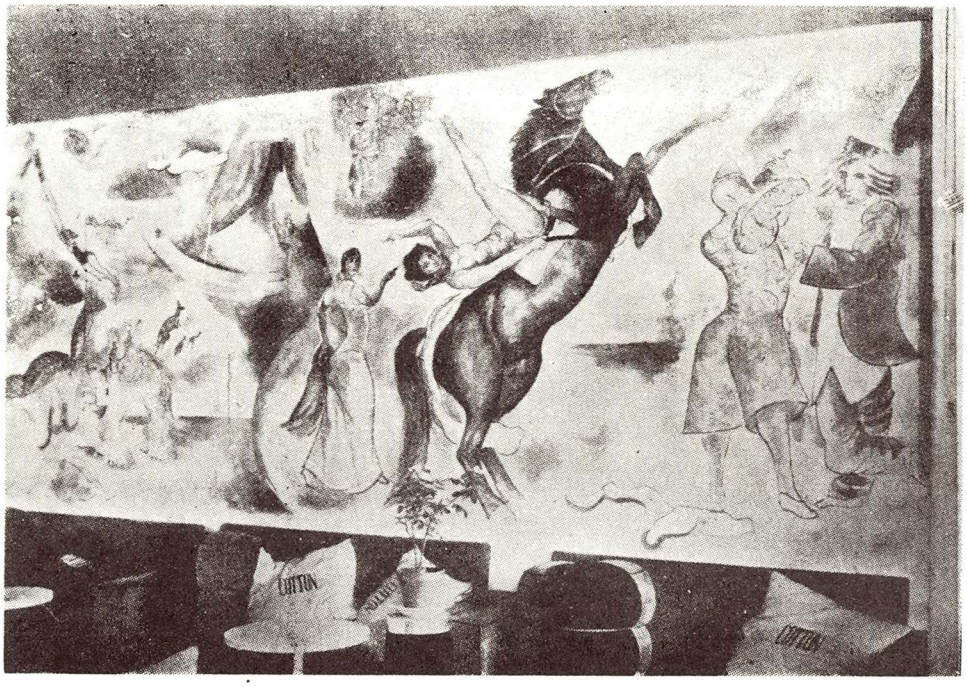


メキシコ小學校壁畫の一部（オロスコ）

アメリカは此の兩畫家の大きな刺戟に依つて新しい道を教へられた。

1933年に米國各地の前衛的作家の結束によりアメリカ政府に美術家の社會的存在を要望し同年12月より翌34年6月までの7ケ月間にアメリカ政府は1,312,000餘ドルの巨費を投じて、ワシントンD・Cに中央委員を置き全米を16區域に分つて其の各區域に地方委員を置き、アメリカ48州より畫家及び彫刻家を選拔して現代アメリカ生活をテーマとした藝術作品を製作せしめたと云ふことである。

斯くして一時大衆性を失つた繪畫もアメリカに於ては政府の助力によつて漸く復活の途につきつゝある。



コットンクラブ（東京）寺田武雄氏

現在我が國に於ける壁畵は、その生活樣式と經濟的關係で他國に比して一層無關心である。一部の進步的な食堂商店ホテル劇場等に試みられてゐるに過ぎない。

明治神宮の壁畵館であるとか、一部大學等にある歷史的なもの、象徵的なもの以外には藤田嗣治氏に依つて始めて壁畵の大衆化の道が開拓されたのである。「ブラジルコーヒー宣傳所」「大阪そごう食堂」「ロンモ洋裝店」「コロンバン」等に描かれた氏の壁畵はその建築的な筆致と精力的な効力に依つて中々立派なもので、エキゾチツクな風俗畵が多い樣である。今後日本の現實の生活が描かれるのを期待しゐる。獨立の川口軌外、伊藤、林の諸氏の手による京都朝日ビルの外裝の壁畵は我が國に於いて始めての試みとして興味を持たれた。その結果としてはその製作手法について、モチーフについて等色々の問題をもつてゐるではあらうが、啓蒙的な役割を傳統的な京都の都市建築に與へてゐることゝ思ふその點はその建築主及び建築家に敬意を表すべきである。

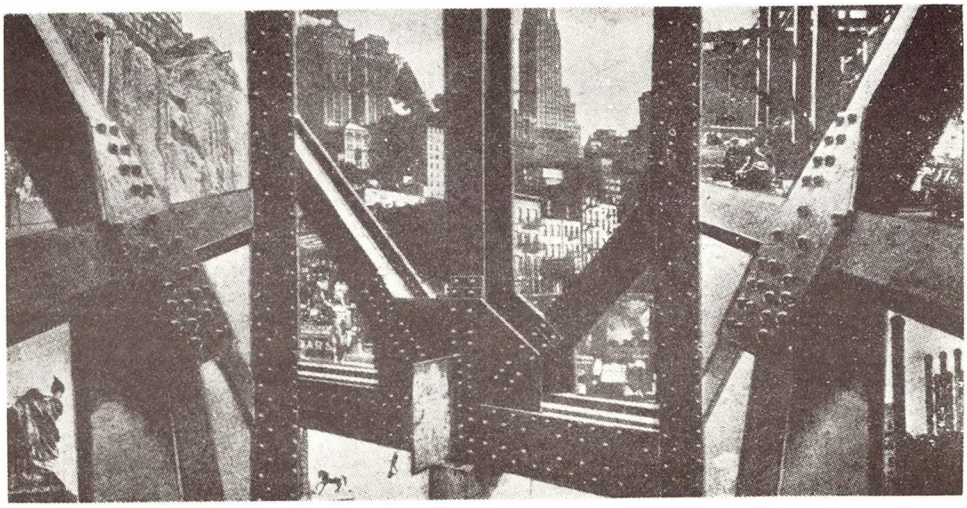
二科の野田、寺田兩氏によるバーコツトンクラブの壁畵は、アメリカ發達史を描いて有名なリベラ氏の流れをくむものと云へるであらう。

此の外最近の寫眞の進步に依つてアメリカ、フランスでは寫眞壁畵の流行がある。

米國の著名な寫眞家ステイチエン氏は紐育のラヂオ・シテイにあるＲＫＯロキシー座の喫煙室の壁面（高さ7呎、幅が 150呎餘）を一連のフオトモンタージユを以て埋めた。なほ先年のシカゴ萬國博にはフオードの陳列室の壁に高さ20呎、幅 600呎の素晴らしく横長い寫眞壁畵が利用された事を聞いてゐる。

日本に於いてもオリエンタル寫眞會社の努力に依つて 2、30尺平方の引伸し（部分的に引伸して作つたものらしい）が可能となり、喫茶店等に壁畵として試みてゐる。未だ着色の問題、永久性の問題が殘つてゐるが、此の寫眞壁畵の方面も大いに興味がある。

まだ此の外に日本建築に於ける壁畵の問題は日本畵の歴史的な發展から考へて可能性あることゝ思ふので、又別に論じることゝしたい。



ニューヨーク（寫眞壁畵）バーニス・アボット

鐵筋コンクリート單筋丁形梁計算圖表

藤　田　靜　雄

本文は去る八月號本誌上に於ける拙案(1) を今回單筋丁形梁に及ぼしたもので其の構成並に使用法は前者と全く同樣である。即ち巾 1m を標準にとり曲げモーメントより有効成を假定する事により直ちに所要鐵筋量を得るものであるが、今回は曲げモーメントに對しては丁形梁の有効巾Bを使用する點に注意を要する外何等異る所はないのでNo.12～No.18に就き其の概要を略說するに止める。

今有効巾Bなる丁形梁にMなる曲げモーメントが作用する場合巾 1m に對するものに換算して

$$M=M/B_1$$

但　B_1 はmeter を單位とするBの數値

を得、此のMより圖表上に梁の有効成 d を假定して巾1mに對する所要鐵筋量 At が得られる。仍つて巾Bに對しては

$$At=B_1A_t$$

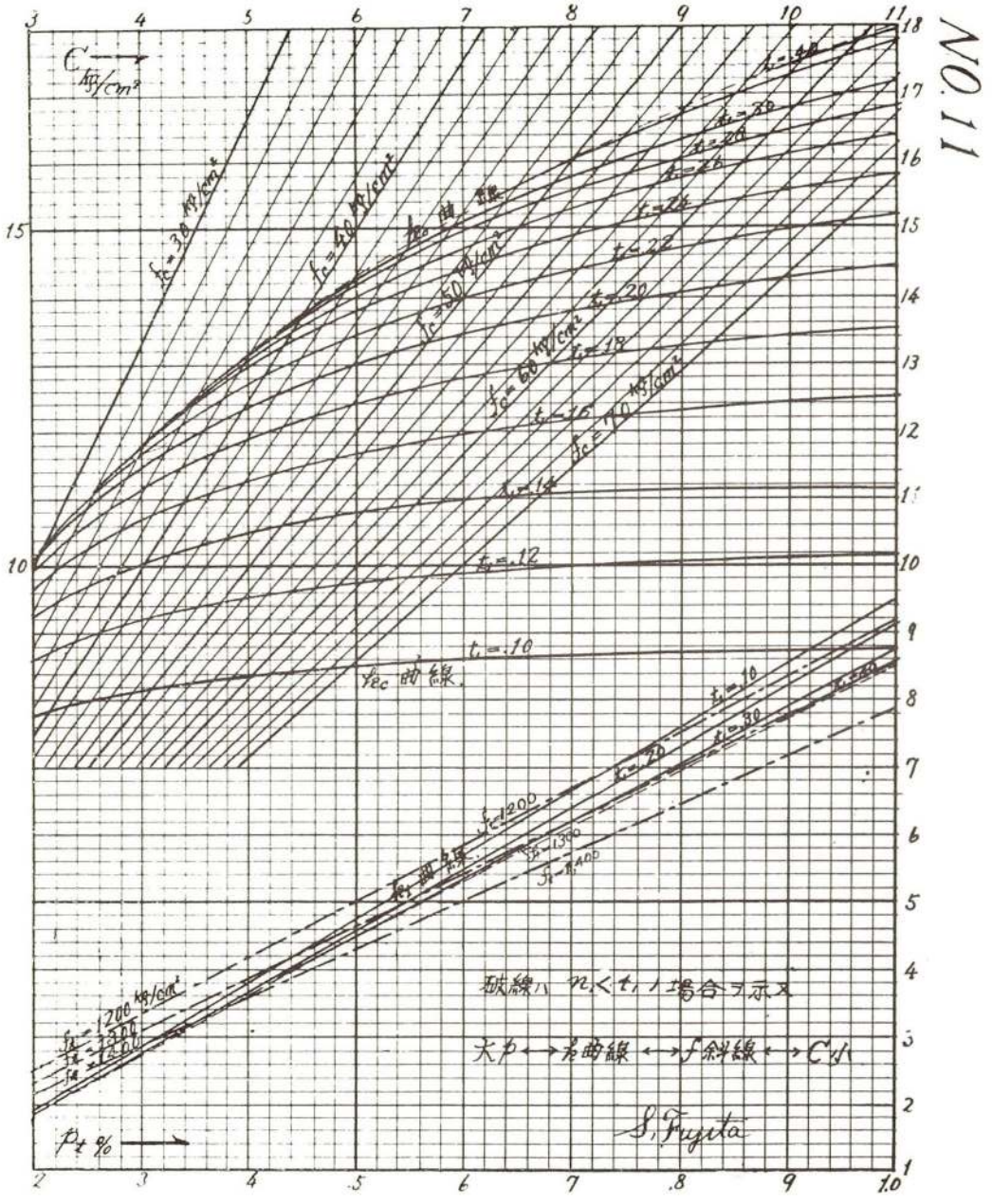
となる。又本圖表の範圍以下即ち Balance Reinforcement 以下では前回同樣次の近次式を用ふ。即ち

$$Ao(t)=M(tm)/d(m)$$

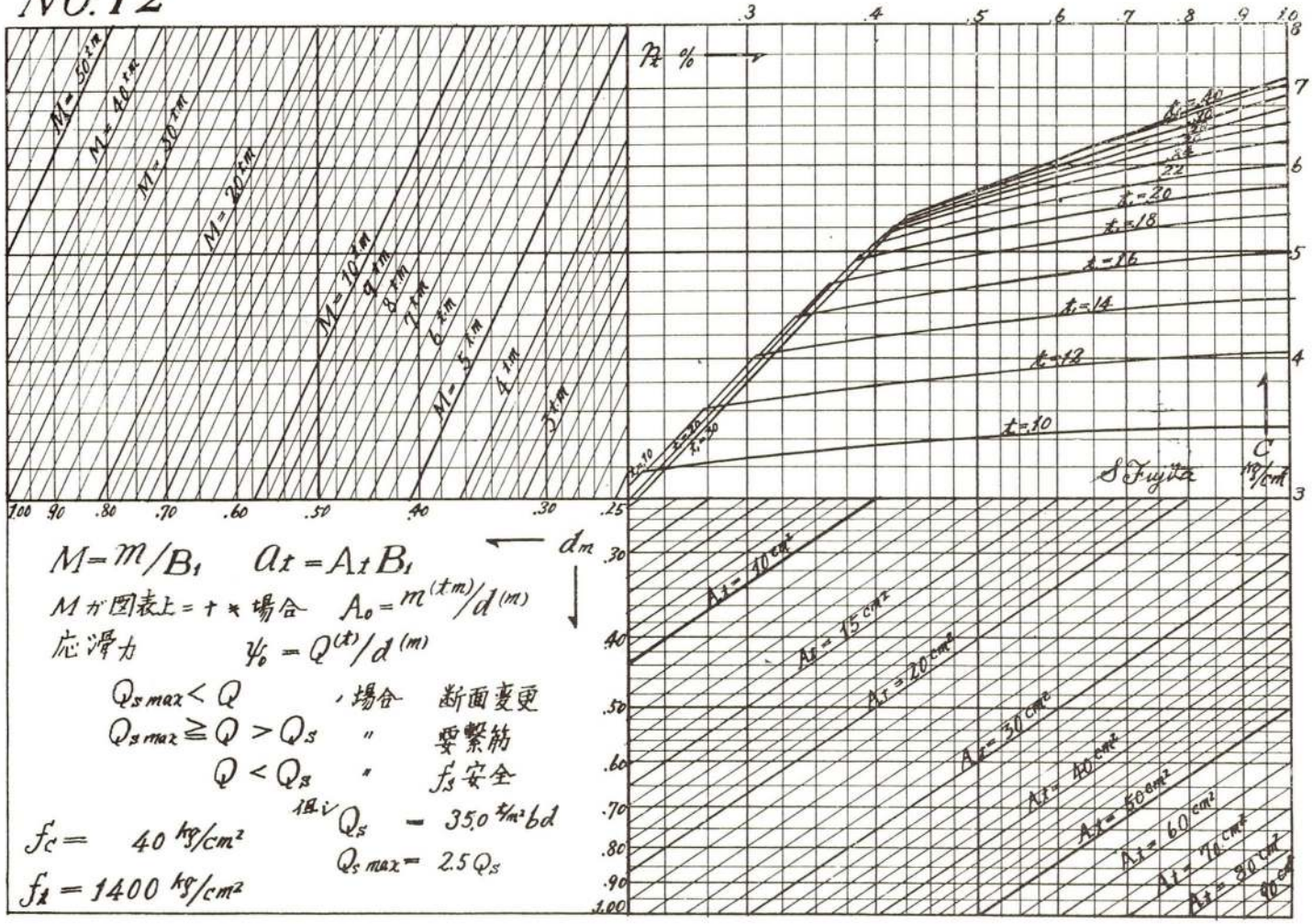
此の Ao を No.7 表に於て探せば所要鐵筋が得られる。以上は使用法の概要であるが、尙詳細は同號を參照され度い。又序でに床版用圖表（No.19、No.20）を附加して本稿を終る事とする。

拙稿　昭和12年8月號　本誌　鐵筋コンクリート矩形梁計算圖表

NO. 11


C kg/cm²
f_c=30 kg/cm²
f_c=40 kg/cm²
f_{co} 曲線
f_c=50 kg/cm²
f_c=60 kg/cm²
f_c=70 kg/cm²
t_c=40
t_c=30
t_c=26
t_c=24
t_c=22
t_c=20
t_c=18
t_c=16
t_c=14
t_c=12
t_c=10
f_{ec} 曲線
t_c=10
t_c=20
t_c=30
f_c=1200
f_c=1300
f_c=1400
破線ハ $n_c < t_c$ ノ場合ヲ示ス
大ト←→f_{co}曲線 ←→f_c斜線 ←→C_f小
S. Fujita
P_t %

NO. 12



$M = m / B_1 \quad a_t = A_t B_1$

M が図表上 = + * 場合 $A_0 = m^{(t\cdot m)} / d^{(m)}$

応滑力 $\psi_0 = Q^{(t)} / d^{(m)}$

$Q_{s\,max} < Q$ 、場合 断面変更

$Q_{s\,max} \geqq Q > Q_s$ 〃 要繋筋

$Q < Q_s$ 〃 f_s 安全

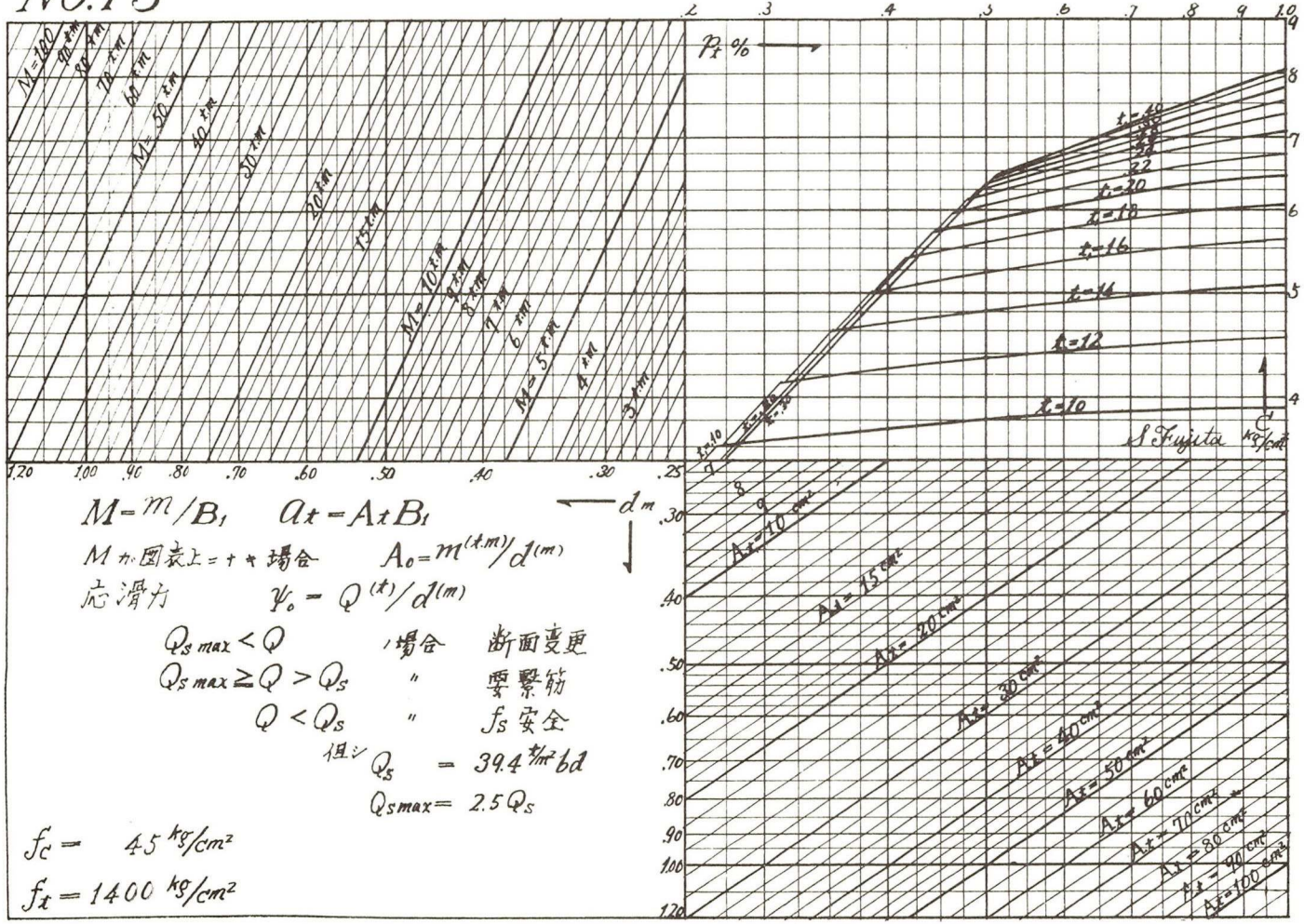
但シ $Q_s = 35.0\ t/m^2 bd$

$Q_{s\,max} = 2.5\, Q_s$

$f_c = 40\ kg/cm^2$

$f_t = 1400\ kg/cm^2$

NO.13



$M = m/B_1 \quad a_t = A_t B_1$

M が図表上にない場合　$A_0 = m^{(t.m)}/d^{(m)}$

応滑力　$\psi_0 = Q^{(t)}/d^{(m)}$

$Q_{s\,max} < Q$　の場合　断面変更

$Q_{s\,max} \geq Q > Q_s$　〃　要繋筋

$Q < Q_s$　〃　f_s 安全

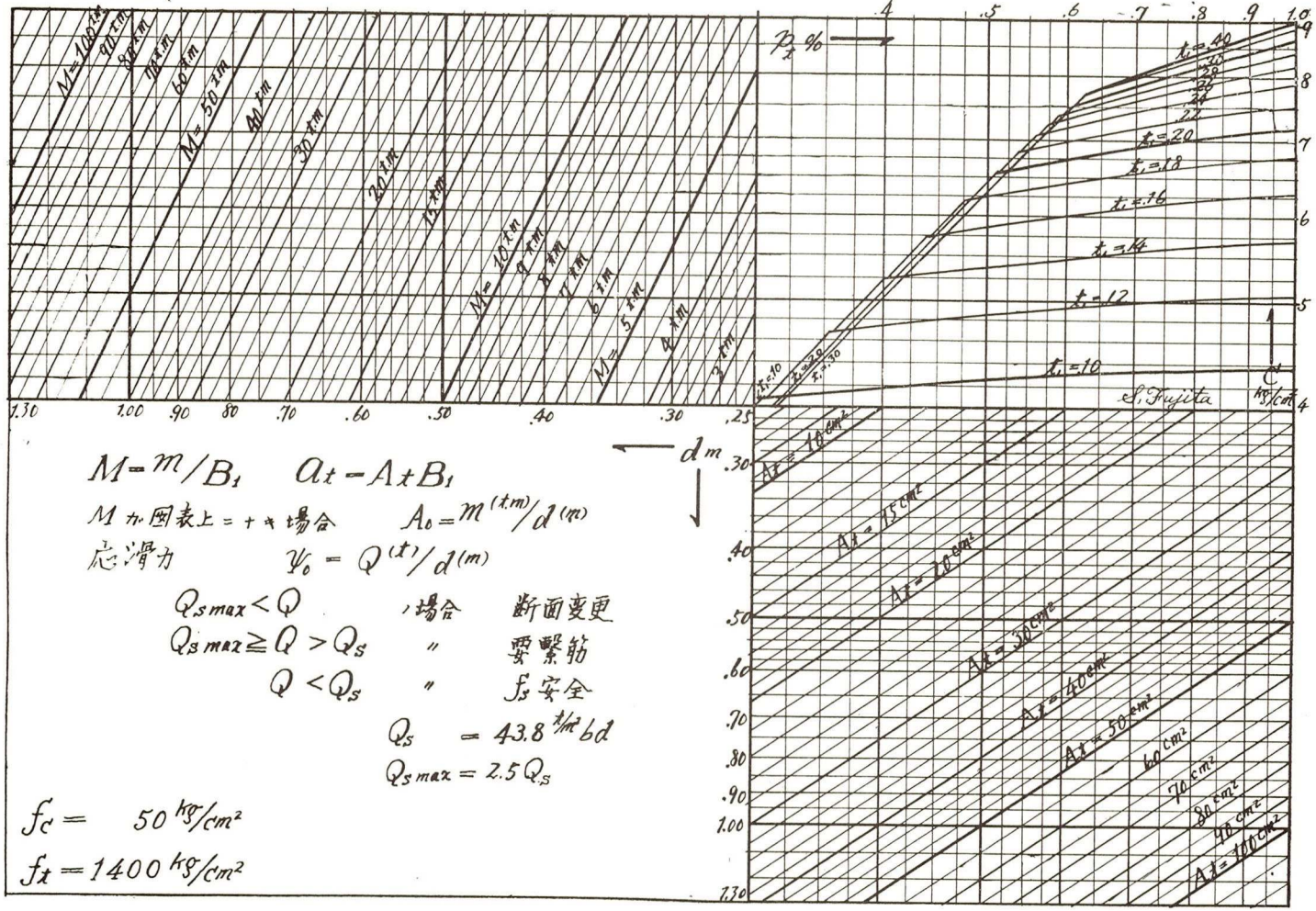
但シ　$Q_s = 39.4\ kg/cm^2 \cdot bd$

$Q_{s\,max} = 2.5\,Q_s$

$f_c = 45\ kg/cm^2$

$f_t = 1400\ kg/cm^2$

NO.14



$M = m / B_1 \quad a_t = A_t / B_1$

M が図表上にない場合　$A_0 = m^{(t.m)} / d^{(m)}$

応滑力　$\psi_0 = Q^{(t)} / d^{(m)}$

$Q_{s\,max} < Q$　，場合　断面変更

$Q_{s\,max} \geqq Q > Q_s$　〃　要繋筋

$Q < Q_s$　〃　f_s 安全

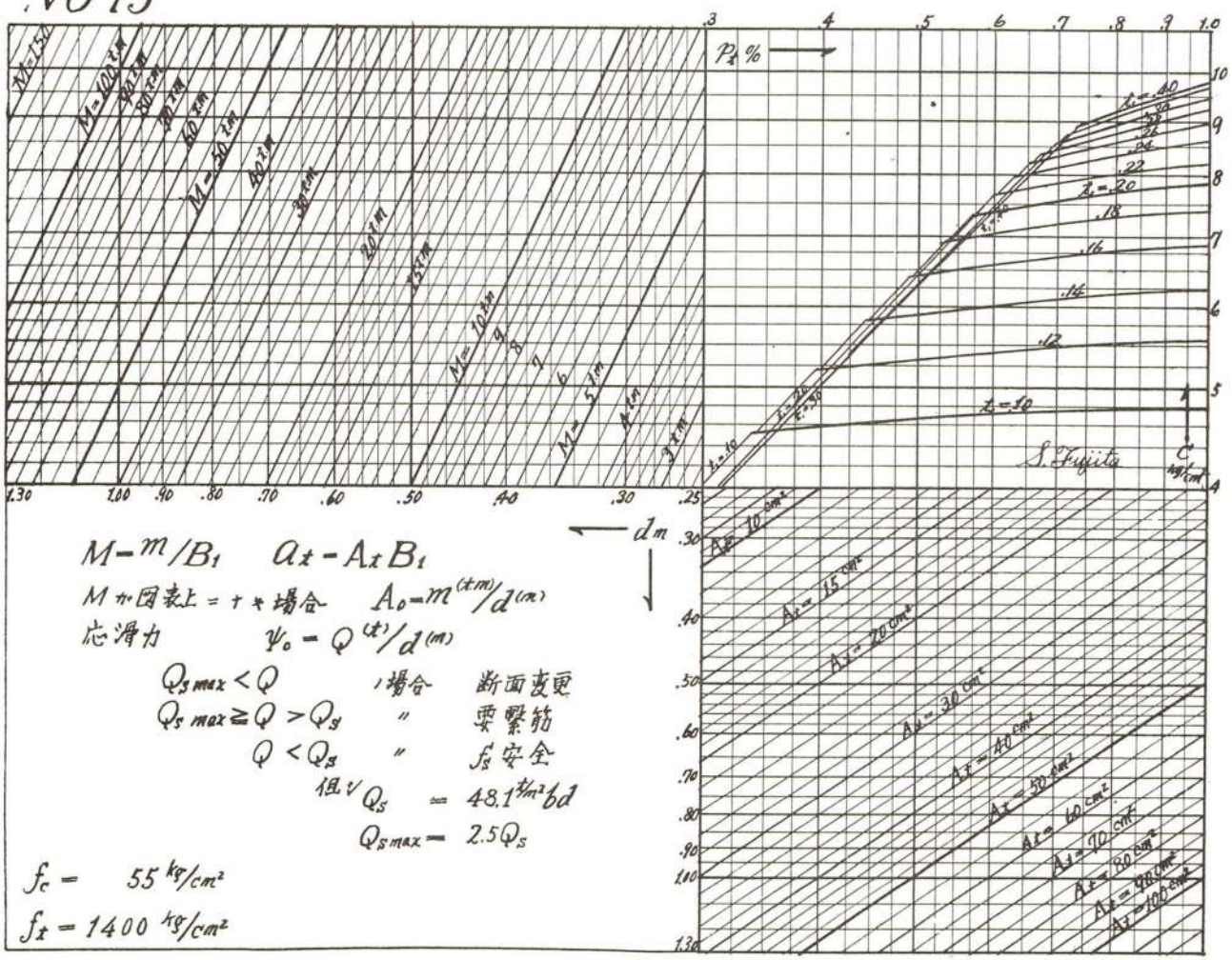
$Q_s = 43.8\ \text{kg/cm}^2 \cdot bd$

$Q_{s\,max} = 2.5\, Q_s$

$f_c = 50\ \text{kg/cm}^2$

$f_t = 1400\ \text{kg/cm}^2$

NO 15



$M = m/B_1 \quad a_t = A_t B_1$

M が図表上 = + + 場合 $A_0 = m^{(t/m)}/d^{(m)}$

応滑力 $\psi_0 = Q^{(t)}/d^{(m)}$

$Q_{s\,max} < Q$ 1場合 断面変更

$Q_{s\,max} \geqq Q > Q_s$ 〃 要繋筋

$Q < Q_s$ 〃 f_s 安全

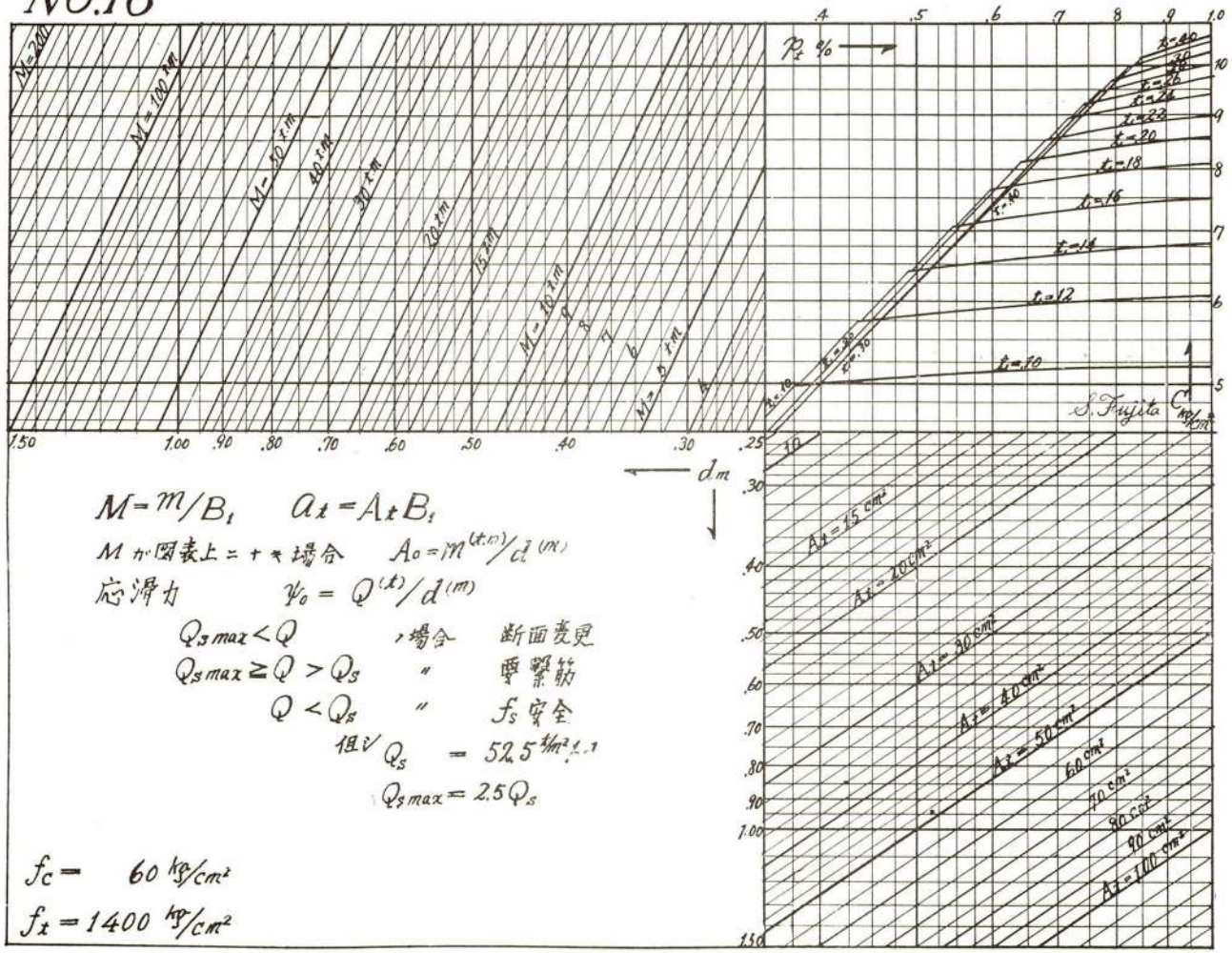
但し $Q_s = 48.1\,t/m^2\,bd$

$Q_{s\,max} = 2.5\,Q_s$

$f_c = 55\ kg/cm^2$

$f_t = 1400\ kg/cm^2$

NO.16



$M = m/B_1 \qquad a_t = A_t B_1$

M が図表上にない場合　$A_0 = M^{(t.m)}/d^{2\,(m)}$

応滑力　$\psi_0 = Q^{(t)}/d^{(m)}$

$Q_{s\,max} < Q$　〃場合　断面変更

$Q_{s\,max} \geq Q > Q_s$　〃　要繋筋

$Q < Q_s$　〃　f_s 安全

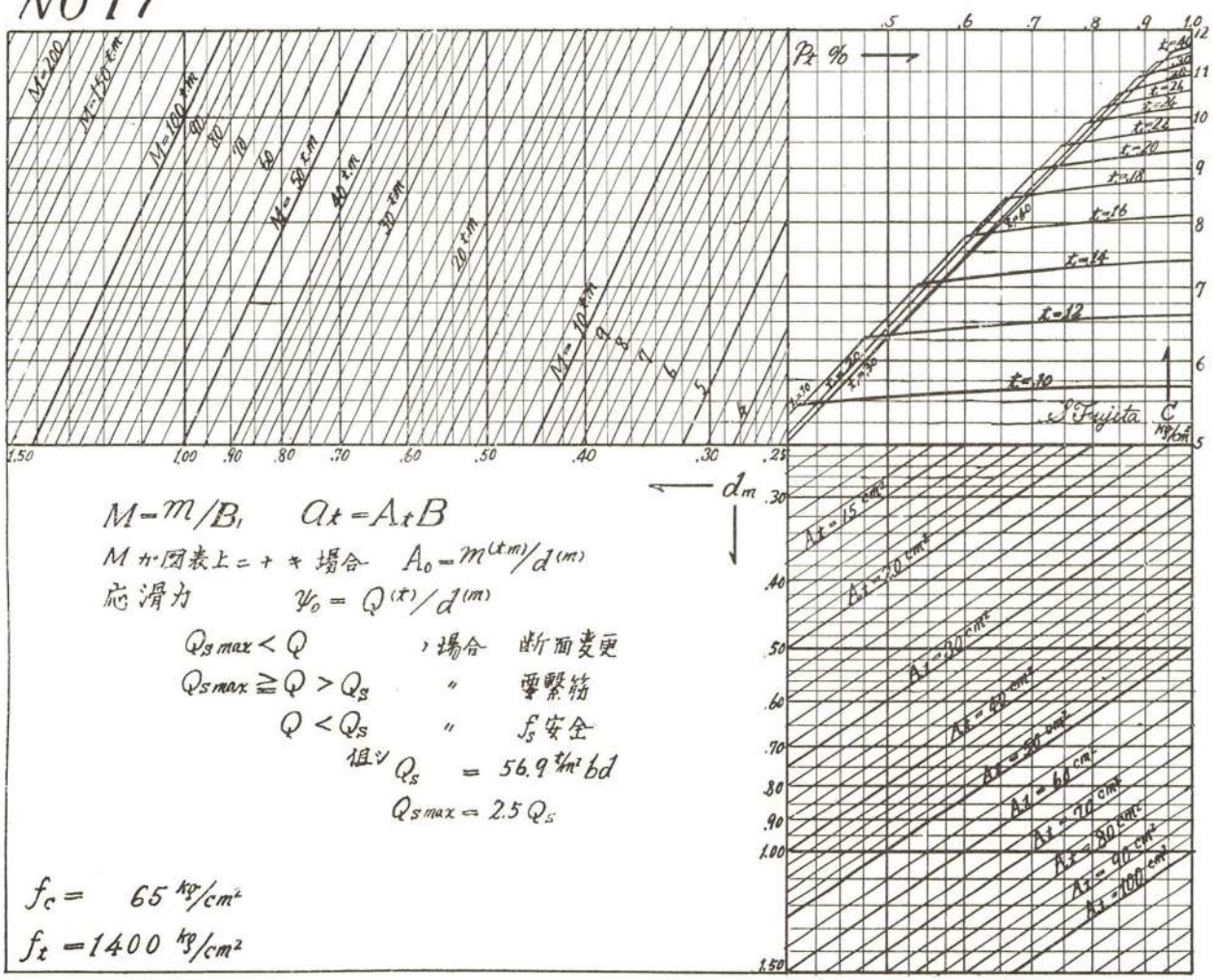
但し $Q_s = 52.5\ t/m^2$ 以下

$Q_{s\,max} = 2.5\,Q_s$

$f_c = 60\ kg/cm^2$

$f_t = 1400\ kg/cm^2$

NO 17



$M = m/B_1 \qquad a_t = A_t B$

M が図表上にない場合 $A_0 = m^{(t/m)}/d^{(m)}$

応滑力 $\tau_0 = Q^{(t)}/d^{(m)}$

$Q_{s\,max} < Q$ ，場合 断面変更

$Q_{s\,max} \geqq Q > Q_s$ 〃 壓縮筋

$Q < Q_s$ 〃 f_s 安全

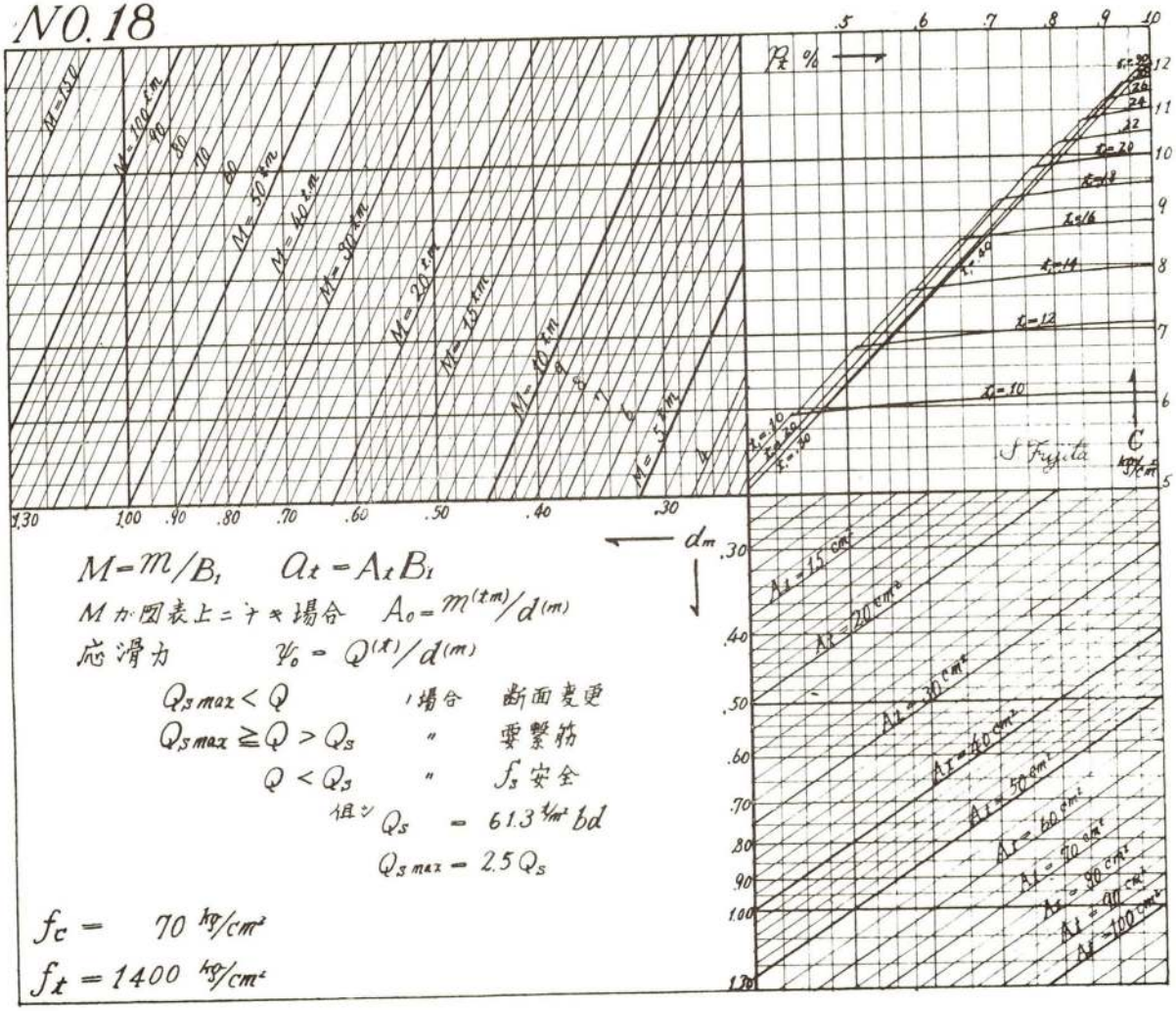
但シ $Q_s = 56.9\ t/m^2\ bd$

$Q_{s\,max} = 2.5\ Q_s$

$f_c = 65\ kg/cm^2$

$f_t = 1400\ kg/cm^2$

NO.18



$M = m/B_1 \qquad a_t = A_t B_1$

M が図表上にない場合 $A_0 = m^{(t\cdot m)}/d^{(m)}$

応滑力 $\tau_0 = Q^{(t)}/d^{(m)}$

$Q_{s\,max} < Q$ の場合 断面変更

$Q_{s\,max} \geqq Q > Q_s$ 〃 要繋筋

$Q < Q_s$ 〃 f_s 安全

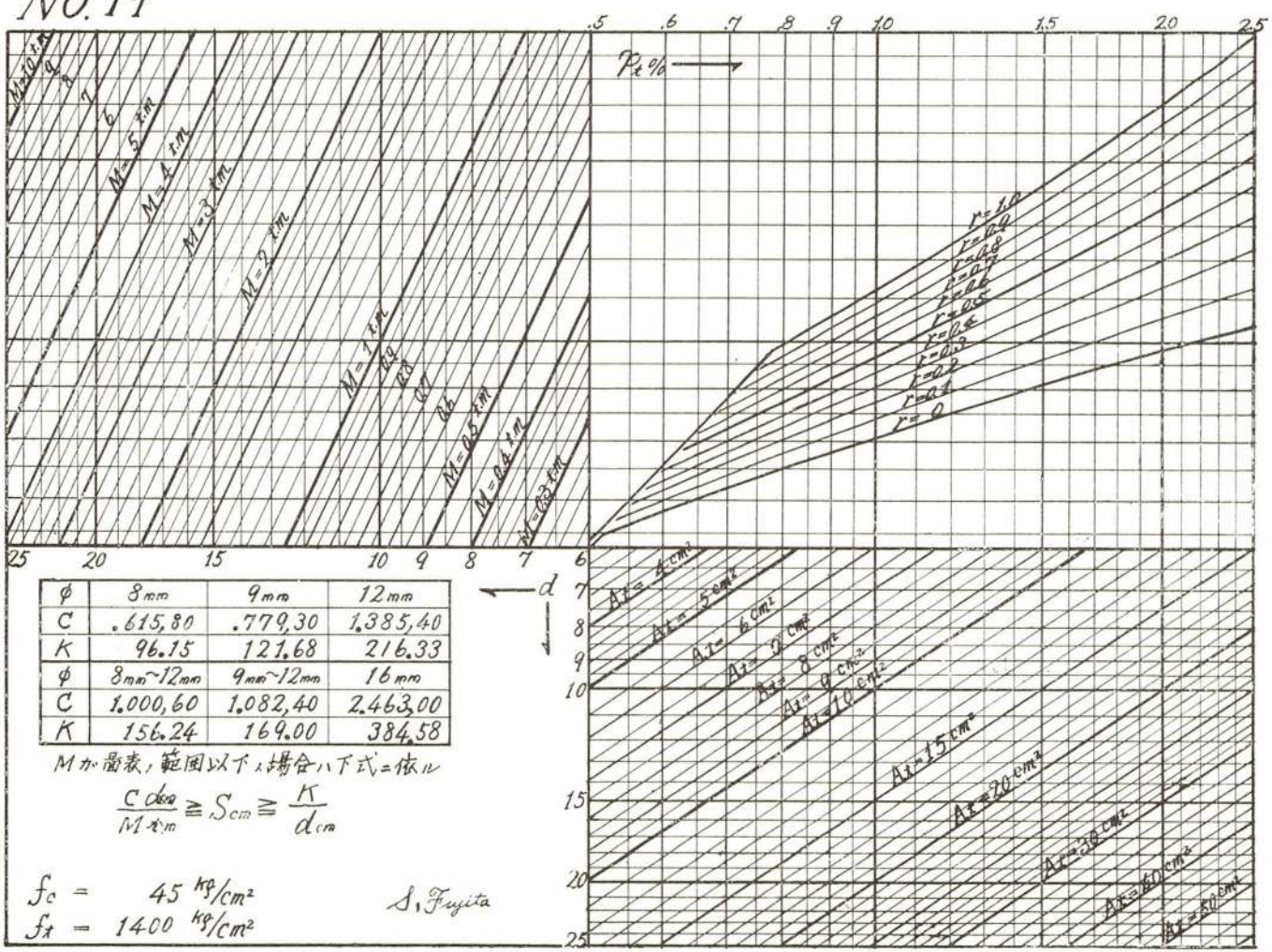
但シ $Q_s = 61.3\ t/m^2\ bd$

$Q_{s\,max} = 2.5\,Q_s$

$f_c = 70\ kg/cm^2$

$f_t = 1400\ kg/cm^2$

NO. 19



φ	8mm	9mm	12mm
C	.615,80	.779,30	1.385,40
K	96.15	121.68	216.33
φ	8mm~12mm	9mm~12mm	16mm
C	1.000,60	1.082,40	2.463,00
K	156.24	169.00	384.58

Mが図表，範囲以下ノ場合ハ下式ニ依ル

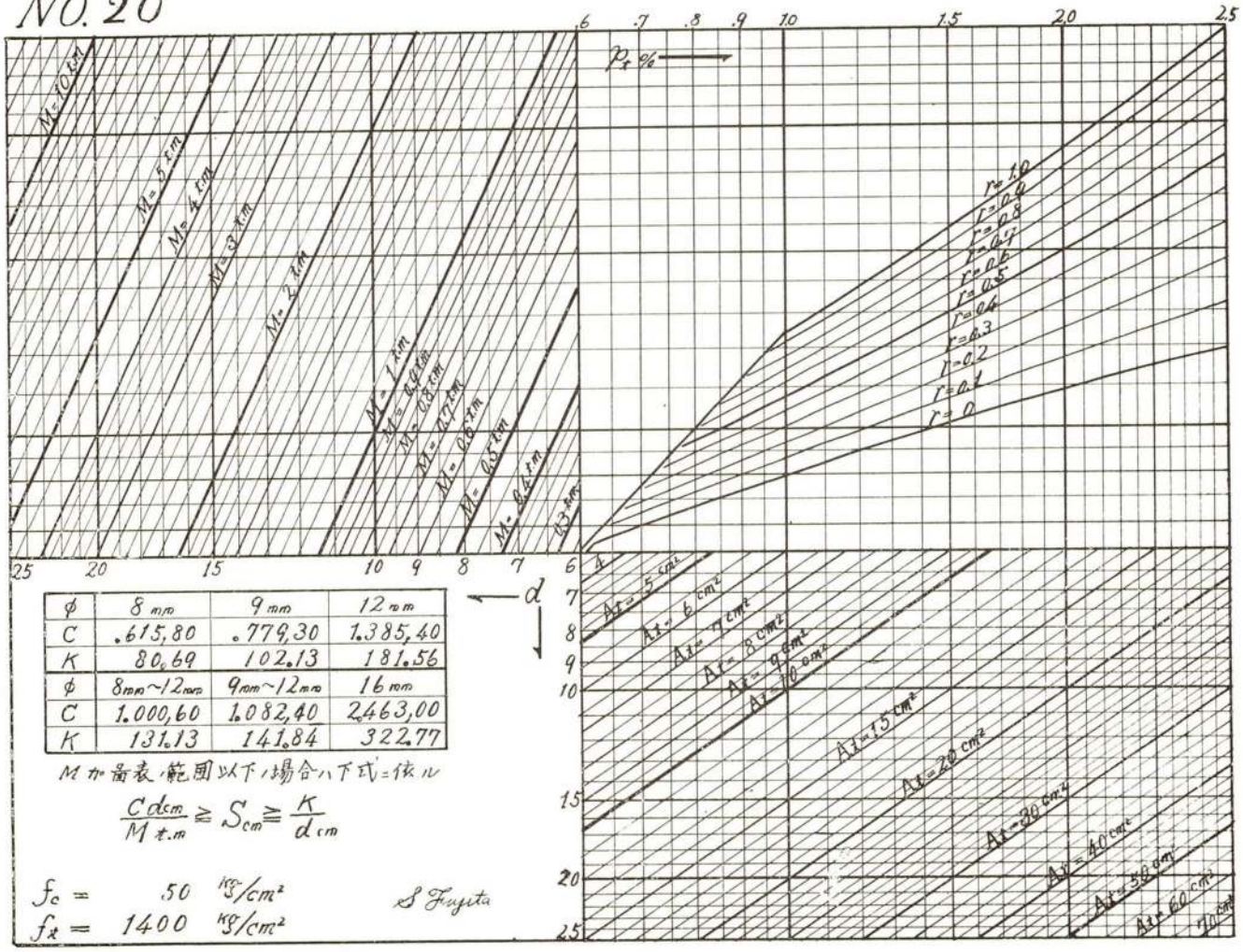
$$\frac{C\,d_{cm}}{M_{tm}} \geqq S_{cm} \geqq \frac{K}{d_{cm}}$$

f_c = 45 kg/cm²

f_t = 1400 kg/cm²

S. Fujita

NO. 20



φ	8 mm	9 mm	12 mm
C	.615,80	.779,30	1.385,40
K	80,69	102.13	181.56
φ	8mm~12mm	9mm~12mm	16 mm
C	1.000,60	1.082,40	2463,00
K	131.13	141.84	322.77

M が 當表 範囲以下ノ場合ハ下式ニ依ル

$$\frac{C\,d_{cm}}{M_{t.m}} \geqq S_{cm} \geqq \frac{K}{d_{cm}}$$

f_c = 50 kg/cm²

f_t = 1400 kg/cm²

S Fujita

1 昭和十三年建築界の豫想

2 時局下の建築界に對する感想及び對策

上記二問題について會員諸賢の多數の御意見を得ましたので、以下到着順に發表いたします。

藪中一良

（一）昭和十三年建築界の豫想は蓋し困難なる課題の一である。十二年の引き續きを以て、所謂時局關係の建築一色に塗られることであらう。他方又戰果の整理に伴ひ、國際貸借に資するために或程度平和的物資製產の必要も考へられて、後半年は多忙なる建築界を現出すると思はれる。

（二）協會を始め識者によつて多年叫ばれてゐた都市防空の徹底化に最も力を入れるべきこの時局に際して、不幸資源に惠まれず、鐵鋼を主とする建築の制限を見るは遺憾の極みである。かくして吾人の建築報國の一面は鎖されたのである。然しながら他方、今回の都市空襲の體驗者によつて更に力强く防空建築の必要を一般に普及するに役立つことであらう。吾人は來るべき飛躍の一步前に十全の準備と姿勢を整へてゐなくてはならない。

澁谷五郎

（一）十三年建築界豫想＝鐵鋼工作物築造許可規則の影響で請負、下請、職工等に相當な打擊を受ける事と思はれるが、木造建築が小さなものでも多くなり、從て木材の騰貴がある樣に思はれます北支の整頓次第に鐵鋼材の使用制限も緩和せられ再び鐵筋コンクリート造が多くなるのが下半期かと豫想します。

（二）前記商工省令に對し專門技術者としても國家的見地から進んで鐵材使用の制限をなすべきではあるが、强度計算の法規に於て、鋼材强度安全率を破壞强度の二分の一か三分の一位までは許可するものに改正しては如何や。二分の一にまで安全强度を許すとも、施工上の入念嚴密なる監督をなせば、大丈夫であると信ずる。今日まであまりに安全率を高くしすぎては居らぬか、鐵の代りに「セメント」の强度を低く見積つて充分な建築物がつくれる。

米倉威夫

（一）日支事變の解決及日ソ、日英の國際惡化關係解消の時期により盛衰す。早ければ非常に盛況となる、長引けば非常に暇な年となる

（二）政府の資金調製法及鐵鋼使用許可規則等の產業萎縮法律の爲大建築は無論の事、鐵材僅か五十噸位使用の非軍事的建築は出來ざる狀態故、一般建築は非常な衰微を來し今に建築材料商人、請負人、設計者の失業洪水とならん。前記諸法律に對し我々建築技術者は勿論建築に關係せる總ての人は一丸となり政府に陳情、法律の改正を要求する事である。尙ほ鐵材儉儉の折柄と云へども鐵鋼使用制限せず、如何にすれば簡易に製鐵（砂鐵製法の改良又は鐵分含有多き石材よりの製法等）する事が出來るか、又は人造鐵、合金鐵等あらゆる製法を研究奬勵される事が政府方針の一急務にあらずやと思ふ。又今迄官公築造物に於てあまりにも鐵材の浪費の多かりし事を顧み、今後の設計は最も經濟的に考慮し其節約を望み亦各縣廳諸學校に於て不必要な大なる鐵メンバー使用は許可せざる事等が目下時局に對する一對策にあらずやと論ず。

山口吾郎

（一）昭和十三年建築界の豫想＝一部特殊方面を除いては、業界の活況は望まれぬだらう

（二）時局下の建築界に對する感想と對策（或方面に於ては非常に忙殺されてゐるが一般に回顧と準備の好機である世紀末のあはたゞしい復舊と建築界の近來の動向を是正し、來るべき次の建設期に抱負を持つて當る可く與へられた絕好の機會であると考へてゐる。悲觀することさらさら無し）

兒玉廣太郎

（一）昭和十三年度の建築事業が何の程度迄減少するかは數學的にて豫斷が許されないが、此際特別の緩和策が施されない限り今日想像して居る以上に惡化するものと思ふ。

（二）戰時體制下にあつて不急事業たる土木建築は、國民として其統制に從ねばならぬが、夫が爲め幾百萬の失業者を出しては社會問題である。業者は宜しく一度團結して此非常時を突破せんとする覺悟と對策を究むる必要がある。即ち材料統制組合とか勞力供給組合等を設立するもよからう。

或は北支の新天地に活躍すべき新地盤を開拓し、技術者及職工の大量移住を斷行し國產建築材料の進出を企圖するもよからう

中　川　了　文

（一）に對する回答＝此の問題は今次日支事變が長期繼續か、年內解決かの二樣の方面より考察せねばならない。若し長期繼續するとせば吾建築界には現に遭遇せる恐怖以上の「パニック」に出會する。資金調整法は更に嚴に、民間の工事も一萬或は二萬位を限度として凡て中止を命ぜらるのであらう。鐵鋼材統制に於ても最惡の場合、例へば加工材、或は建設中のものさへ解體の止むなき位は覺悟する必要があらう。然して從業員は戰線へ戰線へと召集される。此難局を切抜けるに耐ゆる準備が必要である。之を亦一部の巷說の如く年內解決と見るも、戰時諸法令である臨時資金調整、輸出入品臨時措置、鐵鋼工作物建設許可、其他の取締令が、事變終了後一ケ年間は活用せらるゝため、一部の業者即ち軍需關係、政府指定事業以外は實に悲慘なるものであらう。故に13年吾業界は前者ならば尙々暗憺たるものにして、後者と言へ共曙光を眺めつゝも活況に復することは到底望めないことであらう。

（二）に對する回答＝吾建築界の人々は餘りにも財政經濟に對して無智過ぎた。只眼前の一小利益にのみ囚はれて建築事業なるものを餘りにも小範圍に見てゐた感がある。建築事業が一國の財政經濟と密接なる關係のあることを考へて居らなかつた其の結果が、今次事變に於ける戰時經濟體制に發令された臨時經濟諸立法に對して、只唖然として手を拱くのみで何等其の對策を一步進んで講ずることが出來なかつた樣だ。時局講演會、座談會等時期が少し過ぎてゐた。泥繩と言ふのか實に喘いでゐる。然らば如何にその對策を講ずるか。戰時體制下にあつては建築事業は偏心的になる。依つて「カルテル」「トラスト」の如きものを造る（之は經濟學說に說く其の正しいものではないが）其に依つて相互扶助の體形で進む。勿論、官民の協同は申すに不及、あらゆる建築關係者が之の方法をとる。そして或期間を耐ゆるのである。只此處で問題は平時に復し、解散して後往々過去に生ぜし疑獄事件を生む母體にならぬやの懸念があるが之は、相互の自覺自制と監察制度の確立で解消する。

瀨　戶　强　三　郎

（一）臨時資金調整法、鐵鋼工作許可制又は爲替管理等の制裁或は自發的工事中止等で相當數の工事は減じはせぬかと思はれます。

（二）土木建築事業で生活して居る者が全國で百何十萬と云ふのだから、資金調整法其他の運用宜敷を得て可及的失業者を出さぬ樣にして欲しいと思ふ。

石　川　儀　有

（一）來年度建築樣式は地下室の奬勵、防空裝備色彩等に付き在來の型を破りたるもの出現せん。

（二）防空及火災に對し心細き感あり。これが對策として綠樹の增植並に五十家屋每位に防火壁兼用の爆彈、毒瓦斯避難所を設くる事。

石　本　喜　久　治

來年の事を云へば鬼が笑ふと云ふが此度は泣きたい處だ。一般的に悲觀。建築界の一部は干物になる覺悟を要す。但しこの間に新軌軸を出す工夫とか研究とかが相當深刻味を以つて行はれるものと思ふ。從つて善い意味でのこゝに一つの建築界の學界及その他にエポックメーキングをもたらさぬとも限らぬ。こうなつた以上はそんな風に考えてジタバタせぬやうにしたいと思つてゐるが、食ふものを食はないでは果して何うなる事か？

田　邊　滿　一

（一）建築界は極度に進步を妨げられ一時中休みの狀態とならん。

（二）破壞は建設を生むと云ふが如く時局下に於て一時破壞の止むなき狀態なるも時局收拾せば建設し目覺ましきものある必せり。「伸んと欲すれば先づ屈す」の諺の如く堅耐持久す可きなり。對策としては時局の精神に則り軍需工業方面建築に主力を注ぎ絕對的勝利に順應善所するにあり。

平　林　金　吾

（一）來年を豫想することは甚だ六ケ敷い事でまた至つて容易な事でもある。結果に於て當るか當らぬかである。ところがどんなに理論的に豫想して見ても、何か新しい事實が挿入されると根本的

に變化して來るので、今次の如き事變を控へた來年の豫想は全く困難であると考へられる。そこで事變はこのまゝ續くものとして現在に起つてゐる資金調整又は鐵鋼工作物築造許可等の實施から見れば來年下半期になつて先づ五割乃至四割位に仕事が減少すると考へられるのではないか。

（二）戰爭となれば建築界は先づ第一に打撃を受けることは從來經濟界の定石であつて、普通にして置いても不況を來たすのであるのに加へて今次の資金調整、鐵鋼工作物築造許可と人爲的に力を加へられると一層打撃が大きなるのは當然であるが、それ程人爲的力を加へることが必要であるか何うかゞ明瞭でない。資金の運用にしても材料の不足と云ふことも關係業者の生活問題も今少し檢討する必要があるのではないか。只取締り易いこと目立つもゝと云ふことであつたら其の結果得る所は大したものでないことになる。年額五六十萬トンの鐵材の節約が躍進する日本にどれ丈けのことがあらうかとも考へられる。斯界の有力者によつて之れらを是正する方策を取つて頂ければ幸である。

井戸田　國松

（一）資金調整法と鐵鋼工作物取締規則の兩制限を受け來る十三年度は極度に建築界は疲弊する事となり單り軍需工業のみの建築は繁忙ならんも之れとても或限度があり一般に建築界は閑散の外なく失業者も相當出でん。

（二）資金調整法と鐵鋼工作物取締規則は餘りにも嚴なるを以て、之れを緩和せざれば社會問題となるの憂ひあり、此の緩和に依り建築界の狀勢回復を計るの他なきものと考ふ。

林　豪藏

（一）事變の見通し付かざる限り一部工場建築等を除いては一般に低調を免れず、氣迷狀態に低迷するものと思ふ。事件解決せば恢復は速かならん

（二）防空建築などはかゝる際にこそ大いに宣傳すべきなれ。又建築工業の重要性、殊にその及ぼす範圍の廣きことを深く認識せしむるの要あり。今次の資金統制法なども若干修正の餘地ありと信ず。又技術的にはもつと構造簡易低廉にして且耐震耐火的なる手法の研究、又北支一般建築の調査の急務を痛感す。

加藤　新

（一）今回の事變地に關係ある業界以外は、鐵五十噸及資金十萬圓以下等の統制々限に因し十三年度上半期は何かと凌ぎは附くも、下半期に到りて業界に暗影深くなる傾向に國民精神總動員の歪曲的解釋の許に收拾し得ざる迄に業界困惑なる狀態に落入るにはあらずやと想はる。

（二）大資本を擁する建築業社及大資本系統の材料商社は此の時局下に一大整理が行はれるにはあらずや。群小の建築業者及材料商の頃日の資金不足即內容不足の商者は一掃されるにはあらずやとも想はる。不足の一掃は業界の爲に喜しきも、掃き出されたる業者の行衞を當局は如何なる見解を有するや。大の蟲を生さんとして小の蟲を犧牲にする心算が小の蟲が集團的に見て餘りに多く、大の蟲より大なる場合此の犧牲に當局は如何なる用意ありや。

山崎　孝詹

（一）種々の統制の餘弊でコンクリート大建築工事皆無は斯界各位の相一致した御意見でしよう。然しそれで木材主材の建築物工事が例年より增加すべき筈のものかと想定すべき何等の根據も持合しませぬ。先づ十三年度上半期は先づ一服ですかね。

（二）出來るものならば先づ一番に官材（帝室林野局）のごときを安く拂下て他の木材の價格低下を誘致してせめて木造建築の旺盛招來を期してほしい。是れも公の建物には此際無理な事でしようから民間方面には效果あると思ひます。

村上　徹一

（一）時局の正確なる見通しの何人にも附かない從而世況に左右される建築界の豫想も附かないのが本當か。差し當り悲觀論に贊成する。

（二）資金調整法鐵鋼工作物許可の二法により手足を縛せられた時局下の建材界は壓縮される感がする。鐵筋建物（五十噸以內）の上に木造の二階建でも許可されるなれば等々思ひ浮ぶ。

宮嗣　克二

（一）昭和十三年建築界の豫想は、種々の統制の影響を受けて軍需關係の工場等のみ建設擴張に忙しく、其他の方面にては大物の着工延期多く繼續

工事は續行の爲め概して目下の狀態と大した變化はないと思ひます。問題は昭和十四年以降にあると思はれます。

（二）吾人は時局と建築家の立場とを充分に認識して國策に準じ、共存共榮の本旨に立脚して各自の職務を遂行せねばならぬと思ひます。

山本延次

（一）上半期は益々不況美術建築設計に對しては深刻化するものと思ふ。來年末より漸次好轉するものと思ふ。

（二）暫らく自重して時局の好轉を待つ、然る後對策としては、物價の下降する樣（建築材料）尙一層各人消極的となる事、然らば必然建築界は惠まるゝと思ふ。

杉江直己

（一）現今の樣に複雜な社會相では、僕らの樣な技術家では豫想はむつかしいが、目下の戰爭が、國家と國家の爭ひでなく主義の戰爭であり、政治的なものであることを考へると、過去の戰爭とはちがつた結果が來る樣な氣がします。割合に短期日の間に、可成り大きな期待の出來る時期が來るのではないでせうか。來十三年度に現はれる事は一寸考へられないけれども。

（二）目下建築界最大關心事の資金統制法と五十銭問題ですが、この樣なやり方で、建築に對して手も足も出なくなる樣にするのは目下の狀勢では致し方のないことかもしれませんが、現在の都市の狀態では誠に寒心に耐へません。私の考へではむしろ坪當り單價でも制限して、ぜいたくな建物構造的に無理な建物をおさへて實用的な、耐火的な建物はどしどしやる樣にして、都市機能、防備等に萬全を期したいと思ひます。

秋田喜代治

（一）昭和十三年建築界は前期に於ては臨時資金調整法及鐵鋼工作物築造許可規則等の影響をうけて業界沈滯せん。後期に及んでは相當の動きを見るべく、特に北支及南滿洲方面に於て然りとす但し現在の資金調整法乃至之に準ずる法規の統整は事變の推移如何に關せず長期に渉りて受くるものと考へらる。

（二）今回の資金調整法その他は、吾々業界に深刻なる影響を與ふるものなるが、非常時國策の一班としてやむを得ざるべし。只法規運用の圓滑を期し、前後處置を適切ならしむるため細則等を精細迅速に發令し、當局者と業界關係者の協議により適用をうくる工作物の類別と、鐵鋼使用の標準數量等に彈性味を保持せしめんことを希望す。

島岡義太郎

（一）建築界に經驗淺き小生とて昭和十三年の豫想等を下手に書けば「來年の事を言へば鬼が笑ふ」如く建築界に於ける物笑ひの種となることを虞れ慥と遠慮仕候

（二）「時局下の建築界に對する感想及び對策」は所謂痩馬に重荷、到底識者を滿足せしむるだけの名意見も覺束なく、折角研究致し置くべく候

正木英雄

御尋ねの件に關し主として工場建築に從事致し居りその方面に於る愚見簡單に申述候

（一）軍需及その關係の工場建設は本年末に引きつゞきスピード工事相次ぐべきも新規大規模のものは比較的少く、工事の完成と時局の安定に伴ひ次第に減少し上半期を以て旺盛なる工場方面の建設工事は一段落をつぐるものと被存候、時局の新展開による資料の供給と擴張せられたる生產力により材料の在庫豐富となり下半期に於ては制限令の緩和も豫想され一般建築物は漸次に計畫さるゝに至るかと被存候

（二）制限令により建築界一般逼塞の狀態なるもそれは自ら力弱りて然るに非ず內に伸びんとする充分なる力を有し乍らそれを我慢してゐる狀態にして時局の安定を得れば大に興隆するものと被存候、專門家としてはこの際餘暇を利用し將來の發展に供ふる充分なる技術的並經濟的準備をなし又特に防空建築等に對する研究を怠らざるが肝要と被存候

飯高達夫

（一）戰局の見透し次第で色々の說も出ませうが來年の建築界は先づ空前の不振でせう。資金調整法或は鐵鋼工作物規則に於て許可さるゝ範圍の種類即ち甲類に屬する建築物は大體に於て全體の約三割見當であるとすれば今後この種の工場建物が

益々旺盛になるものとしても全體の三割五分か四割は出得まいと思はれます。來年三四月頃からは極端に減つて五六割方建物が減少するでありませう。そして職工の失職が多くなつて來ませう。

（二）甲類に屬する鐵鋼使用の建物でも、事業の種類により必ずしも鐵骨や鐵筋でなければならない事もないと思ふ。況や時局に對照して大急ぎで增築をする工場等では木造でも差支ないものも多からうと思ふ。この際鐵の使用制限をこの方面へも加へて或程度の捻出をなし、之を五十噸以下の制限の方に振替へて融通性を持たしたなら、その制限が百噸とか或は百五十噸とか迄行けるのではないか、左すれば幾分の緩和が廣く行はれて失業の緩和となり、防火地區の建物も建ち、社會問題も餘程見直し得ると思ふのであります。

內藤多仲

（一）昭和十三年は前半は不活潑後半は活況を呈する事と想像します。

（二）時局下は勿論ですが日本では鐵を節約する事が絕對必要と思ひます（高い安いに拘らず）。この時局でその意味からも建築構造を見直す事が必要と思ひます。學問が進み施工が進歩しても反對に鐵骨が餘計要る樣のそしりをば免れたいものです。從來のものより安く早く强く作れる樣に研究の結果を應用したいと思ひます。も一つはコンクリートの應用の實際を更に推進する事。

大野順

（一）速かなる時局の完結を祈る以外材料不足の建築界に骨を入れる方法はないと思ふ。

（二）唯私は之の好機に建築界の法制、計劃、構造、施工、裝飾、設備、住宅等各方面に各々反對の立場から冷靜なる考察をなす必要ありと思ふ。特に下級粗雜の建築場所、時、環境に應じた生きた文化の注入、割安で良く見えるものより安くて丈夫で良く似合ふものゝ創作等興ある仕事と思ふ

天野一正

（一）鐵筋コンクリート造建造物に取つて代つて學校乃至倉庫に至る迄或る程度まで木造建造物の時代となるであらう。

（二）從つて、木骨ラーメン、木骨剛構造物の發達を促し、獨逸あたりで見受ける樣な三百尺のアンテナ塔、百尺スパンの鹽倉庫など又は木骨ダイヤモンド・トラスなど出現するであらう。そこで一と奮發して木材の耐火、耐水處理方法の發明と行くと事變も却つて幸と云ふものですかなあ。

武富英一

（一）過般發布せられたる臨時資金調整法及鐵鋼工作物築造許可規則實施に伴ひ、建築界に於ける工事量の減少著しかる可きは豫想に難らず、其結果不況を招來す可し。

（二）軍需品其他軍事に關係ある產業は多忙を極め從て工場等の增築の如き建築せらるゝものあるも、時局に對する氣分より平和的產業は自然遠慮し擴張等を見合はする向き多し。斯くして片跛的になり行くが如し。戰時氣分と共に平和再來時の用意も怠る可らず。

增田八郎

（一）何と言ふても不生產的な建築の萎靡する事は免れまい。地上に高く延びる代りに地下に深く潜る樣にならう。

（二）此の際國が必要と認める防空施設（自分の考では主として地下防護室）を指示し、之を併せ設備せんとする建築申請に對しては臨時資金調整法、鐵鋼工作物築造許可規則で優先的に許可するの途を開くこと。

香坂茂三

（一）軍需工業に關する建築物以外の新築は一般に衰微するのではないかと思はれるが、一方材料費の低下工賃の低落は小規模建築物の新築熱をあふる結果となるかも知れない。

（二）都市防空上耐火建築の慫慂と建築物の分散に關し住民の經濟上最も適當とする方策を確立すべきである。其の重なる對策として

1 耐火建築に對する民間相互金融機關の確立
2 共同建築と地下室の奬勵
3 市街地建築物法施行令第十四條の規定を改正し空地面積の增加を計る事
4 經量不燃材構造の建築物に關する研究

小川定治郎

（一）支那事變も上海に北支に壓倒的皇軍の大勝利の爲に終熄も間近い事とは思はれるが物資に乏

しい我が國では鋼材は使用噸數を制限されたまゝに當分はあるものと思はれる。從つて大工事は本年よりも更に手控え勝となるであらう爲に大どころの施工者は打撃を受ける事とならう。

（二）ニュース寫眞等で見ると空爆下の上海市街の建物は殘骸を殘して居るし又其の隣接せる建物も硝子等の破損程度で治まつてゐるのを見せつけられる一方、我が國が空爆されたとすれば過半燒土と化してしまうであらう。かの大正十二年九月の關東大震災でも火災さへなくば僅かの被害ですんだであらう事を考へるに耐震的ではないが、鋼材の使用を制限された今日、不燃燒材である煉瓦造を採用したいと思ふ。勿論それには今少しモルタルに就いての研究も積まなければならないが、木造建築よりはましだと思はれる。

高　橋　壽　男

（一）時局下の建築である以上、文化的建築は中止され、代ふるに軍事的なものが交代する丈けでせう。つまり全般的不況ではなくして、こゝにも跛行的景氣といふものが出るでせう。エレガンシイを誇る設計事務所活動が萎靡する代りに工場、倉庫等々の建築が起り榮えるでせう。大きな建築請負に於ては、たゞ一方から一方へと投資の移行がなされるに過ぎないとしても、小さな建築産業面に携つてゐる人々の苦痛は大きいでせう。

（二）鐵饑饉と云ひつゝも、要る處には使はれねばないないのですから、鐵饑饉そのものが與へる打撃ではなくて、全般的時局のために困難となつて來る資金の打撃が大きいと云はねばなりません建築の社會的な面などは勿論益々忘れられて行く丈けで國民は相變らず住宅問題の香りすらかゞされないでせう。

大　須　賀　巖

（一）この年の十二月を越してゞなければ十三年のあらゆる豫想は占易者でない限り爲し得ないと思ひます。

（二）十二月に或事象、只今私共が右か左かと考へて居ることが定まるによつて

（イ）待設けて居る事象（歡迎ではないが畏れても居ない）が起つたとすれば建築は振はないこと本年後半期の遞減率を辿ることでせう。

（ロ）起らないとすれば前半期は木造建築が後半期はコンクリートの建築が芽を吹き出すと思ひます。

荻　田　眞　之　助

（一）昭和十三年の建築界の豫想は時局上戰爭が永びけば實に建築業界は悲慘なものでせう。亦反對に年內に戰爭が終局致しましても急に建築界が活潑な動向は希まれなく徐々に上昇致しませう。

（二）イ、資源の不足を痛感致します事變中又は戰爭中でも國內では娛樂物、其他不必要な目的に供する建築物以外は自由に當時出來得る餘裕を持ちたいと思ひます。ロ、公平なる資源の獲得。

吉　村　辰　夫

（一）臨時資金調整法並鋼材使用制限に依つて昭和十三年度の建築界に華々しい飛躍を望むことは恐らく不可能であらう。

（二）然し一方國防的見地からすれば都市建築の不燃化こそ此際極めて必要且切實な問題となつたのである。たとへ都市全部を耐火的に改造することは出來ないとしても、尠くとも防火地區の完成を期すべきは今日の最も緊要事であり、國家も亦之に對して適切なる助成を與ふ可きである。又耐火建築に對して＝之に關しては從來あまりにも安全であり過ぎるとの批評を屢々耳にするのであるが＝何等か其構造計畫に付て必要且充分なる經濟リミツトの設計があつて良い筈だ。若し其結果材料引いて資金の節約も可能となれば國家に對する貢獻は蓋し少なからぬものと信するからである。

藤　原　義　一

一般建築界に對しては多數專門家の考察が下されることゝ思ひますが、小生は我國傳統の木造建築に關して寸感を述べさせていたゞきます。

（一）木材不足のため新造修造何れにしても工事難を來す。他の建築用鐵材使用制限のため、代用としてその方面にも木材が要求せられ、益々材料不足を來す。假に夏までに事變が終熄しても、此の狀態は年一ぱいは續くであらう。

（二）地方は別として、都會に於ては、空襲問題のために、木造建築に對する多くの宿題解決が具體的に論議され、或は實行に移されねばならぬが最も難しいのは國寶建造物の如き貴重な歷史的美術建築に對する取扱ひである。これには局部的目

前の利害關係にのみ支配されず、更に廣い立場と美術に對する深い理解とを以て、一度處置を誤れば回復することの出來ぬ國家の重寶に對する適切な保護の途を講ずべきことを希望する。

村野藤吾

（一）資金並に鐵鋼兩法により一時的にもせよ、國内建築の活動が大打撃を受けることは當然であるが、戰禍區域内の復興等により一部分の活況はあるかも知れぬ。而しながら建築材料中、鋼材は勿論國際收支の關係上、今日以上の制限を受けるかも知れぬ。

（二）A、廣く建築上の法例の改正には官民合同の協議會或は民間有識者より其の團體に諮問する樣にしては如何。B、鋼材五十噸は今日の割合で延平百餘坪しか建てられぬとしても全體としては相當の建築は建てられると思ふ。而し逆に考へて百餘坪位の建築ならこれ丈の鐵材を使用しなくても出來ると思ふ。例へば二階や三階建ての鐵筋コンクリート小建築など、計畫の如何にもよるが現行構造規則を改正して、僅少の鐵材を使用しても出來る樣に改正されたなれば小建築に及ぼす影響は大なりと思ふ。工夫の如何によりては出來ぬことはないと思はるゝ。

小林清

（一）非常時局に際し統制された經濟體制、或は鐵鋼工作物築造許可願などによりて、軍需品工場建築の如き部門は大いに活況を呈し、一般建築は火の消えた如くなるは否めないことである。住宅も必要に迫られたものゝ建築に止まるであらう。

（二）防空法が制定され速刻實施されたことも又數次の防空演習によつて訓練を受けたことは誠に喜ばしきことである。がしかしそれが、たゞ燈火管制、或は消火、避難作業に止まつてをり餘りに消極的であつたことは遺憾の極みである。なぜもつと積極的に都市武裝と出て行かないのか、空襲は闇夜のみに限つてゐない、月明を利して來ることもあるであらう。手近な處にある僞裝遮蔽など我々建築家に關係のある部門が手をつけずに殘されてゐるのは誠に殘念である。當局者はをいても建築家或は他の技術者の參與を求め、目的達成を計り完璧を期したい。又我々建築家も聲を大きくして一般に呼びかけたいものである。

永田庄右衛門

（一）用途種別に依る建築生產量に相當の變化はあるものと思はれますが、全體としては寧ろ躍進するものと豫想致します。但し滿洲を中心とした考へ方です。

（二）時局下と申しますより滿洲事變を契機とした日本の革新東亞の明期の第一期だと見る可きだと存じます。吾々は今總ゆる文化や部門の轉換期に直面致しました。資本主義は統制計畫され、手代經營は科學經營化され、行政機構は改革を迫られてゐます。こうした中で我建築家は今まで通り唯單に藝術に小さく技術に自醉し、之等を建築家の國家的、社會的義務なりと考へてゐられないのでないでせうか。既に經濟界は技術屋鮎川、野口中野、大河内等科學主義經營に移り、土木學會は企畫院に土木技術官の參加を申出てゐます。今までの樣に文化施設、社會施設としての建築を爲政家や一部資本家のみに委ねべきでないと思ひます其して次の新しい時代への鋤は開拓者即ち建築人自身で入れる可きだと信じます。時は正に今です この革新期にあると信じます。然し其のもつともつと前に建築家自身が社會に、政治に、經濟機構に關心を持ち、且その關聯性を見出すに努む可きだと信じます。

加藤誠二

（一）一般的には資金調整、貿易統制等全國的に國家產業の戰時體制への强化により又、直接的には鐵鋼工作物制限により一般建築は激減するものと思はれるが、他面軍需關係の產業は急速なる擴充を要するものがあるから、業者としても此の戰時體制に副ふて其の本來の使命を全ふすべきである。即ち設計方面に於ては建築の實實剛健化、國產品の使用等々又經營の方面に於ては無謀競爭の排擊、合理的薄利多賣、奉仕的精神の昂揚等々。

城戸武男

（一）重工業生產工場の擴張尙續々行はれ、建築關係者の過半は之に從事することが出來るが、文化施設に關する建築關係者は失業轉業の他ないと思はれる。

（二）建築工事に直接、間接影響ある今回の統制諸立法は非常に時期に適し今年下半期業界は之の諸立法によりて漸く材料、職工等のバランスを得

たと思はれる。近き將來の之のバランスが崩れる時適應せる緩和策が講ぜられ仕事の偏在並に多數失業者の生ずることを防止したいと思ふ。

平　松　太　郎

（一）鐵鋼工作物許可規則の抑制下で一般建築界は低調となるものと豫想さる。

（二）具體的對策は種々多岐に亘ることであるが一方建築構造用新材料の要望は相當あることゝ思はれる。然し鐵筋又は鐵骨コンクリートにすべき都市建築を木造に代らしめることは國家經濟上誠に不合理と考へられ、それより計畫當初より、よりよき構造的計畫の立案、又再檢討が技術報國の以所でもあらうと思はれる。

矢　木　英　夫

（一）日支事變が片づき平和來るとすれば、それは即ち世界平和である。で最初には機械工業に關する工場建築が起り次に一般建築が非常な勢ひで起るであらう。

（二）主用材料の使用量制限は即ち建築中止命令と同一に解釋すべきで時局下に於ては一般建築は不振と見る可きである。其の對策等ある筈がない若しありとすれば業務の中止か又は「冬眠」である。

織　本　道　三　郎

（一）現今迄の軍需工場對平和建築の比率は二對八程度ならん。從つて明年度は資金調整法並に鐵鋼工作物許可規則が今日の儘なる時は建築界の活況は現在の半分以下とならん。

（二）非常時局を好機とし工費の節約を目的とする建築材料の用途、工法を根本的に研究改正する必要あり。

藥　師　寺　主　計

（一）臨時資金調整法其他に依り一部の軍需關係以外の建築は一切見送らるゝ故昭和十三年は建築界空前の不況時代が來るであらう。

（二）貴誌第十一月號所載の新名種夫氏の「時局と技術者」なる感想と全然同意見である。泥繩式對策に名案ある筈はないが、此際を期して建築工業なるものが、不急不要の事業として眞先に如斯き重壓を受くべきものであるか。建築家は自己認識を新にすると同時に、建築工業の國家的存在價値（都市空襲を一度でも受ければ直ぐに分明することであるが）を明白にして置く必要があると思ふ。

森　本　治　一

（一）戰時體制下に於ける戰時立法として設定された各法制により、我が建築界はこの消極的なる現狀のまゝ持續する樣に想れると同時に健全なる統制經濟下に於て一意北支へ滿洲への建設突進の路が活潑なる活動となつて示さるゝでありませう

（二）致命的法制による建築界の非常時である今日、少くとも建築界に籍を置く者にして關心を持たないものはない。日支事變が如何なる反響をもたらしたか、經濟界の反映は現實に建築界全般に消極的低調なる活動に追ひやつてしまつた。一時的興奮にあつた業者或は民間が冷靜に立ちもどり建築界の各有力團體と歩調を合せ積極的に之が緩和改正の要望なしあるは、眞に嬉ばしきことにして之を楔として官民一體となり對策善所さるべきを切望するものであります。而し大本營の設置されんとするは我々國民に何を敎ふるか、國民の奮起一番よく自制なし以て其の後に來るべきものに備ふるべきではなからうか、そは正しき北支―滿洲への建設である。

伊　藤　幸　一

（一）取り立てゝ述ぶる豫想無し

（二）一般には無駄の排除、舊弊打破、材料關係方面の標準規格統一促進を切望（特に此の時局下に於て……）

池　村　元　之　助

（一）國を擧て建國以來の聖業にスタートを切つた以上、之が遂行途上に必要以外のものは夫れが何んであらうと受難期でないとは考へられない。無論建築界も召集された氣持で居れば間違ひない

（二）世界が愈々革新期に入つて來たと見るべき今日、各界を通じて古老が話すべき經驗を持たないと云ふのに過去の頭で考て見ても手探りに等しい。現下、金と物との統制は成つた樣だが人の問題は如何なるのであらう？（建築界丈でも之に屬する人間は實に多い）而し世の中の事は金でも、人でも、急に停止するものではなく、必ず動いて

居る。況や旭日昇天の勢に乘つた我日出る國は戰時戰後の統制の中に立て獨り建築界許りでなく各界共必す活路を見出し、以外の活況を呈するのではなからうか。茲に此のチヤンスを逸せす我建築界も設計、請負、材料界共に先づ自ら統制を強固にせんとする努力が先決對策であらう。

今　北　乙　吉

（一）現在の時局が終結となるか亦は之以上に進展するか豫斷は許されぬが解決したとても戰時體制が解かれるまでは建築界に新らしい息吹は期待されないだらう。而して今回建築界を束縛せる諸規則も臨時の立法である以上撤廢される事は當然である。現狀では「棚からボタ餅」と云ふ奴はあり得ない不況あれば活況ある「損して得をとる」式で何れ近き日に建築界は街の交響樂を奏でるであらう。豫想する事は困難だ。

（二）今回公布された規則は非常時の秋に於て或は至當かも知れない建築界は無論世間一般に不況を來たした事は事實であり鐵使用建築は勿論木造にまで類を及ぼしつゝある現狀は遺憾に耐えない今どれだけ騷いでも法規は曲げられず出來るだけ節約し時局に善處すべきだと思ふ。一概に云へないが「果報は寢て待て」と云ふではないか。極端な例だが……

籠　田　定　憲

（一）内國に於ては相當深刻なる不況を來し、從て無自覺な業者のダンピングに依つて種々不快なる世相を暴露する事と思ひます。然し外地に於ても相當多量の仕事が吾人を待つてゐる筈です。

（二）小乘的な立場からの泣言はやめにしてもつともつと强力なる統制にも服して行くべきだと思ひます。そして前項に申上た近き將來の新しきフイールドに對し現地のローカルの認識並に之等の工事に對する物と資本との圓滑なる供給等の問題を大に研究して置くべきだと思ひます。

山　中　茂　一

（一）昭和十三年建築界の豫想と申しても先づ現戰局が何かになるかゞ先決問題である。先づ上海戰線にありては、本年中に我軍は南京の中間距離迄行く事ならん又北支にありては大半黃河を突破し幾何かを進むならん。其内蒙古の方面にありても一時相當の發展を見る事ならんもロシヤの現狀にては大した事もなからん。然らば支那は第三國の援助も餘り頼りにならず其内に内部より破れ遲くとも二月には休戰を申込四月中には講和談判も解決なし一段落をつげる事ならん。然からば我建築界は如何になるか來年上半期は現在法規の制限を受けるも下半期は之れも撤廢されん然して下半期は業界追々と快復し工場建築より初まり美術建築に及ぼす事ならん。

（二）この時局にありては各建築業者は一時的相當の打撃を受くべき事は勿論にて其組織の大なる業者ほど其影響一層大なる事ならんも亦來るべき時期の爲め充分に手兵を取まとめ大に忍耐すべきである。

小田島兵吉

一と二と一所に申上ます。私共の手をくゞる設計によれば、鐵材制限、資金調整等による影響は顯著で、或る種の工業以外の建築は極小規模のものを除き激減の一途を辿りつゝあります。一部の設計事務所及請負業者は致命的打撃をうけることになりませうが、それは止むを得ない所でありませう。しかし建築界全般としましては敢て悲觀せず、やがて來るべき大飛躍のため、むしろその準備時代として、積極的な用意をしておくことも賢明だらうと考へます。

今津吉衆

（一）戰時體制下の建築界に多くの新らしい期待は持ち得ないが、然しこの壓縮された環境を見なほして、かへつて無駄のない、まとまつた建築の分野が見出される氣もする。

（二）支那事變の經驗を基礎として現在の日本がこの過大な要求にどう應じるか、新らしい課題が生れそうである。現在日本の個人經濟力では解決出來得ない。國家はこの防空建築を公共的解決すべき時期であることを痛感する。

田　中　留　男

（一）昭和十三年度の建築界は一般的に時局柄不況となり、一部軍部工事等軍需關係工事は極度に急施工事續出し一方的に偏するものと被存候

（二）時局下に於て鐵鋼の不足に就而直接關係ある我々建築業者が最も認識し居る筈に付き、工事

の緩急に應じ指導的立場に立ちて之が自治的統制をなすは特に緊要なる事と存候

松　本　儀　八

(二) 時局下の我建築界は臨時資金調整法、鐵鋼工作物築造許可規則、加ふるに鋼使用制限等によつて幾重にも幾重にも統制に統制を加へられ(僅に資金調整法中甲又は乙の部に屬する軍需工業に關係ある工場等の建築範圍に限られて居る)建築界の前途は大に憂慮に堪へないものがある。此際學會と云はず業界と云はず建築に關係ある團體は一致協力して此重大時局の重大問題に對し善處することが急務であらうと思ふ。

亀　井　幸　次　郎

(一)「眞らしい嘘」と云ふ言葉があるが、此の豫想と云ふ位此の言葉の持ち味を出して居るものはそんなにないと思ふ。殊に學者などが得手勝手な數字や統計をならべて、將來の豫想を說き立てる事を屢々讀まされるのであるが、此の位他をあやまらせるものはないと思ふ。よしや萬が一彼等の所謂豫想と云ふものと事實が一致したからとて、それは一向に彼等の科學的方法と頭腦の優秀性を說明するものとは思はない。即ち、只それは偶然の一致が事實として傳へられたまでであると云ふのが眞らしい樣に思ふ。何故なれば、現代の科學と云ふものは何處までもデスクリプチブなもので主觀の介在を許さないと云ふ限界性があるからで而も豫想はあくまで豫想で、主觀を介在させない譯けには行かないからである。

そこで建築界の豫想と云ふことになるのであるが、「わかりまへんな」の一言で盡きる樣な氣がする。然し之れではあまり味がなさ過ぎると思ふ故、若干豫想の樣なものを記述して私の責をはたしたいと思ふ。

×　　×　　×

日支事變の折りから、資源節約の最大項目の一に鐵材が擧げられたのは當然の事と思ふけれども之れが建築界に與へた影響も致命的なものであつたと云つても、あながち過言ではなからう。乍而此の事實は「鐵材がなければ現代の耐震耐火構造物の構築が不可能なりや」と云ふ質問を各大學の建築學教室に割據して居るオエラ方の學者達に發せられた、宿題の一つである樣な氣がする。

そこで私は獨逸が歐洲大戰後さうであつた樣に彼等の「面子にかけても」と云ふ氣慨を持つて此の方面の研究に素晴しいアルバイトを傾注する有志が出現するであらうと云ふ事を想像するのである。之れでも豫想と云ふことになるか知ら。

宮　田　秀　穗

(一) 混沌とした世界を引繼がされた昭和13年は幾分の見透しはあるとは云ふものの、矢張りそのコンプレツスさは猶依存され、尙一面、新しい事象が突發して、更に多彩なものになることも豫想される。

この新しい未來を見透うさうとすることは株屋でなくとも實に緊急なことである。そうかと云つてかう云ふトピツクが、かう云ふ新しい事柄が本年は突發するであらうかと云ふ卜者の憶測の類に屬するものでは意味ない。

數年前の小兒病的に社會進化の方則とかを持出すことも一應考へられるが、これを後生大事に唯一の判斷の照明裝置としても、ここに現せるものは坦々とした大空を劃する大海原を遠望しうるのみで、それから何ら積極性な未來への志圖を割出すことは出來ない。それが當然である。何故ならこの波瀾に富む現世をこれだけでは說明つきそうにもないからである。だからと云つて、功利的な近頃の若人は決してこの波瀾をあきらめの心境を以つてむかへない。この意味からこの波瀾に何とかしてと、「便乘」の機會をねらふ一部の人達の出るのも決して偶然なことではない。

乍然、波上に浮ぶ木の葉はいつかは水底に沒する運命にあるとみなければならないとも考へられる。假りに器用に便乘しても便乘は局部的な波での便乘に止まり、大きい潮流をどうすることも出何ない立場にあることを熟知すべきで、いづくにゆくともしらない潮流の上の「便法主義」も舵のきかない船を嗤へない立場にある。

むかしの如く未來を夢みるにはあまり混沌となりすぎたこの世の中では、止むなく、過去と現在をながめなほすより外に途はない。その代りがつちりと高低波と潮流の關係をみる氣象科學者のもつ眞摯たる態度を以つて望むならば、却つてむかしの自己滿足のために夢想主義よりも未來への積極性を心底より湧立さるものでないかと云ふことが一般の意識ではあるまいかと筆者はみる。



内容

建築の前進（本多正道）
轉換期を前にして（龜井幸次郎）
5年間の編輯後記（新名種夫）

建　築　の　前　進

本　多　正　道

平安の夢よりほか見る事の出來ない我々建築家にとつて、過去數ケ月間の周圍の世界はあまりに早く廻り過ぎたやうに思はれる。しかし、これからは、おそらくもつと急激に我々の周圍は、その方向を變へて行く事であらう。そして新しい情勢は展開されて行くであらう。此様な激變の世界の眞只中にあつて、我々は爲す事もなく、只呆然と此の情勢を見送つて居ればよいのか、そうするより他仕方がないのか、やがて又來るかもしれない昔日の平和と安逸の復歸を、辛棒強く待たうとするのか。もはや今までたどつて來た狀態は許されないで、今や我々は一つの重大岐路に立つて居るやうに考へられる。

建築は勿論その大部分が平和的施設であり、之が本來の使命であるから、平時に非常時や戰時の事までを考慮に入れて行動する必要はないかもしれない。そして、事變によつて或程度の不振を來し、從つて失業者を出すと云ふやうな犧牲も、之又止むを得ない事かもしれない。その上鐵鋼取締法の如きはその細部に於て實情に即し難い幾多の缺點もあるであらう。しかし我々が今こゝで考へたい事は、法の不備な點を指摘して建議したり陳情したりする事でもなければ、失業者はどうすればよいかを考へる事でもない。もつと遡つて、建築界が今まで取り來つた道は正しかつたか、今後もそれでよいかの根本問題に觸れて考へて見たい。

折しも協會で主催された大工徒弟に關する座談會の席上筆者は、大工徒弟の志願者が激減しつゝあつて、數年後にはその跡を斷つ様な恐れがあると云ふ事を耳にした。諸工匠の「つかさ」として、尊敬と自尊心の傳統をほこつた大工も、今はあはれ社會的に極めて不遇であつて、急速な下向の一途をたどりつゝあると云ふ事である。しかし此様な狀態はむしろ當然と考へるのが至當であつて、古い徒弟制度が今まで續いた事こそ、むしろ不思議である。ところが、之に類似の狀態は建築界の多くの方面に根强く、習慣的に殘存して居て、知らず知らずの間に建築界の進歩を阻害しながら、辛じて社會の進歩、變革に追從して來たが、今やもう何ともしがたくならうとしてゐるのではないかと云ふ事が考へられる。

勿論建築技術も進歩しつゝある。「鐵とコンクリートとガラス」が既に永らく新建築材料の代名詞のやうに云ひ習はされて、ガラスの家、摩天樓、窓のない家等々は構造と設備の進歩を示す記念碑のやうに誇示されて居る。成程多くの新しい建物は新しい感覺と充分の照明と煖房と冷房とを持つた殆ど完全な生活の容器となつた。しかし、

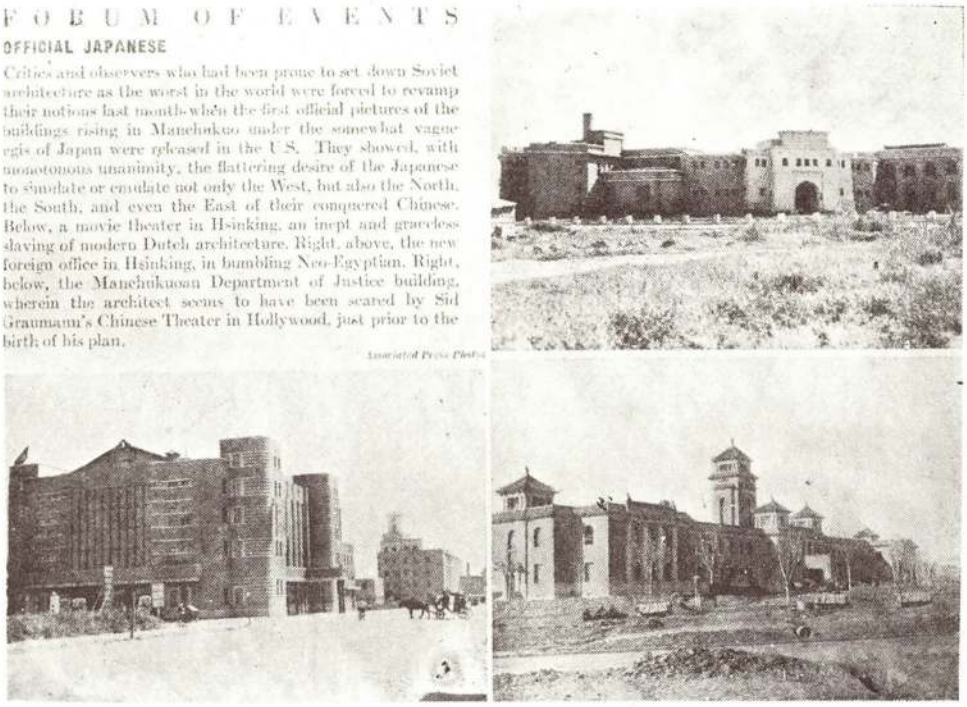
フオード只一人が、生れたての幼稚な自動車を、遂に最もありふれた必要品として社會に送り出し、之によつて社會が非常な便益を得てゐるのに比すれば、もつと生活に密接な關係のある建築が、その形態にも生産方法にも面目一新するやうな進歩を認め得ないで、舊態依然としてゐるのは何故であらう。之は一面社會が住に關する進歩をさほど要求してゐないと云ふ證據であるかもしれないが、一面建築家の怠惰安逸が原因である事も否定出來ないであらう。建築家は、大工と同樣古への光榮ある地位を失ひつゝあるにかゝはらず、他の技術者とちがつて、今尚古い傳統を踏襲しつゝあるやうに見える。

又建築家は建築技術の特殊性と云ふ事を主張する。即ち他の機械、電氣、土木と云ふ樣な技術とちがつて非常に複雜で、各種各樣殆ど無數の材料の知識、構造上の知識、施工上の知識、建物の種々樣々な用途に關する知識は勿論、藝術的教養、氣象の知識其他設備に必要な他の工學、理學の必要等非常に多くの知識を要し、その設計も施工も同樣に極めて複雜で、倒底橋を架けたり道を造つたりするやうな技術と同時に論ずる事は出來ないと云ふのである。成程複雜であり、多くの知識を要するが故に、建築技術者は廣く淺い技術を持つ事となり、一見之も止むを得ないやうに思はれるが、此處にも現代の科學と社會とに順應し切れない今までの建築技術者及其制度慣例に、缺點があるのではなからうか。そして建築と云へば非學問的な技術、建築家と云へば淺薄な權位のない技術者を想像させる。即ち素人との差あまり遠からず、從つて何時も施主から何彼と技術上の不決な干渉を受ける。之は施主に理解がないと云ふよりも、技術に權位がないからである。之は從來の廣く淺い技術と淺墓な藝術家氣質と、時代に即しない舊い組織とが合して、建築界の進歩を阻害したと考へる事も敢て不當ではないと考へられる。ものすごい進歩、準備、計畫、そして數十萬の大軍が一瞬の間に何一つ手ぬかりなく整然と動員される軍隊の組織を見れば、建築技術が複雜だなどと吹張出來なくなる。時節柄軍部のやる事に皆感心させる前に、建築界、建築技術者の無能ぶりを恥じねばならぬ。我々は今新しく展開されやうとする世界の前に立つて、後ればせながら一大進歩と轉換に向つて努力せねばならぬ。

建築が他の工業に比して幼稚である事は否めない事實である。千何百年來使用されて來た木造建築が、申譯のやうな改良をするために、日本を背負ふ少壯建築學者達によつて仰々しく實驗されつゝあるのが現狀である。型ばかりの研究で斯界の學者たり權位者たり得るのも、建築界のみにおこり得る特異な現象であらう。建築に高度の學問が要求されないと云ふ事が、進歩をさまたげる最も重大な原因である。某所に於て行はれる建築技術者の昇格試驗には、小學校の上級程度の力學と數學を課せるが、それを全然出來ない人が相當にある。之でも今までは建築技術者としての生命があつたから不思議である。だから素人にも、多少の素質を持ち、經驗を得れば出來る事となり、專門家も高度の學識等は一見あまり役に立たぬやうに見られてゐたのである。古い習慣に固められてゐる事、藝術的一面を持つ事、平和的な工學である事等が重り合つて建築術、建築界の進歩發達を阻害した。然らば、此樣な沈滯の狀態は打破出來ないものであらうか、近き將來に於て、建築界に革新のおこりそうな可能性は期待出來ないものであらうか。纖維工業に於ける人絹の如き、交通機關、通信機關に於ける飛行機、ラヂオ、テレビジョンの如き偉大な進歩發達を、今急に、建築界に待望する事は空想かもしれない。しかし幸に、現在の建

築技術はあまりに幼稚であるが故に、急速の進歩發達を望み得る餘地が、殘されて居るのではなからうか。

建築の規格化、工場生産化は、既に古くから叫ばれて居るが、未だ何處でも成功してゐない。自動車は米國に於ては五人に一台と云ふ驚異的數字を示してゐるが、住宅は世界中の人が五人に一つ又は四人に一つの割合で所有してゐるものである。それすら工場生産化しないのは、罪が誰かにある筈である。完全な革新と秩序の下に、最も近代的な工學、工業としての建築技術が確立されねばならぬ。



FORUM OF EVENTS

OFFICIAL JAPANESE

Critics and observers who had been prone to set down Soviet architecture as the worst in the world were forced to revamp their notions last month when the first official pictures of the buildings rising in Manchukuo under the somewhat vague egis of Japan were released in the U.S. They showed, with monotonous unanimity, the flattering desire of the Japanese to simulate or emulate not only the West, but also the North, the South, and even the East of their conquered Chinese. Below, a movie theater in Hsinking, an inept and graceless slaving of modern Dutch architecture. Right, above, the new foreign office in Hsinking, in bumbling Neo-Egyptian. Right, below, the Manchukuoan Department of Justice building, wherein the architect seems to have been scared by Sid Graumann's Chinese Theater in Hollywood, just prior to the birth of his plan.

Associated Press Photos

曰く、現代オランダ建築のグロテスクな眞似事、間のぬけたネオ・エジプシヤン、ハリウツド仕込みとさへ見える支那様式と。成程建築家は藝術的アマチユアであると共に、秩序ある近代意識の持合せもないやうに見える。

轉換期を前にして

亀井幸次郎

〝建築の社會〟にあらずして〝建築と社會〟である限り、年に一度位言ひた事を言わしてもらひたひものだ。こんな氣持で〝駄辯〟を弄したのが此處にまとめた「轉換期を前にして」である。屠蘇に醉つて一氣に「シヤベツタ」と云ふ程度のものである故、見當違のあるところは、醉言の故なるを以つて豫めのお許を。

§1　日支事變と日本

『世界は人類のために與へられたものである。正直にして勤勉なる國民はこの地上いかなるところにおいても、幸福に生存し生活を享有し得る資格がある筈である。しかるに怠惰にして過去の蓄積のみによつて幸福に生活してゐるものがある一方に、正直にして勤勉なる國民が生存を拒まれたとするならば、これほどの不公平があるであらうか」と云ふ言葉は、ルーズヴエルト氏のシカゴ演説に反駁して我が外務當局が情報部長談として發表した聲明中の一部分であるが、(大朝、12.10.7 夕刊參照)、世界はいま二つの現狀打破勢力と一つの現狀維持勢力とが激しい抗爭を續けて居り、今や東西の各々の一角に於て、流血の慘を演するまでに展開して來たのを認める。

二つの現狀打破勢力とは……即ちその第一はソ聯による世界赤化政策の勢力にしてその第二は世界資源の再分割を目標とするドイツ、イタリー等の國家である。ところで現狀維持勢力と云ふのは申すまでもなくイギリス、フランス等を中心とする國家群である。然らばわが日本はそのいづれに屬し得るやといふに、日本の望むところは世界資源の再分割と云ふより、むしろ世界資源の開放にあるのであるから、以上の勢力のいづれにも屬してないといへる。だが然し、たゞ一事世界現狀の不合理を打開せんとする熱意に燃えて、それを行動化する時ドイツ、イタリー等によつて最も精神的支持を受けることになるのは事實である。

世界の「持てる國」が「持たない國」に對し、既得權利の讓歩を無暗に拒否する場合、その解決方法として戰爭に訴へられる場合が多い事は歷史上の事實である。

ところで、我が日本はどうであつたかと云ふに、昔から「間引き」と疫癘の無防備狀態で、德川三百年間、三千萬の人口を增減なしに調節して來たのである。だから四海の港を閉ぢて、鎖國を行ふことが可能であつたのであるが、「持てる先進國」として、所謂〝白人の使命〟を實踐し、有色人國家を「侵略」し續けて來た外國は、鎖國まかりならぬと、浦賀灣頭に於てあの砲聲による大示威を行つたのであつた。せつば詰つた我國は、明治の維新を斷行し、開國による向ふ隣り兩三軒の交際を開始したのである。その結果は漸くにして先進國の國家體制を學びとる所までこぎつけ、どうやら一人前の實力が培養出來たのである。するとたちまち我國からの移民は締め出しを喰はされ、四海漂渺とも云ふべき太平洋上に向つて一人の移民をも送れないといふ現狀に直面したのである。

物資が乏しいが、文明國として活きて行くためには、何人としてもそれを補給するに足る資源が必要であるのは申すまでもない。而も資源の極度に不足を感じて居る現下の日本に於ては、一億に近い人口が、狹い島國と半島内で窒息狀態を續けて居るのである。此の時にあたつて世界は至るところ空地だらけで、千古の富源も、人と技術と資本不足のためそのまゝ埋れてゐるのがどのくらひあるか知れない。かゝる自然の資源を科學と技術の力で開發せずにおくのは、宇宙と人類を創造した造物主に對して冒瀆であるとも云ふべきであらう。そこで我が日本は、その豐富なる人的資源を提供した未開發の自然的資源の開發に盡力してやらうと云ふのである。で、先づ手始めにお隣りからと云ふので、隣接國たる支那大陸に向つて、有能なる人的資源を給供して埋れんとする自然的資源の開發に力を貸さうといへば、大手をひろげて之れを食止める抗日勢力がある、といふのが現下の實情であらう。

滿洲は嘗て、二十萬にあまる、陛下の赤子の血と肉を以つて舊露の侵略から救つて

やつたのである。その後卅年間に支那は三十萬からの移民を送つて、最後には抗日排日を以つて恩を仇で返す始末である。

いくら日本でも、滿洲から締出しを食はされては、もはや國家として死を選ぶほかわないので、止むを得ず「滿洲事變」といふことになつたワケである。するとそれは日本の「侵略行爲」であるとなし、九國條約違反、不戰條約違反であると、聯盟が騒いだり、スチムソン氏が起つたり、リツトン卿が叫んだりなどした、茶番狂言みたいなことが行はれたのであつた。だが、その後五ケ年有餘を過ぎた今日、己の國が喰物にされるのを知るや知らずや、外國の教嗾を援助であると過信し、而も之れを唯一のたよりとして、支那軍閥はあく迄抗日意識を持續して來たのが今日の事態を招來したのであると看做し得る。……若し今こゝで支那地圖を繙くならば、廣東と漢口をつなぐ粤漢鐵道はイギリスの手によつて遂に完成したのである。香港から漢口まで粤漢鐵道で、漢口から北京までは京漢(平漢？)線と云つた樣に、此の二大幹線によつて支那大陸は南から北へ縱斷されるに至つたのである。そして此の二つとも主としてイギリスの手によつて完成させたので、イギリス人が利權を握つて居るのである。……即ちイギリス人の技師がイギリス製の測量機械で計畫をなし、イギリス製のレールの上をイギリス製の機關車が走つて居るワケである。此の間にあつて經濟的な大芝居を打つて日本をアツと云わせたリースロス氏よりも一足先に來て居つた彼のハモンド少將は鐵道政策の大家であるさうである。彼は全支の視察を完了するや、リースロス氏と日本で落ち合つてその報告書を手交したとか當時の新聞は傳へて居る。兎に角イギリスの帝國主義は雄大な規模と機構から成立して居る。失ふが如くみえて居て失はず、讓るが如くして決して讓らず、決算面を地球全體の上において居る。だから世界地理の教科書に若干の變化を與へることによつてイギリス帝國の國防教科書にさへなり得るのである。

かゝる事情を悉知し又過去に於てイギリスから苦杯をなめさせられて來た日本が、抗日戰線に踊らされて居る事を支那が悟らないで、抗日一點張りで來る限り、日本の膺懲は當然過ぎる程當然で、何處から押しても一點の無理もなからう。

日本は過去五十年間に人口は倍加した。しかるに狹小なる島國外に發展の地を求めんとすれば、各地で拒まれてゐる。殊にアメリカ合衆國が、日本が震災の痛手に苦しんで居る眞最中（大、13、7、1）に、わが移民を阻止したことは人類自然の法則に反すること夥しい。白人の支配する國家が日本に締出しを喰はしてゐる一方に於て、若し日本が所謂〝白人の使命〟に服從し蔣介石政府の抗日政策に聽從してゐなければならないとするならば、それは日本に窒息を選べといふことゝ同樣である。

世界は現に「持てる國」と「持たない國」との爭ひがある。資源原料分配の不公平の聲が甚だしく騒ぎ立てられてゐる今日、若し此の不公平が是正されないものとするならば、之れが解決はの途は戰爭と云ふ形で行はれねばならないのは必然であらう。

だが然し、我が日本は西洋流の權利を要求すると云ふことは、東洋流の觀念からして凡そ緣の遠いものである。即ち我々、勤勉にして正直なる日本國民は、人類に與へられた世界の何處に於ても、幸福なる生活を享受し得るに十分なる資格を有すると云ふことを要求するのみである。

§2 人的資源の開發と行政機構の改革

日本が中外に聲明した「國際正義」の要求は「社會正義」として國內にもその要求

が可能であることは、敢て此處に近衛首相の言葉を引用するまでもない。然るに我國には、昔から〝行政機構改革〟が叫ばれ、或る時は一部實行にさへ移されたこともあつたのである。「社會正義」を旗標とした現下の情勢に照して此の位今日迄爲政家の玩弄物化して居つたものはなく、而もいじくり廻せば廻す程改善どころか、かへつて改惡に終始した事實を筆者は指摘したいのである。

我々國民からすれば〝行政機構の改革〟の目標は、只單に機構いじりで官僚的獨善をふり廻すことでなくむしろ、國家の基礎を強固にし、陛下の赤子により多く生活の安定を得さしめんが爲めに行ふところの行政運用の一手段であり、政治家の人氣取りの爲でないことは申すまでもないと思ふ。殊に現下の非常時に於ては、冗費節約により、國の經濟力に微動だもせぬ様になすのは、政治家の行政運用に俟つまでもなく、國民一人一人の心して自發的に實行すべきものであるのは勿論である。然るに筆者が此處に取り擧げて識者の注意を喚起したいのは行政機構の改革の一つとして、人的資源の開發の必要に就てである。

明治のなか頃から、傳家の寶物の如く傳つて來た官吏任用令の大改革こそは、即ち此の人的資源開發に重大なる役割を演ずべきものであらう。音樂の解らない者が音樂學校の校長になつたり、人間の診察を行なつたことのない者が衞生局長になり得る様な、現代の行政機構を改革してこそ、眞の國家的人材が、〝盡忠報國〟を實踐するの路が開かれる譯であらう。

嘗て、行政機構改革の話題にのぼつたものに、省の廢合と云ふのがあつた、そして鐵道、遞信を一つにして交通省と仕様の又は、陸海軍を一つにして軍務省に纏め様などと、盛んに騷がれた事もあつたのであるが、之れなどはむしろオカシイみたいなもんで、躍進日本を誇る現下の狀勢に於ては內閣の店構を狹めるなんて云ふ考へ方はとんでもないことで、むしろ機構改革の要點は、日本名物の一つとして歌はれて居る各省の「對立相剋」の如き島國根生的な百鬼夜行の現下の機構に革新のメスが下さるべきであると信ずるのである。企畫局を「廳」にしたり「院」にしたとて、依然として古物のよせ集めの様な人的資源だけでは、國力を發揚する推進力に乏しいのは當然であつてかゝる改革方針こそ改革さるべきものでなければならない。即ち現下の參議制設置による顏ぶれからしてさうである。クリチカルポイントに立つ滿鐵機構だけの問題だけでも多忙を極めて居るのに、何にも總裁を引張り出したり、政黨の古手をならべたりなどして、之れに彼等の喜びさうな〝大臣級〟とやらの稱號を 與へたつて、現下の內閣が補强されるワケでもない。國民はかゝる顏ぶれを揃へた現時の青年首相に對して、むしろ以外の感を深めたことであらう。

然らば、我國は、物的資源のみならず人的資源にも、如斯事を缺いで居るのであらうか。〝否〟むしろ人的資源はふんだに存在して居るが、開發の鍬が下されてない……と云ふより、開發の道が開かれてない。と、答へるのに何等の躊躇の必要認めないのである。

國家の重大方針が決定される內閣は永い間、老大家によつて代る代る引繼れ、政治の動脈硬化であるとか、政治の化石化などと、ジヤーナリヅムを相當騷がせて居るうちに國民の政治的關心が漸やく薄らぎ、政黨と國民との離反が顯著になつて來た時、青年首相としての近衞內閣の出現は、此の沈滯し切つた空氣に、潑剌たる生氣を與へ國民全體をして、どれだけフレツシユな希望をいだかしめたか計り知れぬ。それは何故かと云へば。その大きな原因の一つに、彼れが四十代の若さを持つからである事を

擧げ得るであらう。38の若さを以つて現時の歐洲のみならず極東の政局收拾に頑張つて居る彼のイーデン氏にしろ。老大國の下り坂にある英國に一つの活力を與へて居る様なもので、あの難局を一人で背負つて居る様な現下の英國に於て、彼れの如き若き政治家が第一線に立つて居ることは、まことにたのもしいと言はねばならない。よしんば現下の英國の外交が失敗したとて、それを彼れの外交の失敗に歸するのは、あたらないので、かゝる場合彼れ以外の誰れを持つて來ても失敗するに決まつて居る。

誰が何んと云つても、時代を背負つて行く者は青年であらねばならない。青年は時代のホルモンである。是等多くの青年のなかに、人的資源の存在しない筈はないと云ふのが筆者の主張である。

官界や政黨等の古顏を揃へたからと云つて近衛內閣の補强工作を意味するものでもないのは前述の通りであるが。長期抗日に對應すべき長期戰線を覺悟すべき現下の情勢に於て、近衛內閣は國民が支持すべきものだ、もし國民の支持に弛みを生じた場合は、たとひ參議を二十人にしたつて何の役には立つものではない。要は、現下の躍進日本に應しい人的資源開發と人材の登用にあらねばならぬ。

〃一死報國〃とは政治家が國家の赤子をまんちやくするところの合ひ言葉ではない彼等自からが、此の念に燃えて行動してこそ、はじめて一般國民にその範を垂れ得るものである。宣傳でなく行動だ。これが即ち全國民にアツピールする生氣ある無言の雄辯である。日本は如斯き「腹」のある爲政家を求めて居るのである。ところが、現下の行政機構を以つてしては、之等の必要なる人的資源の開發に對する道が開かれてないのである。

此の事實をば現下の我國に於ける外交界にその例を取ることが出來る。

廣田外相は外務省の機構革新にかねてからの用意があると新聞は傳へてゐるが、その後どれだけの刷新策を强行したか頗るあやしいものだ。殊に今日の駐在外交官といふものは、その大半が化石同樣で時勢も分らなければ、意氣も迫力もない連中ばかりだ。永い海外生活で練達堪能にだけはなつてゐさうに思へるが、それも制度の缺陷のため切齒扼腕の事實が多いのは爭はれない例へば新聞の傳へるところによると、現に南支の某地に於て二十年も勤續して、支那語は勿論の事、廣東語から英語まで自由に話し、支那の要人を大いに操縱し得た雇員の書記が居るさうであるが、彼れが只單に支那の學校を出たゞけで、正規の試驗を受けてない爲めに書記生に採用出來ない現下の我國の官吏任用令なんか正に人材不登用の好例である。(大朝 天聲人語 11.11.2 參照)

外國では海千山千の猛者で、昨日までは商館の鞄取りや顧問辯護士をやつて居た様なのが、直ぐ外交官に早變りしたりなどするのは尋常の茶飯事にして、かゝる猛者にして初めて强か者の支那人の籠絡も出來、裏面工作もいたつてスムーズに出來るものだと新聞は傳へて居る(前揭新聞)。然るに外交官といへば名家の女婿で、指間に光るものを光らせ、ネクタイの結び方ばかり氣にするといつた道化者を聯想するのが我國の實情ではないか。現下の外交官は決して所謂「お上品」好みの手に負へる仕事ではないと思ふ。外交官といへば、最早蒼白き「お上品型」ではならぬと云ふ主張が、日支事變の折りから、外交實力の戰ひが展開されて來た今日强く叫ばれて來たが、之れは必ずしも外交畑のみの問題でなく、現下の日本の行政機構、軍部を除いたどの部門に於ても、同樣に主張出來る事柄ではなからうか?

事變後に來るものを豫想して自然の資源開發の前に先づ眞の人的資源の開發が行はれねばならぬ事を主張して此のペンをおく

5年間の編輯後記

新名種夫

1 はしがき

編輯常務の末席を汚すこと昭和9年以來引續いて4年、その前の1年間は編輯部員として言はゞ見習の形で編輯に關係して居たから、結局丸5箇年の間本誌の編輯に携つてゐたことになる。

5年と言へば一昔の半分であるから思へば早いものではある。

この間雜誌の編輯方針も時代の推移と共に漸次變化し、月々の雜誌を1つづゝ見て居ては左程と思はれなかつたものが、今一纏めにしてこの5箇年間の雜誌を通覽して見ると、非常な變遷がその中に認められるのである。

本協會今期の役員改選を期として編輯常務を退くに當つて、子供の古い寫眞を眺める様な心持ちでその頃の雜誌を眺め、5年前のそれと比較して今日の雜誌の想像以上に、（敢て進歩といふ勇氣は持たないけれど）少くとも推移變轉を經てゐることに驚くのである。

發行部數に於ても、5年前には1,400部であつたものが、この期間中に會員增加運動があつたせいもあるが、今日では2,000部に垂とし、尙年を逐つて增加の傾向にあることは、普通雜誌の如く編輯者の功績ではないにしても、その歡びでない筈はないのである。

雜誌「建築と社會」——この餘りにも散文的な名稱も、5年も苦勞して編輯してゐると、何時とはなく懷しくも捨て難い餘韻が感じられる様になつたのは、人間感情の機微であらうか。

それは兎も角、この5年間に本誌の辿つて來た道を振り返り、その間の出來事や雜誌の進んで來た徑路、及將來進まんとし又は進むべき方向などに就て、記錄して置くことは本誌の爲に決して無意義なことではないと思ふ。

この一文は言はゞ5箇年間の編輯後記である。

2 その以前

創刊以來本誌の經て來た道を編輯の方法から大別すると大體に於て、

自由編輯時代
特輯時代
自由編輯時代(現在)

の3つに分けられる様である。

「建築と社會」發刊の目的、否日本建築協會設立の動機は建築に關係ある社會現象に關して、建築家の立場より社會を啓發指導して行くことにあつたことは言ふ迄もないことであつて、發刊當時の「建築と社會」がそうしたモツトーの下に、時々の社會事象に對應して自由に活潑に適切なる編輯を行つてゐたことは最も自然なことで、初期の雜誌の內容が今日にも勝つて社會指導的であつたことは當時の本誌を知るものゝ均しく認むる所である。

だが、その當時と雖も全然特輯が行はれなかつたわけではなく、防火建築、防火都市等の題目では何回かそれが行はれてゐた様である。

この題目は我建築協會の誕生より今日に

至るまで、掲げて以て社會へ呼びかけて來た旗印であり、今日の時局に際して更に一層その旗色を鮮明にするの必要をすら痛感するものである。

扨、以上の如き、主として自由題目を以て毎月編輯を行つて行く方法は、執筆者の選定從つて原稿の蒐集に非常に不便であるといふのも本誌が次第に特輯化した1つの理由であるが、特輯化の根本原因は、會そのものゝ傾向が協會設立本來の意味から次第に離れ、對社會的活動より漸次會員本位に移つて來たに依るもので、社會指導の代りに、會員への資料の提供、その技術的指導に編輯の主なる目標が置かれる様になつた爲である。

從つてその内容は各種の建築計畫に關する參考資料の掲載が中心となり、それが纏められて特輯號の形にまで進展したのであつて、遂に特輯時代の出現となつたわけである。

當時のこうした傾向は必ずしも本誌だけのものではなく、アーキテクチユラル・フオーラムなどが各種の建築のスペシヤル・ナムバーを盛に發行したのもやはりその頃であつた。

言ふ迄もなく、毎月特輯號を出す様になつたのは、自由題目のものと特輯號とを適宜相交へて出して居た永い過渡期の後であつて、年始めの編輯會議で1年間の特輯題目を豫定し、1年を通じて特輯號で終始する様になつたのは昭和4年の頃からであつたらしく、それが昭和10年末まで約7年の間續いたわけである。

僕が編輯に關係する様になつた昭和8年は正に特輯號の全盛期であつた。

3 編輯部員・編輯幹事

編輯部員といふものが初めて出來たのは昭和8年の1月であつた。その設けられた理由は、編輯常務は評議員中より互選で選出せられるもので必ずしも編輯技術に堪能なる人とは限らないから、編輯常務を補佐し編輯の實務を處理して行く者が必要なわけで、その爲に設けられたのがこの編輯部員であつた。

昭和8年には5名の者が擧げられ、僕が初めて編輯に携つたのもこの年、編輯部員としてであつた。

之は後に述べる「建築學研究」の問題とも關係があるのであるが、序に書添へて置き度いことは、この編輯部員が昭和11年度には編輯幹事となり、編輯幹事會は「建築と社會」編輯幹事會と「建築學研究」編輯幹事會との2つに分けられ、その人數も非常に增加せられた。之が今日の編輯幹事會の組織である。

建築學研究のことは後に述べる。

4 昭和8年以後

扨、僕が編輯に關係する様になつてからも數年來の特輯式編輯方法は依然繼續せられてゐた。だがその内容は次第に變りつゝあつた。

昭和4年から6年頃までは主として會員を對象としてそれに建築設計資料を提供することに主眼が置かれ、住宅やアパートメントやホテルや學校や病院などに關する特輯號が相次いで、或は年毎に何回も繰り返されて發刊せられたが昭和7年頃より雜誌の傾向は再び「建築と社會」本年の使命に立歸りはじめ、同年3月1日滿洲國成立と聯關して、3月號は次の如き内容を以て、早くも「國防と建築」の特輯號が編輯せられてゐるのは6年後の今日の時局に接し、防空法の設定等と思ひ合せて、確に時代に先んずるものがあつたことを思ふのである。

我國最近の兵營建築　内藤太郎
帝國海軍の現狀と海軍新兵器　福永恭助

都市と防空　小倉尙
地下鐵と國防　花井又太郎
最近火砲及投下爆彈とその破壞威力　小倉尙
飛行機の現狀とその爆擊力に就いて　佐々木達治郎
航空界と航空法　佐々木利吉郎
飛行機格納庫に就いて　柳井平八
滿洲事變と國防　中村濱作
滿洲と建築　安井武雄
滿洲在住者としての雜感　村田治郎

この頃から雜誌の傾向は次第に都市の問題、都市計畫上の諸問題、防空施設、防火施設、都市交通、都市美、都市住宅、建築法規等の諸問題に關して社會に呼びかけ、當路者の注意を促す方向に向つて來たことは、編輯者の方針よりも時代の壓力に依るものと見るべきが妥當であらう。

昭和8年の都市計畫委員會などは、故松室重光氏を委員長として火花の散る様な活動振を示し、その年の8月9月の兩月號を引續いて膨大なる都市計畫特輯號たらしめてゐるなどを見ても、その時代の方向が察せられるであらう。

試みに昭和8年9年に於けるこの方面に關する特輯號をピツク・アツプして見やう

昭和8年度
2月號　百貨店の防火
8月號　都市計畫1
（大阪市シビツクセンター理想案の懸賞募集の發表あり）
9月號　都市計畫2
昭和9年度
4月號　公園
7月號　都市武裝
11月號　關西風水害

昭和8年度昭和9年度中でも昭和9年7月の京阪神の防空演習には、我協會は都市武裝委員會を組織して敢然これに參加し、7月號の都市武裝特輯號はその所産であつた。

この様にして協會が再び社會と聯關して活動する様になるに從つて、雜誌も亦社會の動きと共に動く編輯方針を採らねばならないのは言ふ迄もなく、その爲に1年を通じて豫定せられた特輯方法では、變化起伏の多い社會事象に對應すべく非常に困難を感ずる様になつた。

本誌の編輯方法が昭和11年度から昔の自由編輯の方法に歸つたのはこれが爲であつて、社會の動きに應じて建築家の立場から社會を指導し、當局者に呼びかけ、併せて建築家自身の蒙をも啓くといふ「建築と社會」本來の使命に立かへることとなつたわけである。

前にも言つた如く、決して我々編輯者がその方向に雜誌を導いたといふのではなく時代の壓力が建築家をして何時までも象牙の塔の中に籠ることを許さなかつたのである。

かくして特輯號の形式は、單に社會の風の風ぎの間を繋ぐ爲にたまさか使用されるに過ぎない、間つなぎの手段となつた。11年度の5月8月10月11月の各號、12年度の3月6月7月8月10月の各號がそれに相當する。

編輯のこの態度は尙今後も續くであらう又續けられるべきであると思ふ。これこそ「建築と社會」本來の態度であり、建築協會存在の理由でもあるからである。

5 新建築欄

今日まで5年間に雜誌の辿つて來た道は大體以上の通であるが、雜誌の內容の1部としてここに附記して置きたいことは、昭和7年2月號から始められた國際新建築欄に就いてである。

外國に於ける新建築の紹介はそれより以前からも行はれてゐなかつたわけではないが、小さな寫眞を材料の廣告などと一緒に不體裁に並べたに過ぎない、埋草的存在に過ぎなかつた。

偶々昭和6、7年頃よりの對外爲替關係の惡化に伴ふ外國雜誌の暴騰の爲に、個人的にこれを購入することが困難になつたのを救ふ方法として始められたのが、この欄開設の最初の目的であつた。

後にその中都市計畫に關する部分を分離して都市計畫欄を作つたが、本誌が率先して之を行ふと、前後して雜誌「新建築」がこれを掲載しはじめ、「建築雜誌」も亦これに倣ひ更にこれを集成して「建築グラフ」發刊の基を作つた。

會員への資料提供も亦決して忽にすべからざる協會の一つの務めである以上、これは將來とも發展擴大すべき性質のものであらうと思ふ。

6 單　行　本

今1つ擧げて置き度いことは僕の居る期間中に發刊せられた單行本のことである。

市街地建築物法令
續學校建築圖集
續住宅圖案集
大阪市地質調査圖表
都市武裝、

の5冊がそれであるが、何れも單行本として相當に價値のあるものと信じてゐる。最もよく捌けたのは市街發建築物法令と續住宅圖案集であつた。

「都市武裝」は都市武裝委員會報告として寄贈が目的であつたから別として、大阪市地層調査圖表が非常に有益な文献であるにも關らず賣れなかつたのは利用者の範圍が限定せられてゐる爲であらう。近くその後調査せられたものを更に追加して一層完璧なものとなる筈である。

單行本出版に就いて何時でも問題になることは、その出版費と賣上收入とがバランスすることが要求せられる點である。

極めて貴重なる資料も一般向でないものはその要求の爲に出版出來ない場合があり得るのである。

收支の相償ふ出版は市井の書店と雖もこれを行ひ得る。有益なる資料にして收支相償はざるものこそ建築協會如きに於て出版すべきではないであらうか。

久しい編輯の經驗よりして、この理論が多くの場合一片の理想に過ぎないことを知つてゐる。だが時と場合とに依つて、地質調査圖表出版の際に示した如き態度を以て有益なる單行本の出版を行ふことも、協會の1つの務めではないであらうか。

7 建築學研究の問題

僕が常務として編輯に携はる様になつた時には「建築學研究」は既に建築協會の費用で年に4回宛發行せられてゐた。

別に京大建築學教室の中に「建築學研究會」があり、建築學研究會と建築協會とから各4名宛の「建築學研究編輯委員」が出て、京都で開かれる編輯會で決定せられる方針に從つてその編輯が行はれるといふことになつてゐた。

これは昭和8年に當時の理事者と建築學研究會との了解に依り常務會を經て決定した事柄であつて、これに關する覺書が協會と建築學研究會との間に交はされてゐるといふことであつた。

實際の編輯事務は全て建築學研究會の手で行はれ、掲載の原稿も殆んど大部分は同會側のものであるが、費用は建築協會の負擔である。問題はこの點にあつた。

僕が常務として編輯に從事する様になつてから間もなく、この點に對する1會員の異議を聞いた。建築學研究にこうした問題が附き纏つてゐるのを知つたのはその時が最初であつた。

それから日の經つに從つて同様な異議をさし挟んでゐる會員が案外多數あることを知り、漸くこの問題に關心を抱く様にはなつてゐた。

だが實際にこの問題を編輯常務として何とか處理して置かねばならないと感する様になつたのは昭和11年度の豫算編成の際であつた。

昭和10年末に於て協會としては建築倶樂部の合併と會費の値下とが同時に行はれ、その爲に11年度の豫算は可成に緊縮方針を採らねばならなかつたのであるが、豫算削減の1つの方法として役員の間に建築學研究廢止の提案さへあり、協會役員の中にも建築學研究の獨的存在に反對する空氣が非常に濃厚であることを知つた爲であつた。

建築學研究の存在を協會としてもつと自然な形になほし、同年度の如き緊縮豫算に於ては「建築と社會」の研究論文特輯號の様な形式に於て發行する様にでも出來れば協會として最も自然な行方であると考へたのであるが、役員の多數も亦その意見であつた。

だがこの問題は豫算の緊縮よりも寧ろ會員の異議にその端緒が發せられたと見るべきであるから、編輯常務としては先づ會員多數の意見を聞き、その聲に從つて處理するのが適當であると考へ、常務會の意見に從つて座談會を開くこと2回、大體次の2つの項目に就て會員の意見を聞く事とした。

(1) 協會に於て學術研究雜誌「建築學研究」を發行するの必要ありや否や。

(2) 必要ありとすれば其發行方法如何。

この中(1)に對しては反對者は極めて少く、協會も學術雜誌の1つ位持つてゐた方を可とするものが會員大多數の聲であることを知つた。

そこで(2)の發行方法、これが問題の中心であり、その爲に2回に渉つて座談會も開く様になつたわけであるが、これに對する意見を綜合大別すると、——

(A)研究論文の集まつた場合「建築と社會」の特輯號として發行すること

(B)體裁、內容、發行回數等は現在の儘でいゝが、飽くまで建築協會の費用を以て協會が發行せるものである點に就き、會員の誤解を招かない爲に「建築學研究會」と建築學研究との關係を斷つこと

(C)現狀の儘を可とするもの

以上の中(A)の意見が大多數であり、(B)これに次ぎ(C)が最も少數であつたことはこの座談會出席者の均しく認むる所である。

その後協會側と建築學研究會との間にいろいろのいきさつがあつたが、結局折衷的な(B)の意見が採用常務會に附議せられその結果、前に「建築學研究」を協會に引繼いだ際の兩者の申合せが單なる申合せとして成文化されてゐなかつたことが物議の原因となつた轍に鑑み、「建築學研究」の發行に關して細則の一部を改正すると共に、それまで行はれて來た「建築と社會」に於ける編輯部員、「建築學研究」に於ける編輯委員の制度を廢止して編輯幹事會を設け編輯幹事會を「建築と社會」編輯幹事會と建築學研究編輯幹事會とに分つて夫々の編輯を分擔する事になつたことは前に述べた通である。改正せられた細則の部分及「建築學研究」編輯幹事會規程は次の通である

細則第5條

本會ハ會報及雜誌「建築と社會」ヲ每月1回1日ニ「建築學研究」ヲ年4回刊行ス「建築と社會」ハ之ヲ會員及賛助員ニ配布シ「建築學研究」ハ之ヲ會員ニ配布ス

編輯幹事會規定

第1條 本幹事會ハ「建築と社會」「建築學研究」其他本協會刊行物ヲ編輯ス

第2條 本幹事會ハ編輯常務4名及幹事10名ヨリナリ會長之ヲ囑託ス 但シ必要ト認ムルトキハ追加スルコトヲ得

第3條 編輯幹事ノ任期ハ1ケ年トス 但シ重任ヲ妨ケス 補缺ニヨリ囑託セラレタル幹事ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第4條 本幹事會中ニ「建築と社會」編輯幹會及「建築學研究」編輯幹事會ヲ設ク 「建築と社會」編輯幹事ハ主トシテ「建築

と社會」ヲ編輯シ「建築學研究」編輯幹事ハ主トシテ「建築學研究」ヲ編輯スルモノトス

第5條　「建築と社會」編輯幹事會ハ編輯常務四名及編輯幹事6名ヨリナルモノトス「建築學研究」編輯幹事會ハ編輯常務4名及京都在住ノ編輯幹事4名ヨリナルモノトシ京都ニ於テ之ヲ開ク

第6條　本幹事會ノ會合費ハ役員會ノ例ニ依ル

この幹事會規程の第5條はこうしたいきさつを知らないものに取つては誠に不可思議な條項であり、將來何等かの機會に物議の原因とならむとも限らないことを思ひ、當時それに苦勞した常務の1人として特にこの問題を採りあげて記錄しておく次第である。

8 結　び

扨最後に5箇年間編輯に從事して、氣附きながらいろんな事情で實行出來なかつたことを次に列擧し、本誌將來の編輯方針の參考に資し度いと思ふ。

第1は今後の編輯方法としては特輯方針よりも、最近の自由編輯方針を踏襲して行く事が最も時代に應じたものであり、緊縮豫算の範圍内で發行する雜誌として、豫算上からも適當であるといふ點である。

特輯號に於ては或月の原稿は翌月に廻す事が不可能なるに反し、自由編輯方法に於ては毎月豫定の頁數以上に達した分は、翌月に揭載しても一向に差支ないから、豫算以内の編輯には誠に好都合である。

更に特輯方針に於ては頁數が豫定より超過してゐる場合でも、毎月のカレント・トピツクスは更にその上に是非とも揭載するを必要とし、その爲に頁數が一層增加しそれが重つて1年に相當の赤字を出す原因ともなるのである。

社會的動向の根本を誤りなく達觀しつつ時局の流れに應じて建築技術者の立場から社會を指導して行くことこそ、本協會の使命に忠實であると同時に豫算勵行の點からも最も適切な一石二鳥の編輯方法である。

結論獲得の過程としての高遠なる研究論文は一切建築學研究の方へ委讓し、「建築と社會」は寧ろその結論の實際的應用及びその應用の社會的普及化に頁の大部分を捧ぐべきである。

第2は廣告と本文との關係、廣告收入と雜誌費との關係に就いてである。

廣告の製版印刷等に要する一切の費用は全て雜誌費から支辨せられるから、一定の豫算に準據して嚴格に毎月の編輯を行ふものとすれば、廣告の成績の良好な月は本文の内容を削減するに非ざれば、雜誌費を豫算以内に納めることが困難となる。

言ひ換へれば、廣告收入の增加は雜誌内容の貧困を招來するといふ矛盾した結果に陷るのである。

この場合廣告部分の增加に對して直に廣告收入の增を充當することが出來ないことは現在の協會の會計收支の立前から已むを得ないことではあるが、場合に依つては本文に對する廣告部分の頁の割合が、第三種郵便物認可の規定以上に增加して雜誌の品位を落すことすらあり得るのである。

こうした缺點を除く爲に、廣告收入と雜誌費とのバランスの範圍内で編輯豫算を特別會計の形式にすることを立案した事もあつたが、その實行には種々なる障礙がある樣である。

だが、廣告收入と廣告の爲に要する編輯費とを比較し、豫定以上の廣告の增加に對して或程度編輯費に增額をなし得る樣編輯豫備費の如きものを作つて編輯豫算に彈力性を與へておく方法を考へることは、經濟上より見て、雜誌の圓滿な發達の爲に是非望ましいことであると思ふ。

最後に、さし當つて最近の物價暴騰に對する私見を述べてこの稿を終らうと思ふ。

支那事變に先立つ世界時局の動きに依つ

て、第一番に價格の暴騰を來したものは鐵と紙とであつた。

雜誌製作費はこの紙の暴騰の爲に2割以上の値上りとなり、昭和12年度の編輯費はその爲に大きな豫算超過を生じた次第であつた。

更に臨時資金調整法、鐵鋼工作物構築許可規則等、戰時諸統制法の發布となり、その爲に建築業界が受けるであらう打擊は、やがて建築協會の財政にも影響なしとは保證出來ないのであつて、一方に於ては物價高があり、他方に於ては豫算に制限があつて茲何年かは經濟上編輯に幾多の困難が豫想せられるのである。

これが對策として考へられることは——

（A）編輯豫算の月割に依り毎號の頁數を豫定し、豫定の頁數以上の原稿は適宜翌月廻しとすること。

（B）物價騰貴の爲に餘儀なくせられた雜誌頁數の減少に對しては、アート以外の紙質の低下に依つてこれを救ふこと。

（C）組方の再檢討

（A）に就いては特輯號を廢止すれば自由にこれを行ひ得るから、豫算の範圍内で編輯を行つて行く爲にも特輯方針より自由編輯方針を可とせねばなるまい。

（B）の紙質の低下に就いては、本文の紙質は活字の讀み辛くない程度でよろしく、少數の寫眞版の爲に本文の頁全體に良質の紙を使用する必要はないといふ考へを從來持つてゐた。紙質よりも記事の内容を本位とする文藝春秋の行方を是認する1人であるが、仕事の性質からか、建築家の抜け切らないデレンタンテイズム？が妨げして何うしてもその實方が出來なかつた。

寫眞紹介の頁には最上のアートを使用すべし。だが本文は文藝春秋程度の紙質でも澤山ではないだらうか。

そして寫眞版の挿圖の澤山ある様な記事は終りの方に廻してアートの分に編入するといふ方法もあるのではないかと思ふ。

（C）の組方に就いては、紙質の低下が行はるれば現在以上に字數を增加することは讀辛さを倍加する恐れがあるから先づ避けるべきであらう。

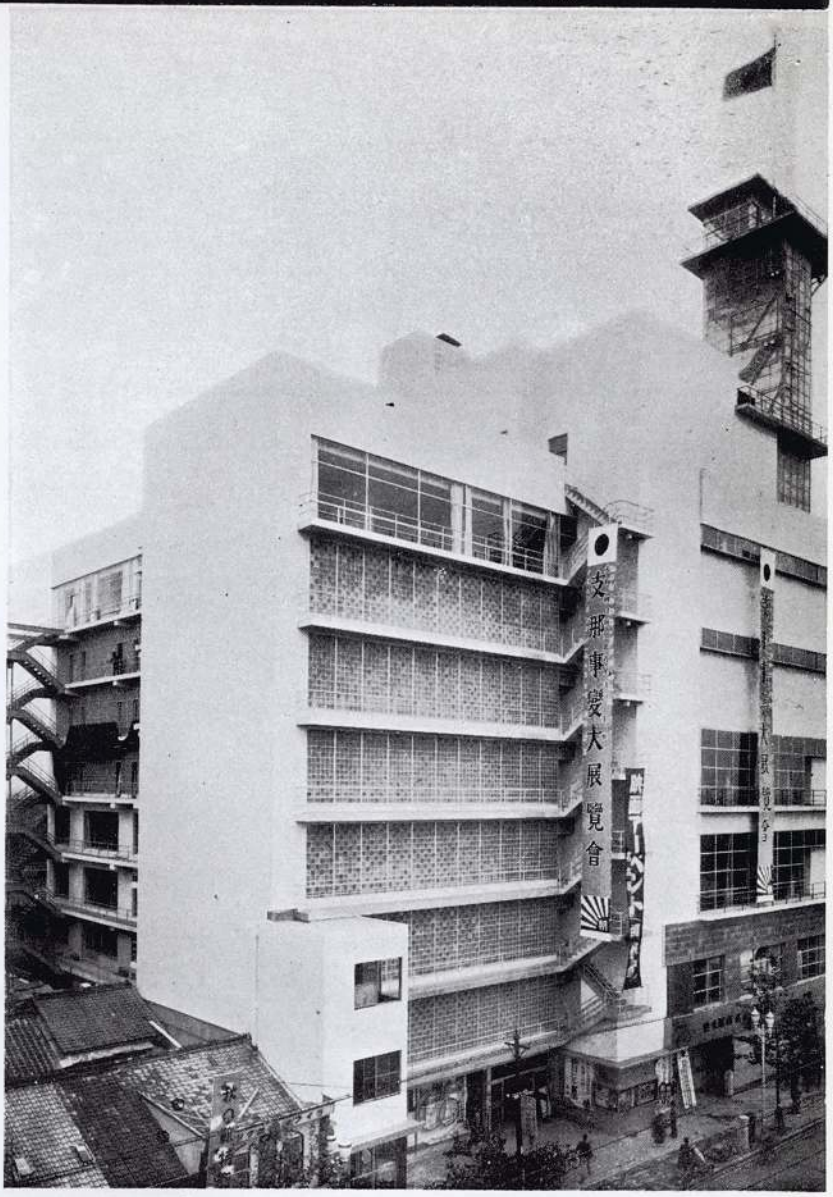
唯6號の使用の適當なる增加、追組方法の採用等に依つて可及的頁の節約は講じ得られると思ふ。

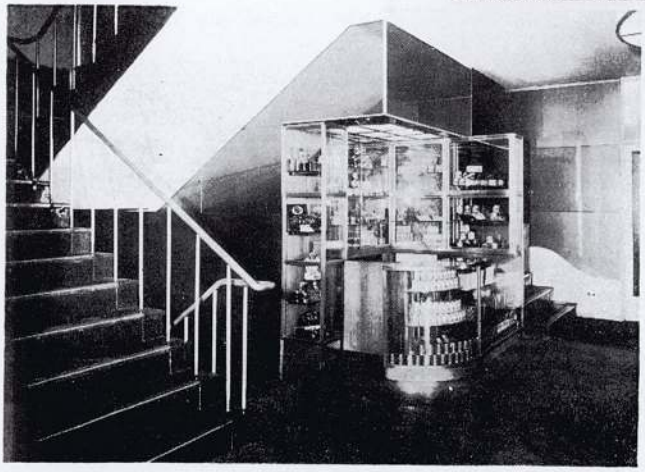
自身が編輯をしてゐる間に、行ふべくして行ひ得なかつたこと、否今日ほど切實に編輯豫算の不足を痛感して居なかつた爲、行ふべくして行はなかつたことではあるが、全ての合理化は經濟的逼迫の際に最も行ひ易いことを思ひ、次の時代の編輯への參考までここに書添へておく次第である。

(1937. 12. 12)

全　景

前面避雛階段より手前
一部分が増築せしもの





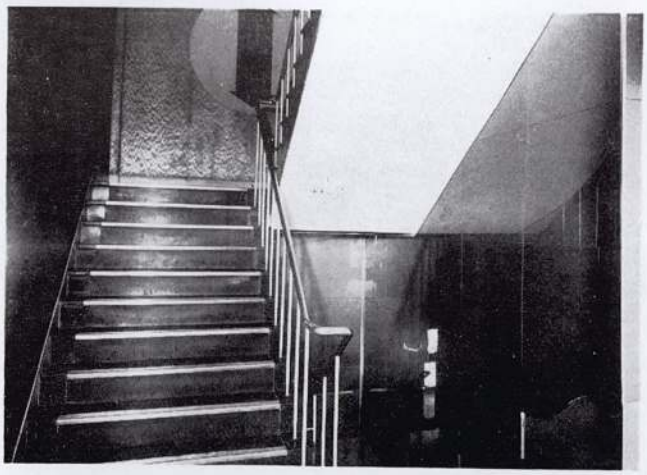
1 階賑場賣店

“朝日ビル名古屋支店”

設計・施工・竹中工務店



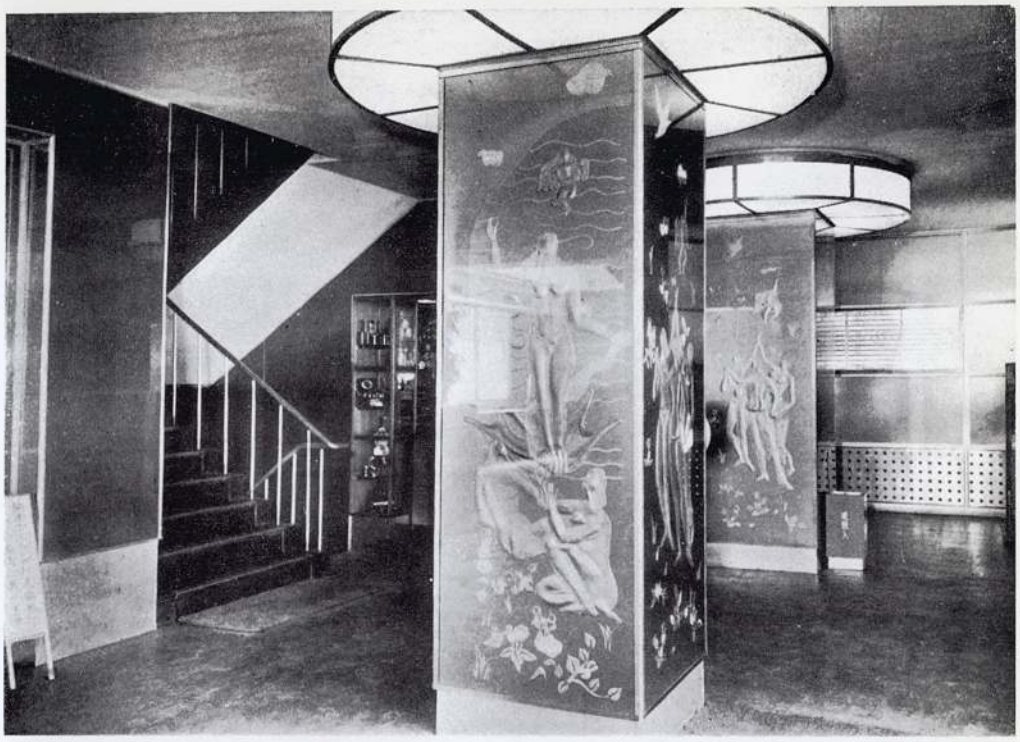
全館夜景



メイン階段

12 “朝日ビル名古屋支店”

設計・施工・竹中工務店



1 階入口ホール獨立柱彫刻鏡



貸 室 一 部



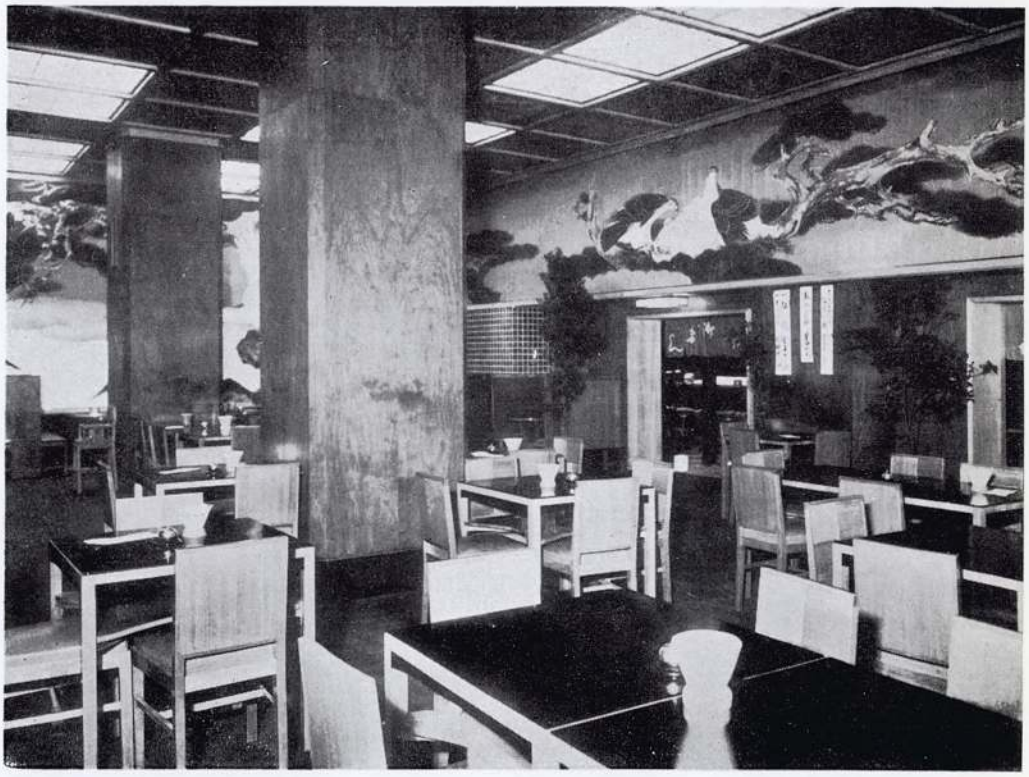
8 階倶樂部バーラー（その1）



8 階倶樂部バーラー（その2）



8 階倶樂部撞球室



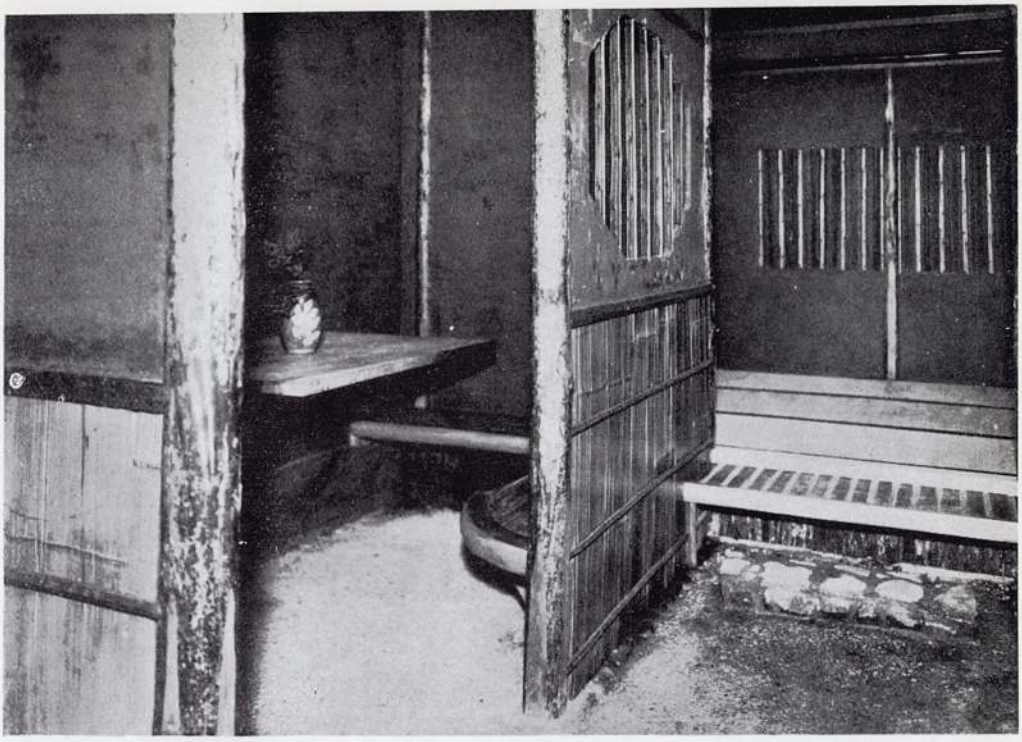
地 階 食 堂 (その1)



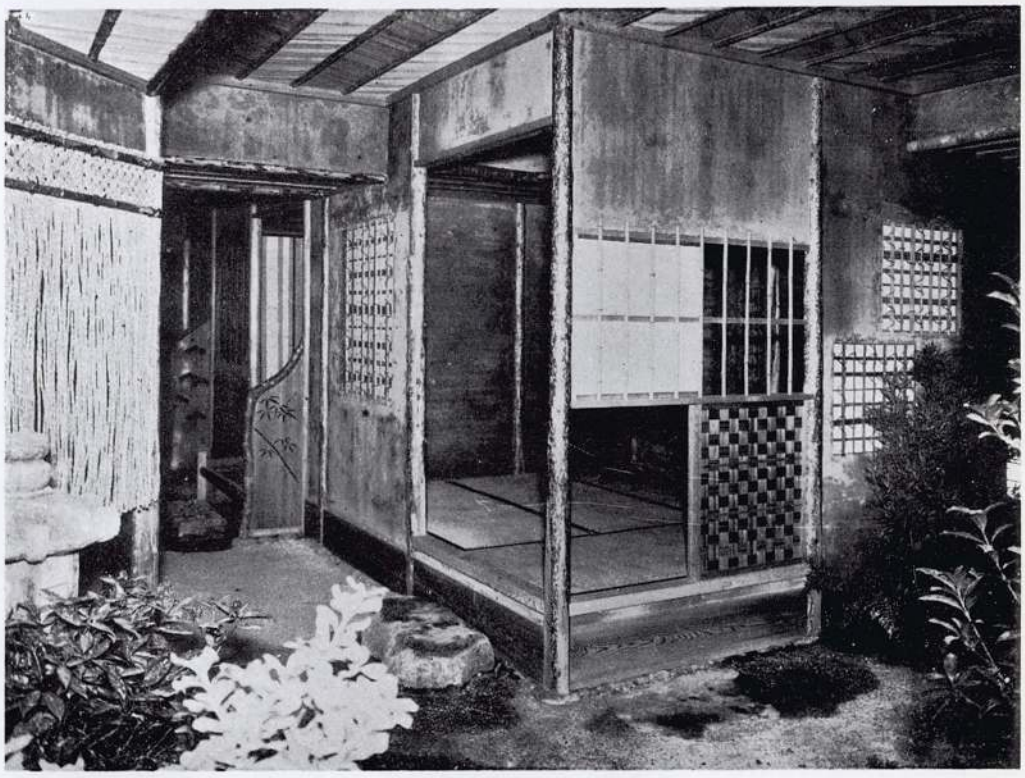
地階食堂（その2）



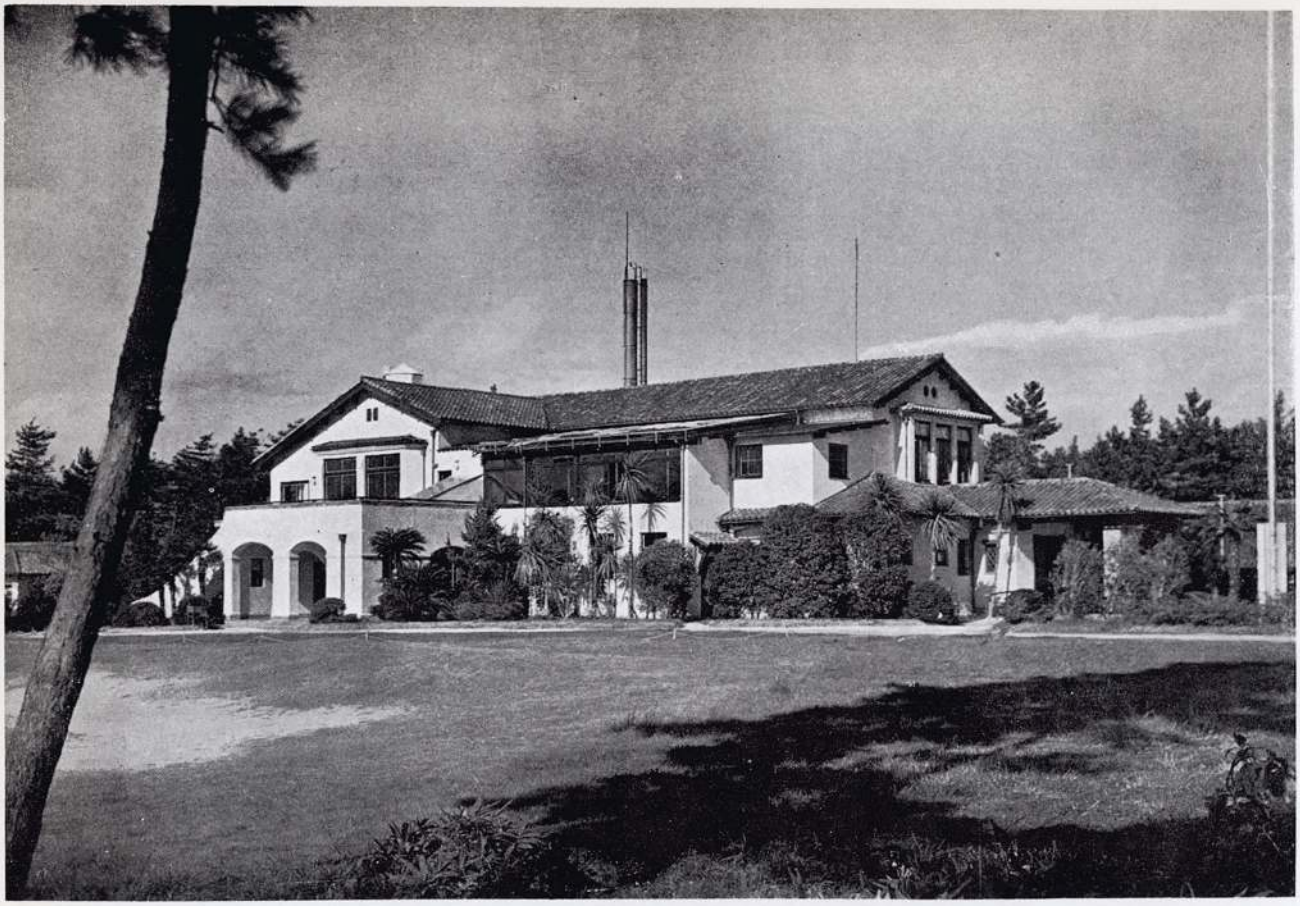
地階特別食堂



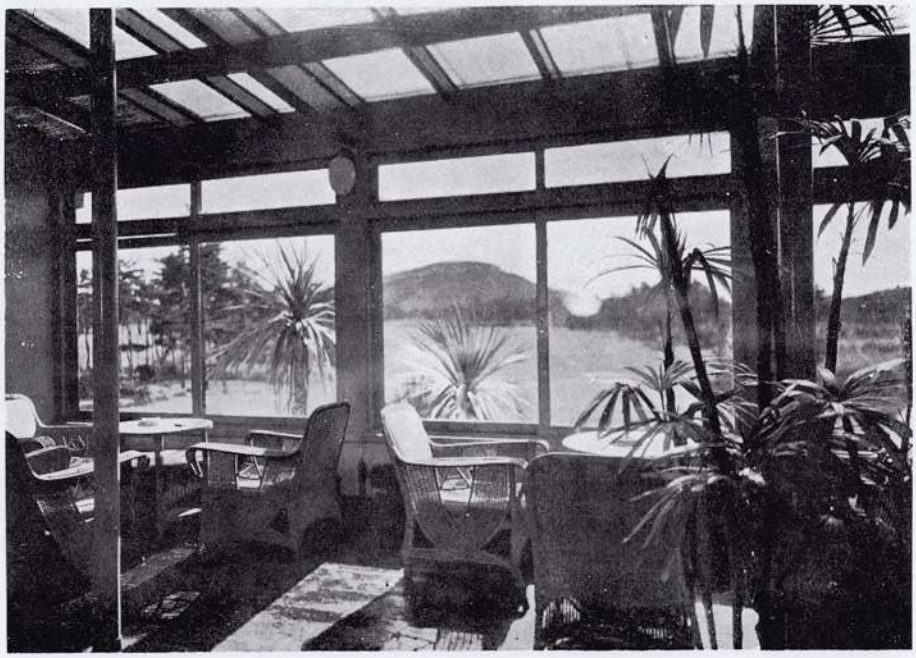
中1地階小座敷食堂



中地階小座敷食堂



全　　景

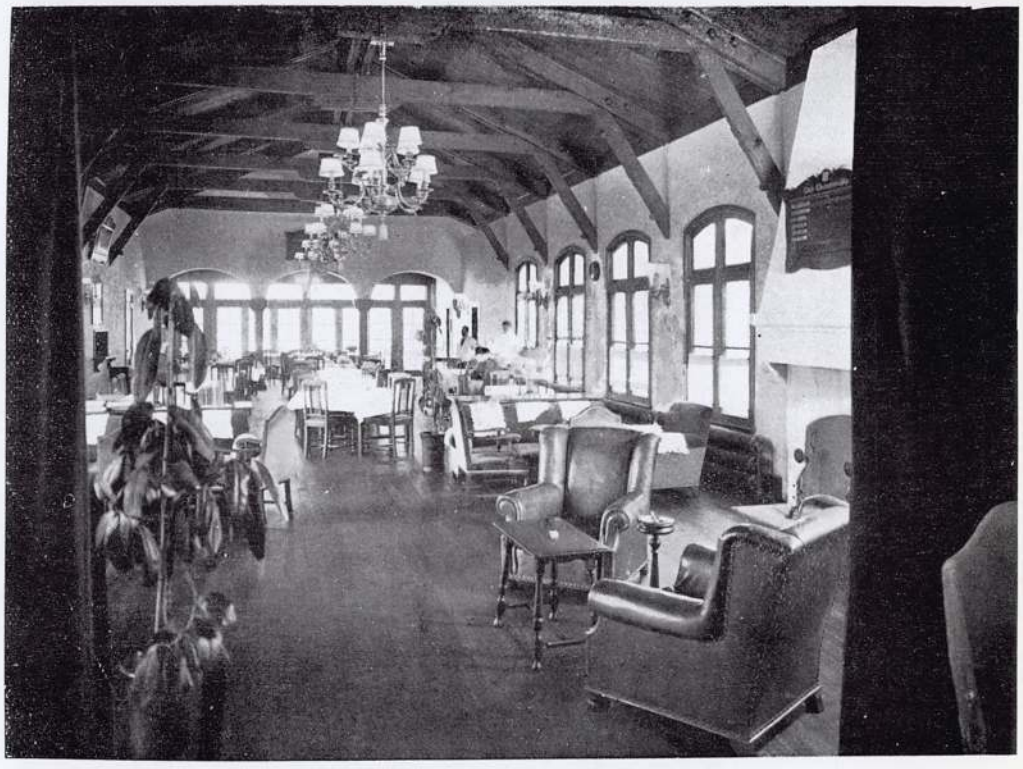


テ　レ　ス

18 “廣野ゴルフ場”　　設計・渡邊節建築事務所・施工・大　林　組



酒　　場



食　　堂



正　面　全　景



1 階 廣 間

10 “北　野　劇　場”　設計・施工・竹中工務店



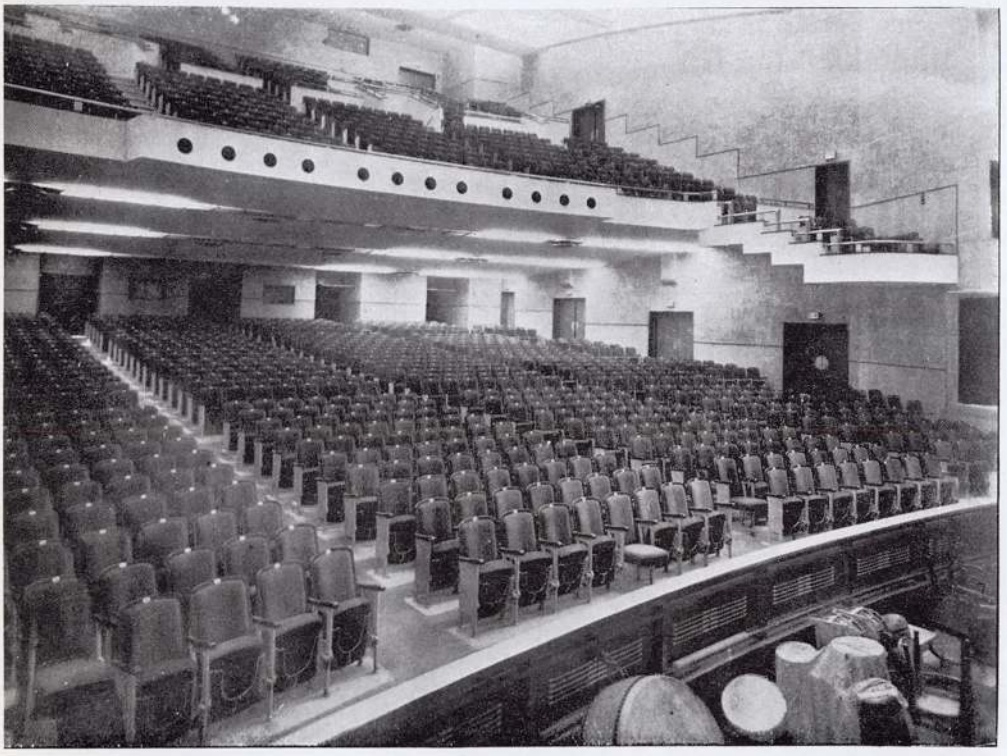
3 階 廣 間



2 階 喫 茶 室

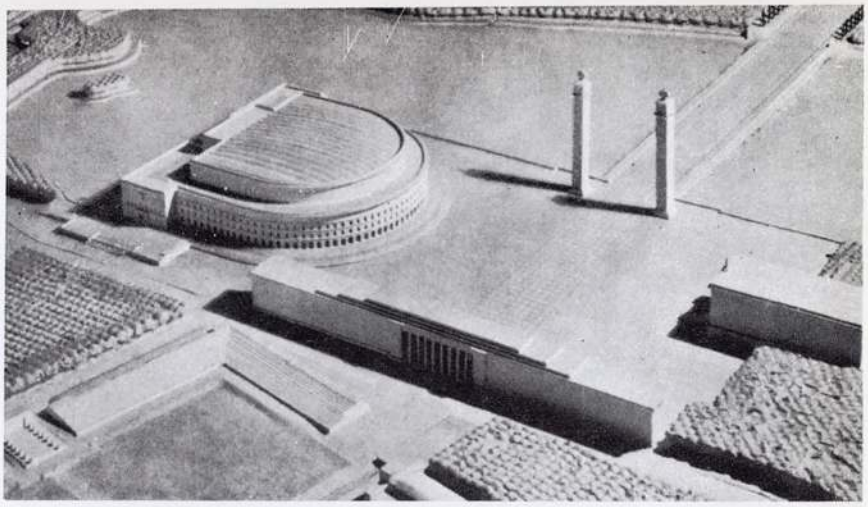


2階より舞臺を見る

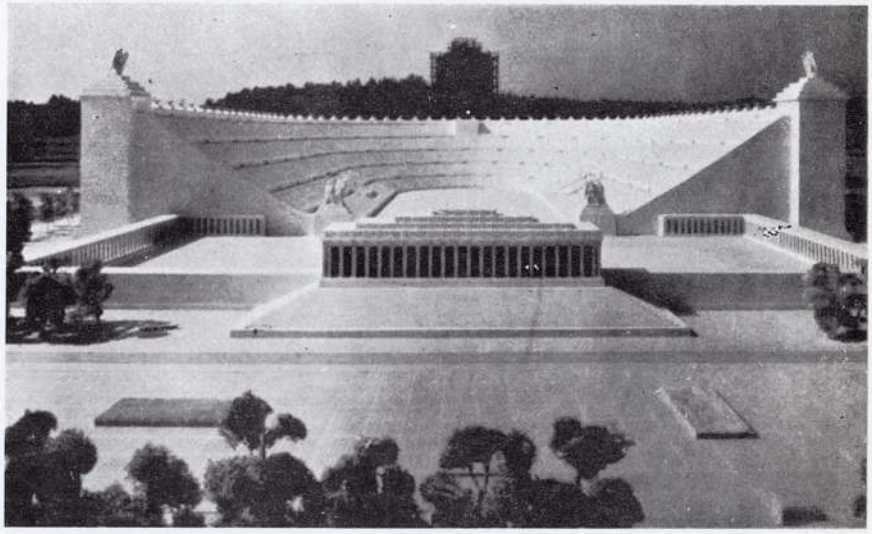


觀　覽　席

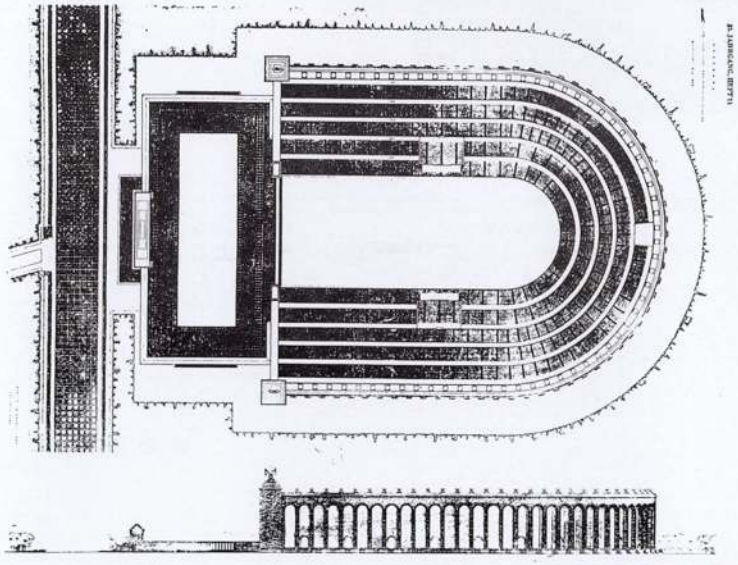
12 ‘北　野　劇　場”　設計・施工・竹中工務店



模型全景



模型正面



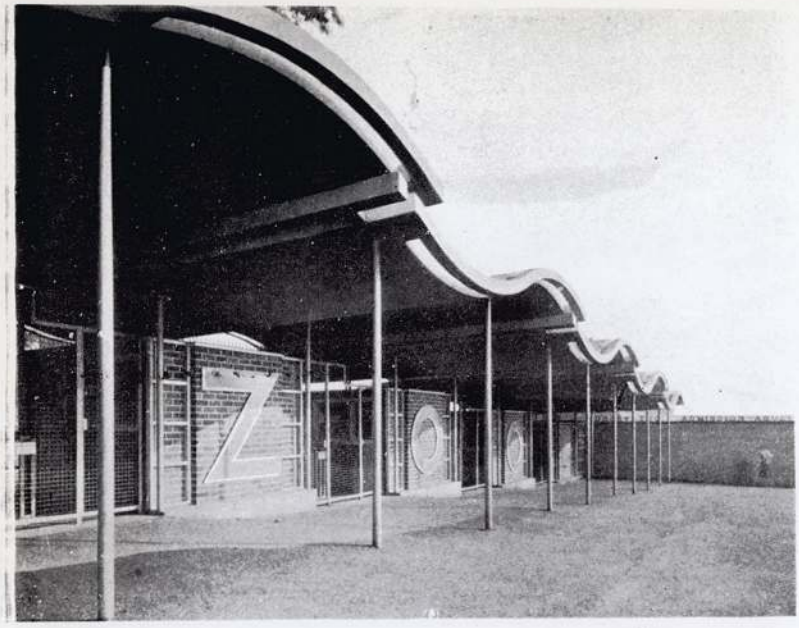
立面圖

①は場内の集會場　②は主要な競技場でいづれも計劃中の模型である　③は競技場のプラン。ベルリン建築家 Albert Speer 教授の設計にある。

(Der Baumeister Nov., 1937 より)

(ドイツ) ニユルンベルグの競技場計畫

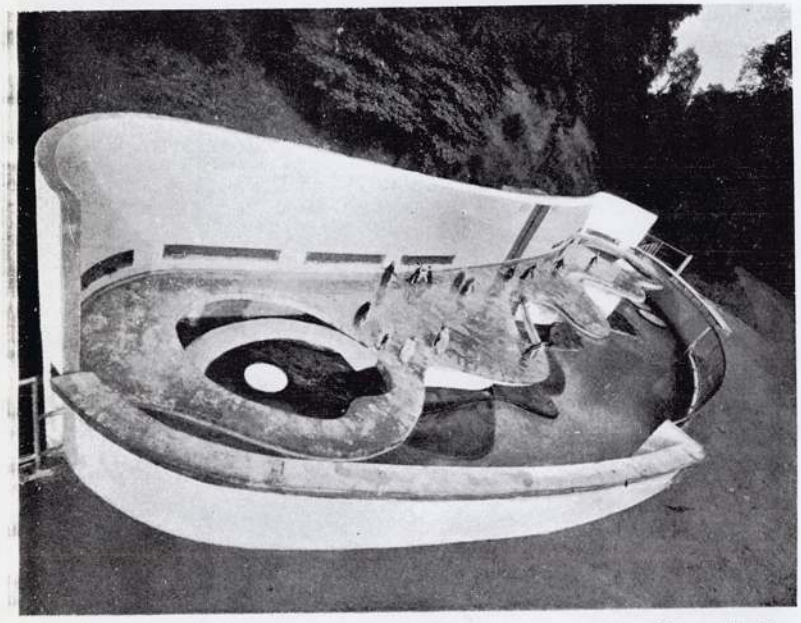
設計者 Albert Speer 教授



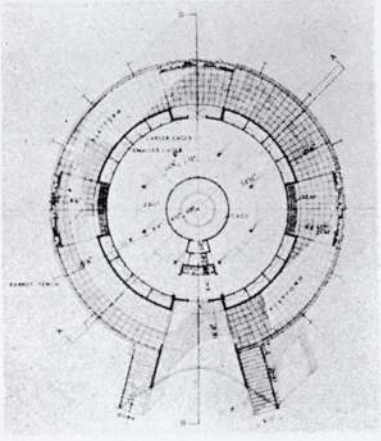
入　　口

今夏開園された新しい動物園で全體を有機的に統一して計畫された點が、亂雜な他の多くの此の種建造物と異つてゐる。

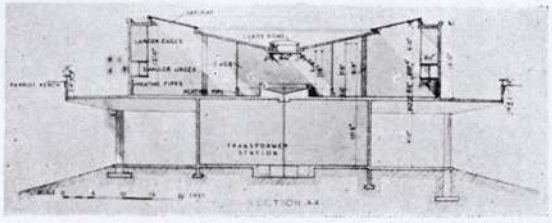
(Architectural Review, Nov., 1937) より



ペンギンのプール



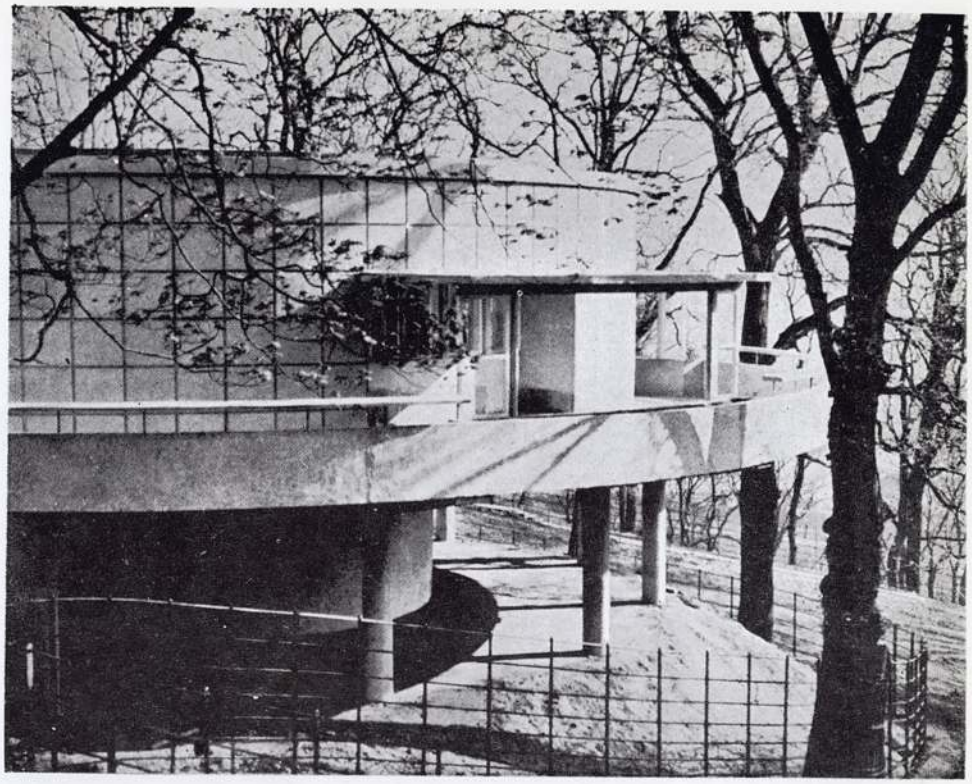
鳥舍平面圖



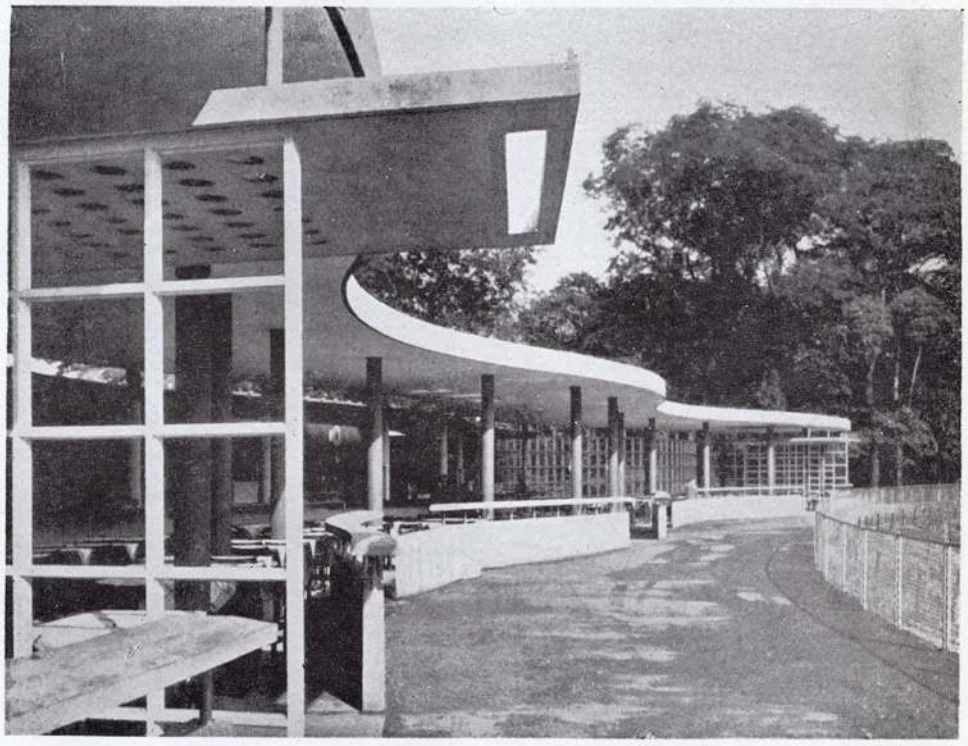
鳥舍斷面圖

16 (イギリス) Birmingham 郊外 Dubley の動物園

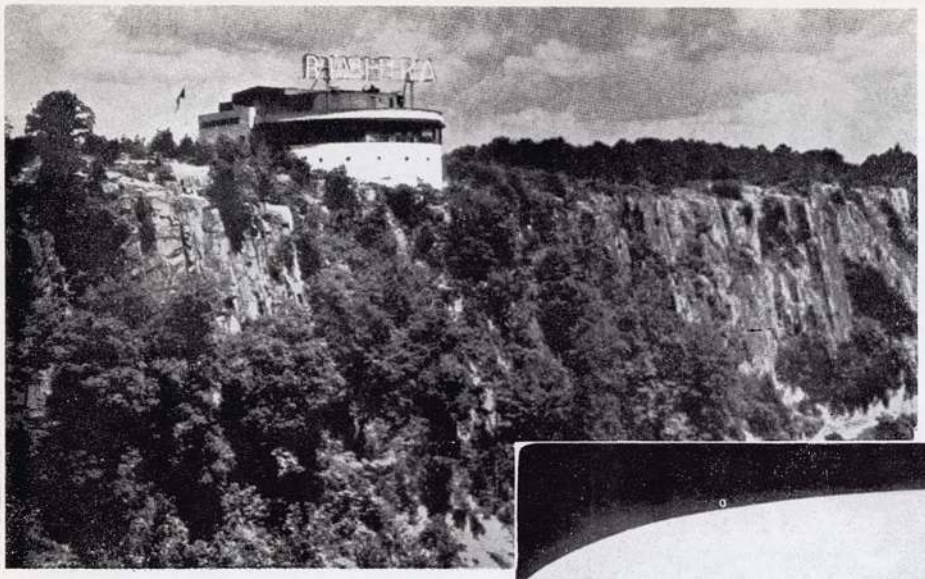
建築家 Tecton



鳥　　舎



カフェー正面



全　　景



ローンヂ内部

ハドソン川を隔てゝニューヨークの郊外を見渡す斷崖の頂上に建てられた餘興場附のレストランである。

餘興場のあるレストランは或意味で劇場の性質を帶びたものであるから、大抵は自然採光のないクローズしたプランであり、換氣採光共人工的に行はれてゐるものが多いが、Ben Marden;s Riviera はその例外で、大食堂（兼觀覽席）の周圍は全部窓として高臺からの眺望に便ならしめてゐる。

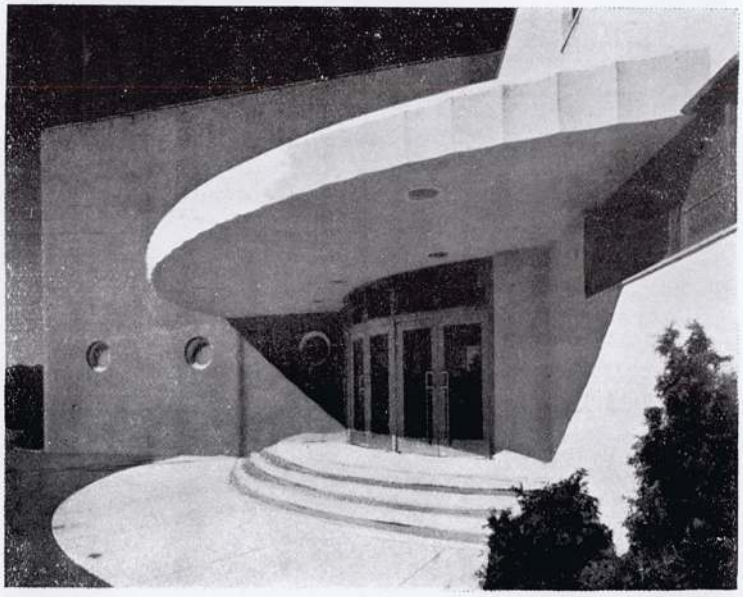
プランは圖に見られる如く非常に特異なもので、酒場やローンヂに描かれた Saul Schary 作の壁畵の感情を既にプランの上にも表現してゐる

大食堂の屋根は機械的に移動して青空が見える樣になるし、窓建具はモーターに依つて下のポケツトの中に落込む樣に構造せられてゐる（斷面圖參照）

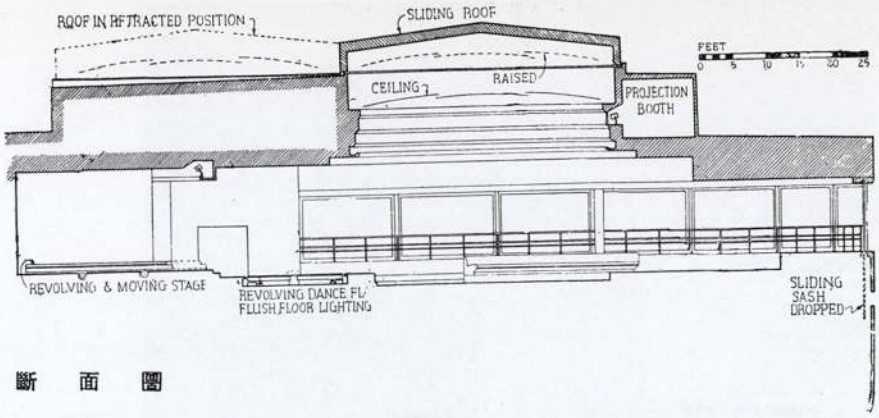
舞臺は前後の2つとも廻り舞臺で後のものはその上更に前後に移動出來る仕掛になつてゐる。

壁はシンダーコンクリート・ブロツク積、內部スタドラス張プラスター塗。

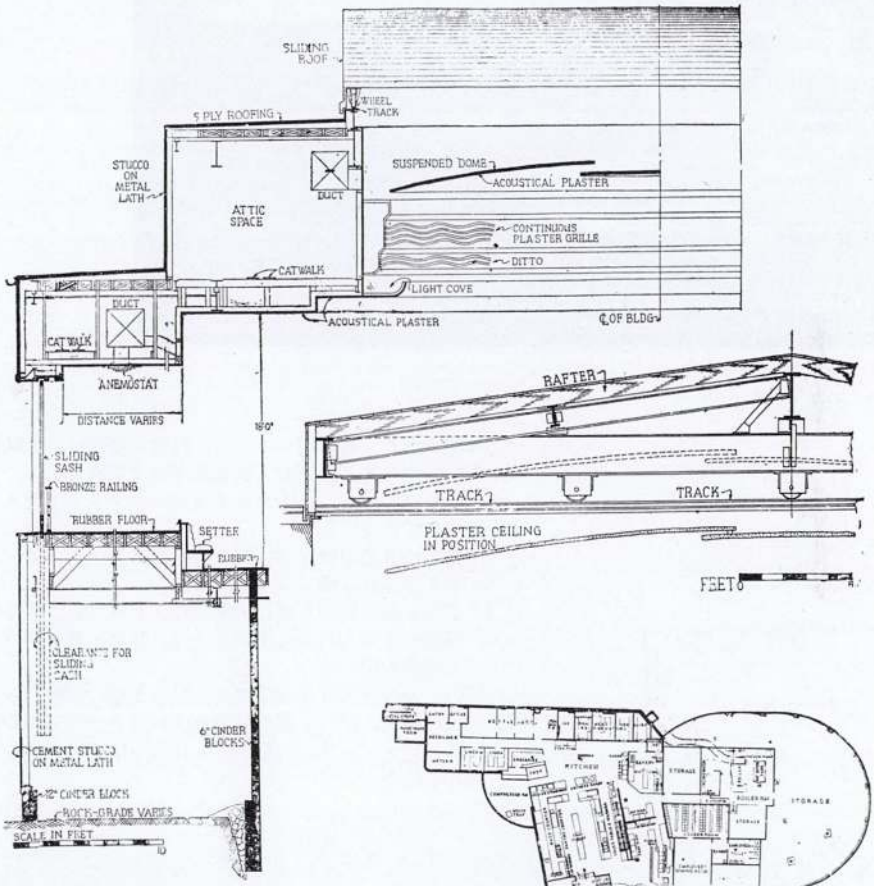
（Architectural Forum, Nov., 1937 より）



玄　　關

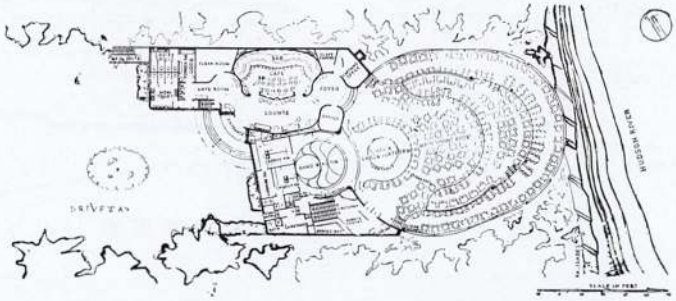


断　面　圖

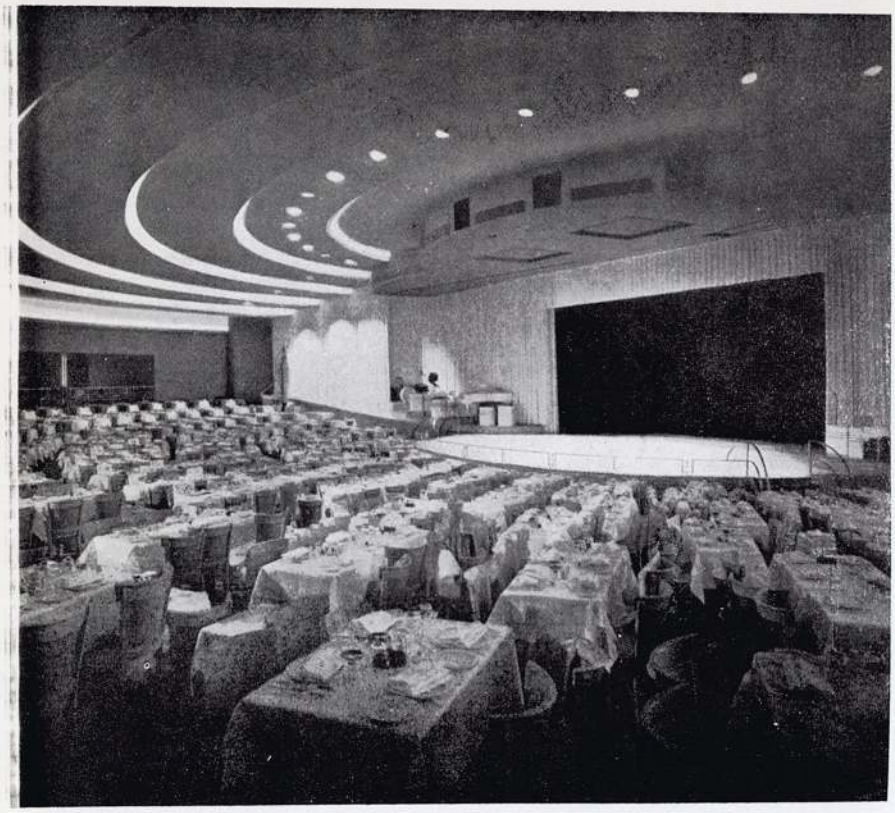


詳　細　圖

地階平面圖



主要階平面圖



内　　部

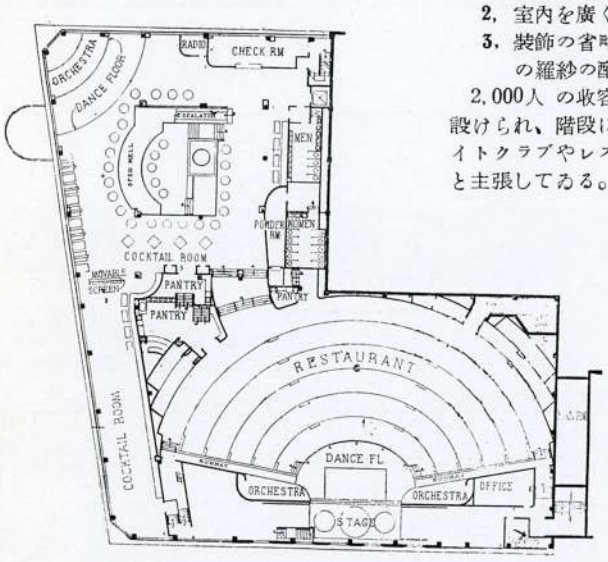
この種の大きな劇場附レストラン設計の要諦は、比較的狭い面積の中になるべく廣い贅澤なイリユージョンを創り出すにある。

こうした目的の爲にこのインターナショナル・カシノの設計には次の様な工夫が凝されてゐる。

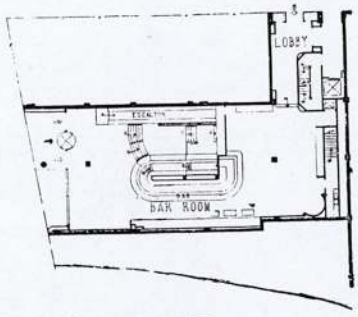
1. 舞臺の有効面積を増す爲に階段及プラツトフォームが機械的に天井に吊り上げられる様になつてゐる
2. 室内を廣く見せる爲に天井に仕込まれた同心圓の細い間接照明
3. 裝飾の省略と色調の簡明——赤、灰色、青のテラコツタに對する淡青色の羅紗の配合等

2,000人 の收容人員を混雜なからしむる爲に階段と平行にエスカレーターが設けられ、階段に沿つて螺旋狀に酒場が設けられてゐる。エスカレーターがナイトクラブやレストランに取付けられたのはアメリカに於いてはこれが最初だと主張してゐる。

(Architectural Forum, Nav., 1937 より)



主要階平面圖



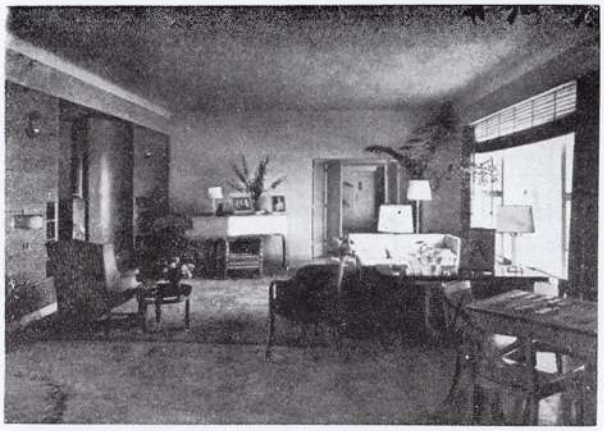
入口平面圖

120 （アメリカ） ニユーヨークのインターナシヨナル・カシノ

建　築　家　T. W. Lamb, N. H. Wei
設備設計家　Donald Deskey



全　　景

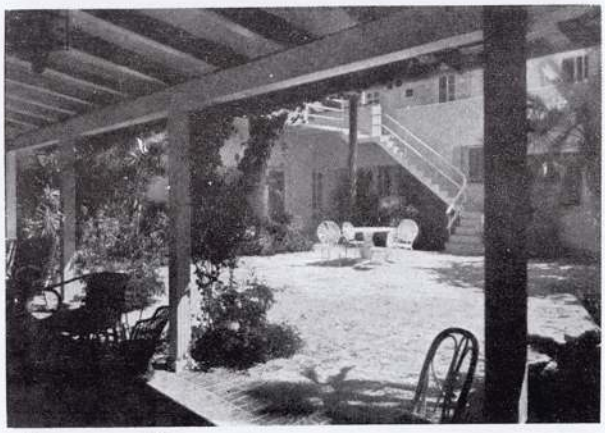


居　　間

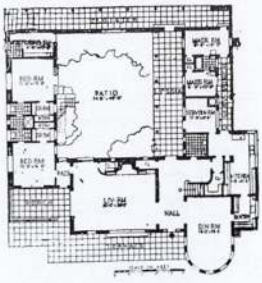
アメリカのフロリダあたりの亞熱帶地方の住宅は從來スパニツシユ・ミツシヨン風のものが適當してゐると從來無反省に考へられて來たがこゝに掲ぐる住宅は主として簡素と善良な趣味とより設計せられたものである。

スパニツシユ風のプランに近代的な取扱ひをすることに依つて生れた住宅である。

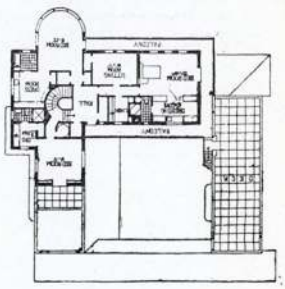
(Architectural Forum, Nov., 1937 より)



內　　庭



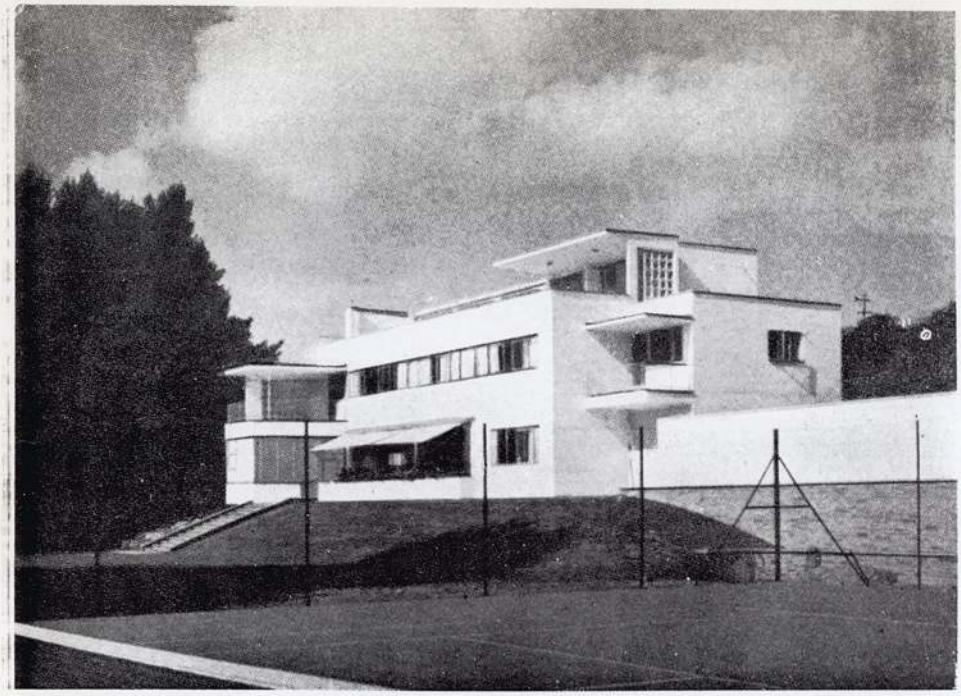
1 階平面圖



2 階平面圖

(アメリカ) マイアミ海岸の住宅

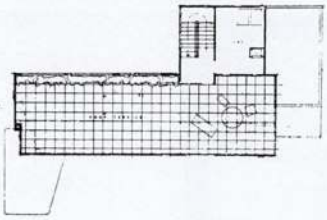
建築家 Robert Law Weed



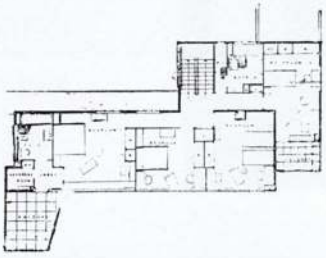
外　　觀

自動車庫の
2 階平面圖

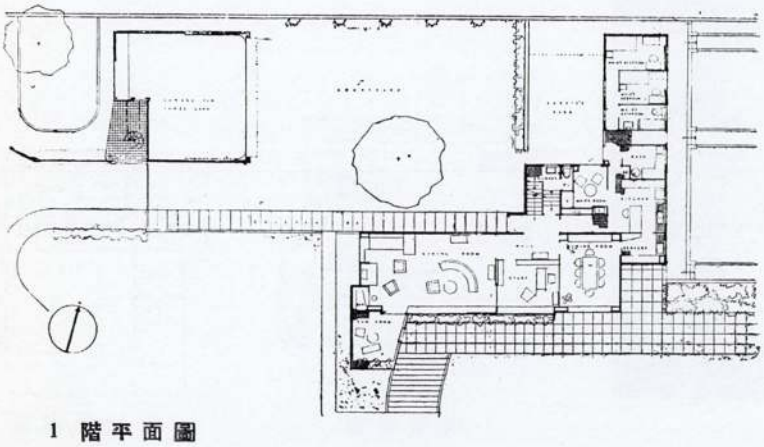




屋階平面圖



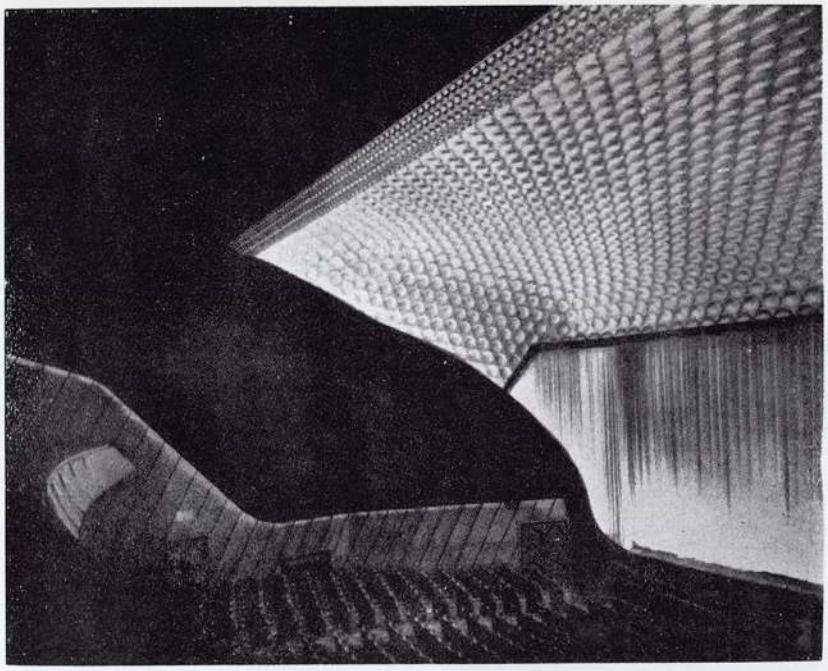
2 階平面圖



1 階平面圖

122 （イギリス） 住　　宅

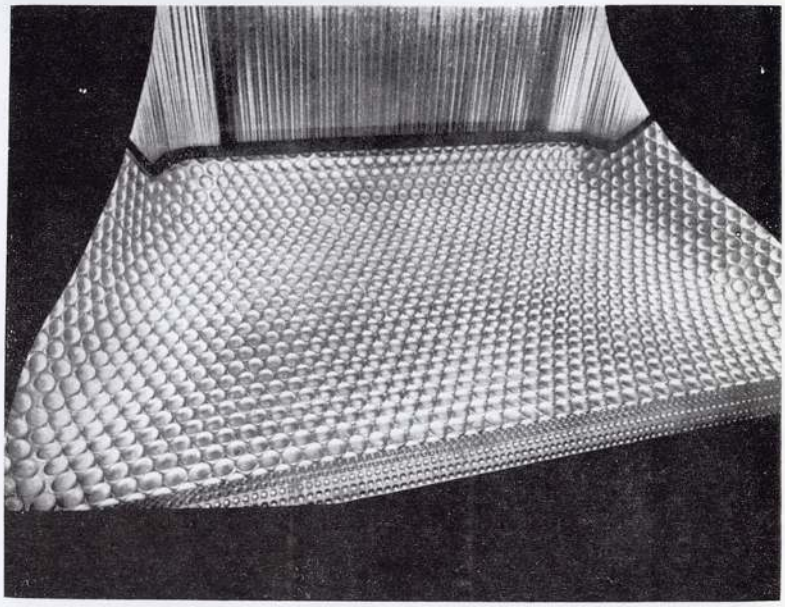
建築家 E. Maxwell Fry



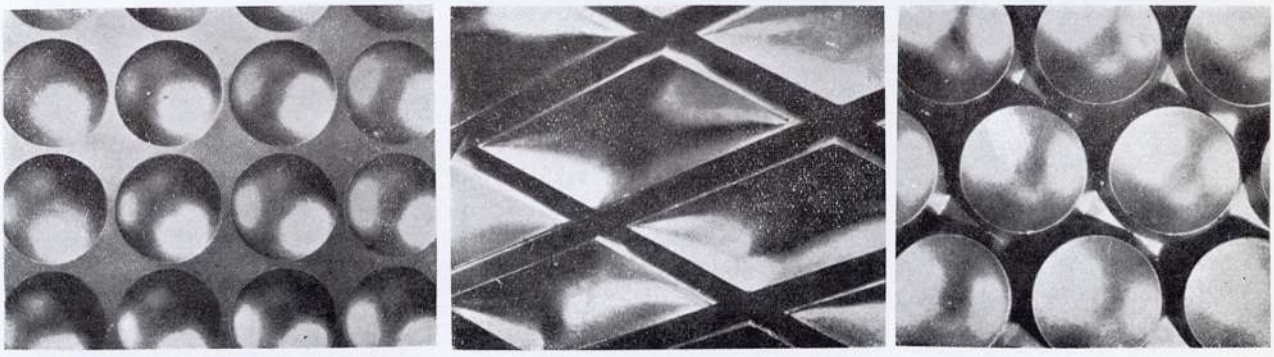
内　　部

映畵劇場の内部を圖の如く光と影の二部分に分ける事によつて非常に自由な、効果的な、照明をする事が出來る。

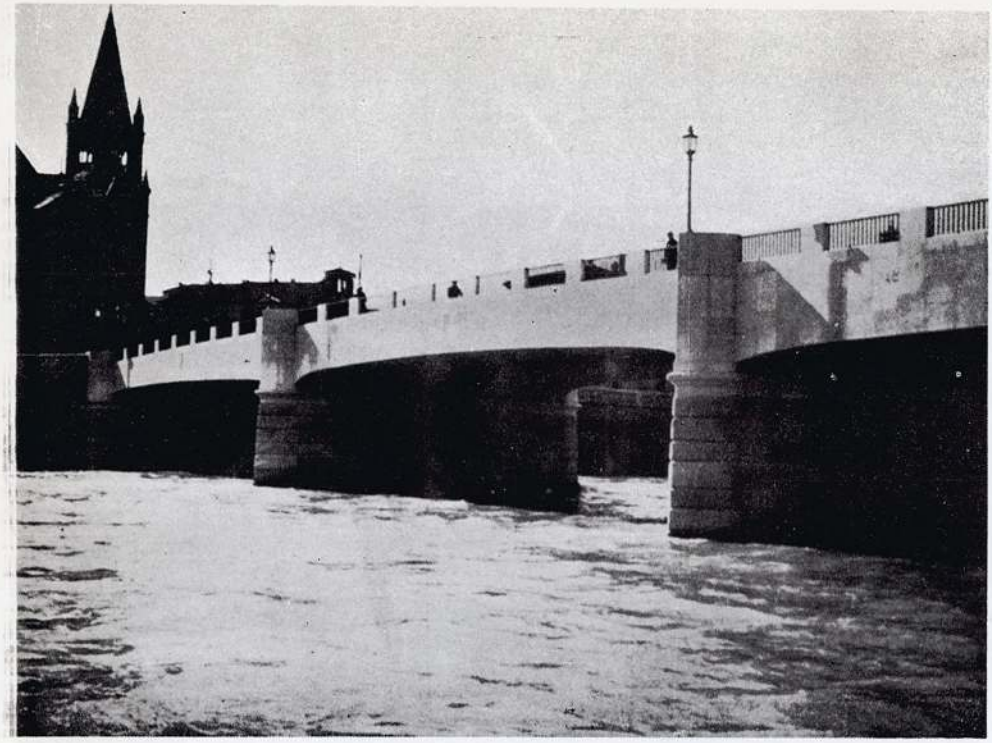
（Architectural Review, Nov., 1937より）



プロセニヤム上部

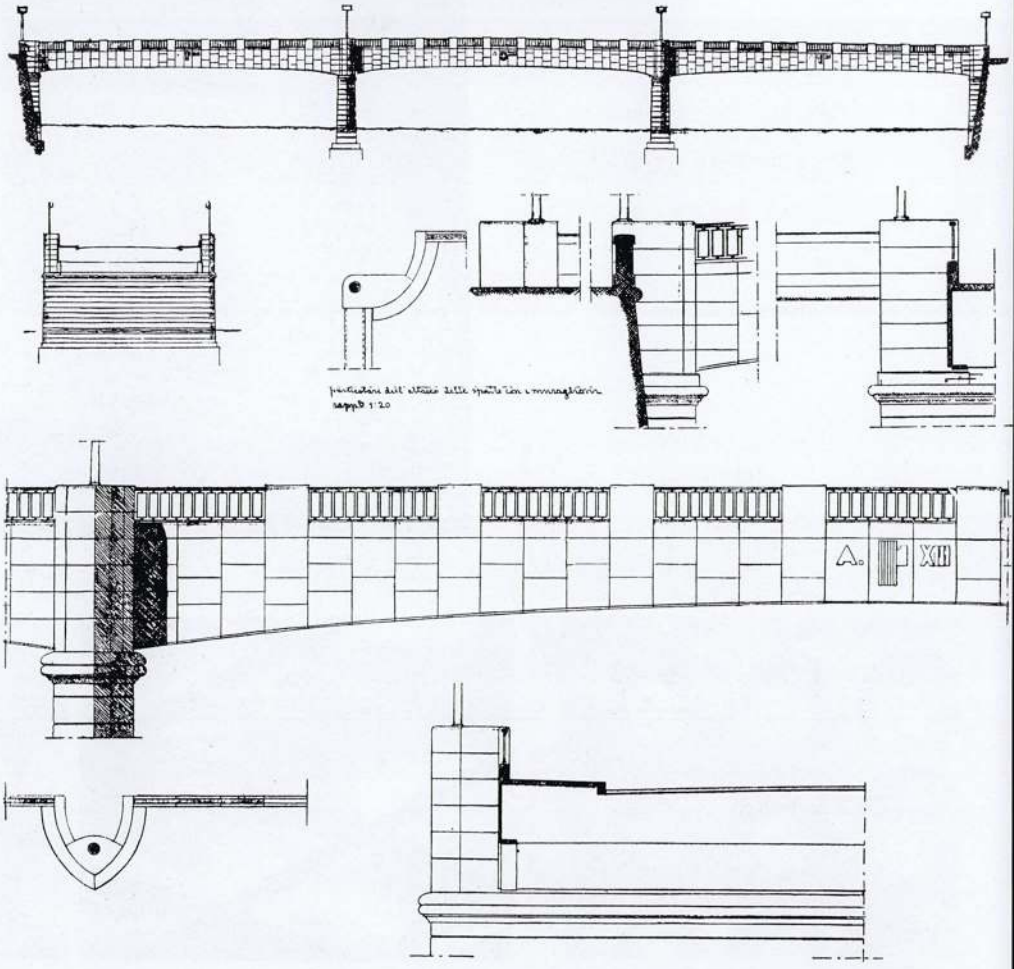


天井及對面の3態（纖維性プラスター塗セルローズ・スプレー仕上）



Navi 橋全景

（改　　造）



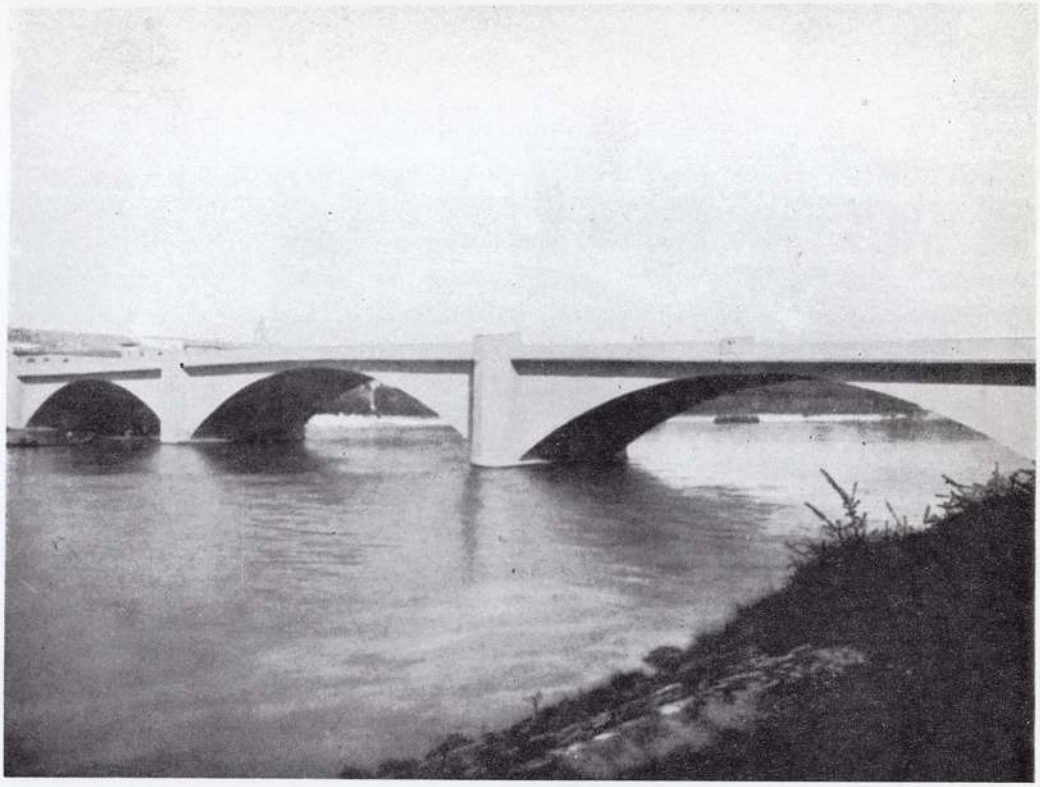
Navi 橋詳細圖

北イタリアの古都ヴエローナ市中を流れる Adige 河に最近四つの新しい橋が架けられた。何れも石材、グリル並に彫刻を巧に使用して橋梁に於ても新興イタリヤ建築の面目を發揮して居る。

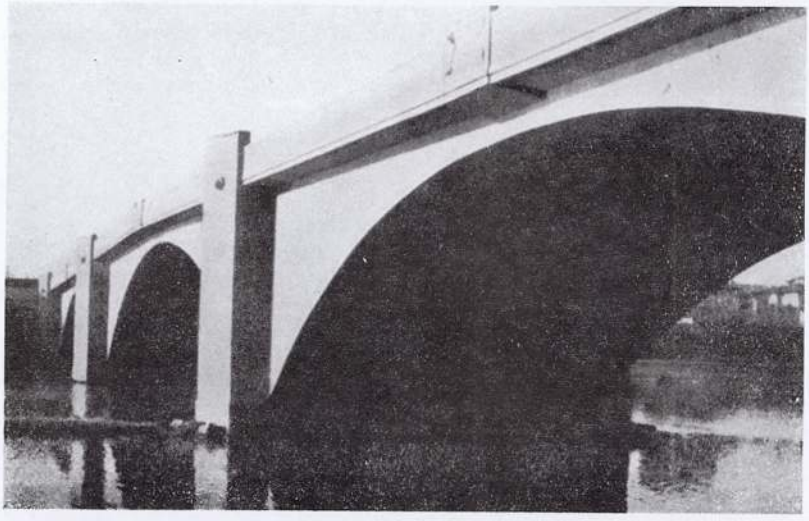
（Architecttura Sept, 1937 より）

24 （イタリヤ） ヴエーロナ市の新橋梁・Navi 橋

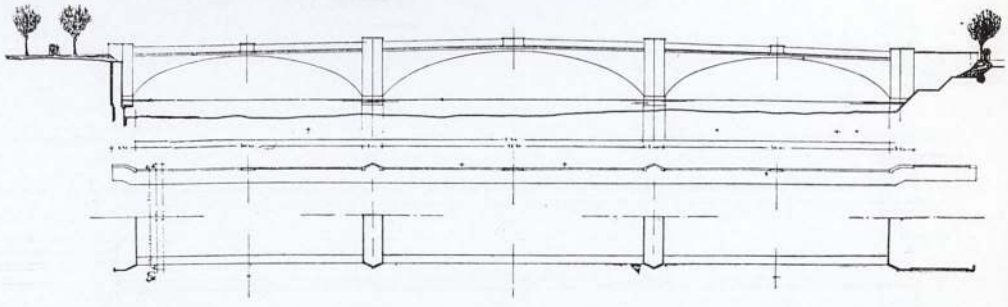
建築家 Arturo Midana



San Francesco 橋全

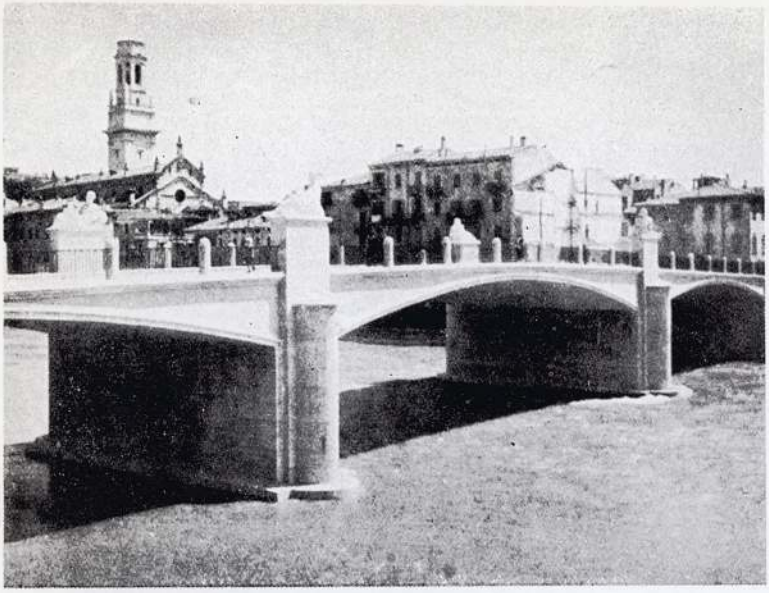


同 上 一 部

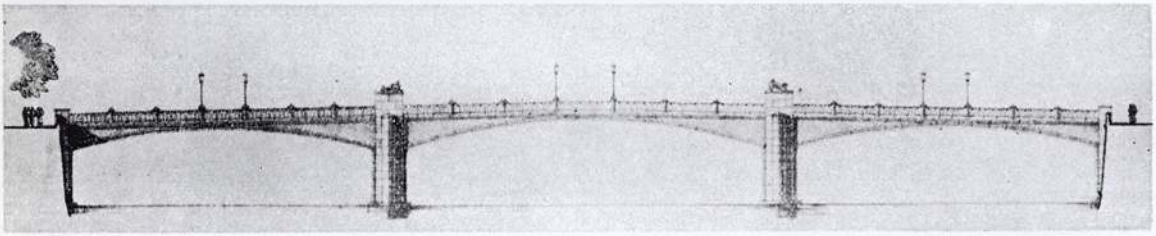


姿圖及平面圖

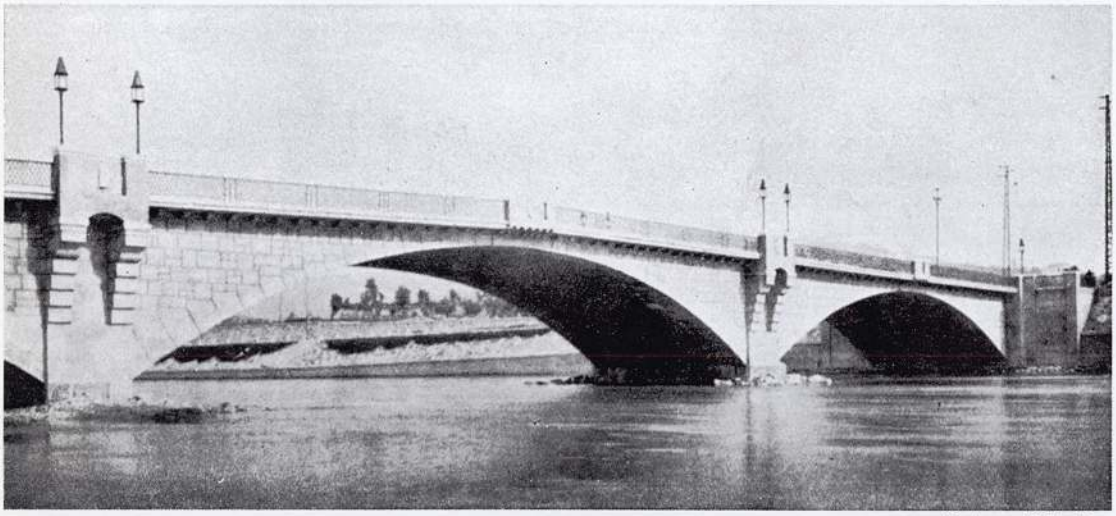
（イタリヤ） ヴエーロナ市の新橋梁・San Francesco 橋　　建築家MarioDezzutti



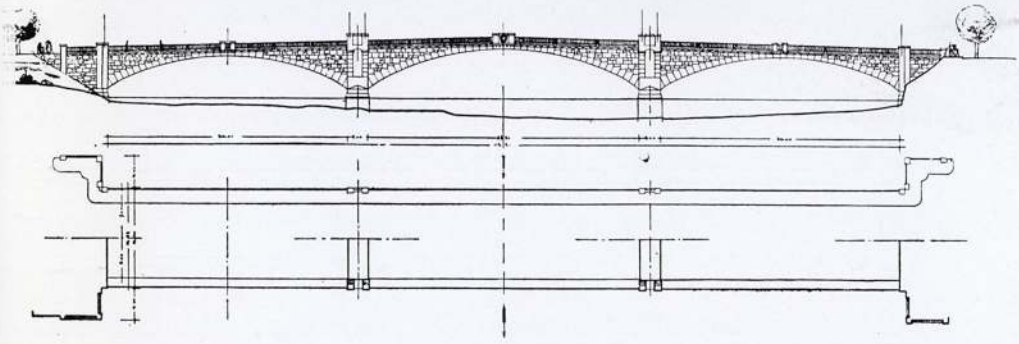
Garibardi 橋全景



Garibardi 橋姿圖



Catena 橋全景



Catena 橋姿圖
及 平 面 圖

126 （イタリヤ） ヴエーロナ市の新橋梁・Garibardi 橋及 Catena 橋 建築家 Mario Dezzutti

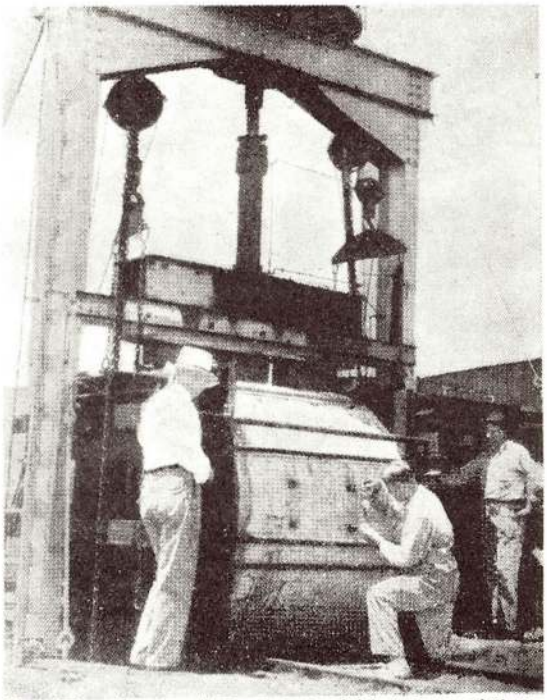
コンクリート管内鐵筋の應力

本文は Steel Stress in Concrete Pipe と題して Gummensky 氏、Whitman氏によつて Engineering New Record October 7. 1937 年に載せられたもので、七種の異つた型に配筋されたコンクリート管の鐵筋の應力を實測して、理論と實際試験との比較を述べたものである。

コンクリート管に内部に壓力及外部に荷重を働かして鐵筋に生ずる應力の實測した大がかりの實驗が最近行はれたが、筆者の知るかぎりに於ては斯界最初のものである。この外部からの荷重は集中荷重として働かせしめ、管が暗渠（Conduit）として用ひられた場合に働く壓力に一致するやうしにた。

この試驗體の大なる管の設計は、コロラド洲の導水管、南カリホルニヤのメトロポリタン地區の水道管に一致せしめた。この管に於ける應力の分布の理論は、この問題の考察に入つてくる種々の、物理的條件を充分滿足せしめるやうになした。然し鋼板の補强材とコンクリートとの附着力の實際どれ程であるかといふこと、梁作用としての管の殼の有効丈、内部壓力に抵抗する橢圓形配筋の有効程度等に關しては幾分の疑問がまだ殘つてゐる。

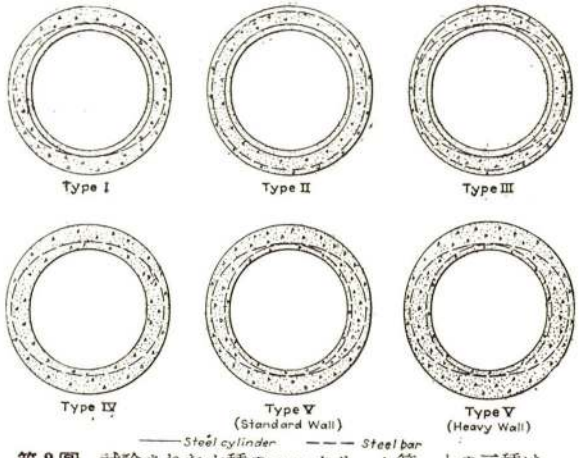
試驗體はロサンゼルスの米國鐵筋コンクリート管會社に於て細心の注意を以て製作し、實驗の初めに假定したことを驗し、設計にあたつて控用したる精確度の或指標を與へるやうにしたものである。その管の直徑は60吋で各型の配筋の應力が實際測られるやう特別に作つたものである。會社に於て機械裝置材料、管製造に對する勞力、試驗をなすに必要な設備、職員等を負擔した。總ての歪度の測定はメトロポリタン地區の水道局の設計員に於て行つた。



第1圖　外からの荷重、内からの壓力を受ける試驗體の管觀測者が歪を測つてゐる處。厚き隔壁を水平引張棒にて引張つてゐることに注意せよ。

總ての試驗は直徑が同一で、配筋法の種々異つた斷面のものについて行はれた。Ⅰの型のものは、若し内部の壓力が少しも變らず、外部の荷重をとり去るなれば、管の外側の上端、下端のコンクリートに龜裂の生ずることを理論上示してゐる。これは實驗の上からも正しい。

Ⅱの型は理論上内部の壓力が高い場合に最も適當してゐることを示す



第2圖 試驗された六種のコンクリート管、上の三種は鋼棒鋼管を持ち、下の三種は鋼棒のみ補強に用ふ。

實驗上この事は正しく、又可成り外部の壓荷重にも抵抗する。

Ⅲの型は鐵筋の最も必要な場所に、鐵筋を集中して用ひてあるので、內部の壓力と、外部の荷重の組合はさつた場合最も釣合よき設計である。實驗の結果に於てもこの理論に適合し、この型の補強が最も優良である事を示してゐる。

Ⅲの型は內部壓力が小なる場合、外部荷重に抵抗するやう設

管と鐵筋の詳細

型		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅴ 標準	Ⅴ 重
コンクリート		流込み	流込み	流込み	流込み	遠心力を用ひ流込み	
試驗個數		3	3	3	1	1	1
管長さ		5′—0″	5′—0″	5′—0″	5′—0′	8′—0″	8′—0″
壁厚		6″	6″	6″	6″	5″	6¾″
內徑		60″	60″	60″	60″	60″	60″
モルタル裸附け		1 7/16″	1 7/16″	1 7/16″	無	無	無
鋼筒のゲーヂ		#16	#16	#16	無	無	無
楕圓配筋	卷筋番號	26	無	25.5	26	38.4	38.4
	筋の直徑	7/16″φ	無	⅜″φ	7/16″φ	⅜″φ	⅜″φ
圓形配筋	卷筋番號	無	26	25.5	無	42.4	42.4
	筋の直徑	無	7/16″φ	⅜″φ	無	¼″φ	1¼″φ
管の長さ1呎に對する鋼の斷面積	鋼筒	0.74	0.74	0.74	無	無	無
	楕圓配筋	0.78	……	0.39	0.78	0.52	0.52
	圓形配筋	……	0.78	0.39	……	0.26	0.26
	計	1.52	1.52	1.52	0.78	0.78	0.78

・注意・鐵筋中心に對し被覆の最小限1¼″とす。

計されたものである。

Ⅴの型は圓形配筋、楕圓形配筋の二つを持ち、コンクリートは管を廻轉しつゝ流し込み遠心力にてコンクリートを固くしたもので、標準型と壁厚の大なる重きものゝ二つを作つた。內部の圓形配筋の鐵筋は內部壓力に抵抗するためのものである。實驗上この管のコンクリートの優良なること、强さが

非常に大なることを明確に示してゐる。この長所は、撓みが極めて少いこと及び應力が超過した時細い龜裂が筒の全面に廣がることである。

補強の鋼板は軟鋼板、棒及び針金は熱壓延の中等品。ⅠからⅢ迄の型のコンクリートは流し込みで外からは振動機にて振動を與へ、內部は廻轉棒にてつきかためた。骨材の長大徑 1吋、セメントはコンクリート一立方ヤードの中に2瓦バレル（1バレルは5立方呎）入れる。使用水の品質には記錄はないが、コンクリート調合の場合には Burmeister の指示器が流しこみの時 3.88吋、遠心力利用のとき 1吋を示すだけづゝ用ひた。コンクリートの平均強度は、供試體4週間の強度、壓縮強度 4,840#/□″ 引張強度 317#/□″、平均彈性係數は 1,600#/□″の場合にはかつて 3.56×10#/□″ であつた。故に計算上 n（彈性係數比）は9を採用する。

この管の試驗には能力 135,000#の試驗機を用ひた。水壓機のピストン（Ram）に對する壓力は7シリンダーの油ポンプを用ひ、所要の壓力を確實に保持し得るやうにした。隔壁（Bulkhead）は壓力を受けてゐる時、管上の如何なる支承物からも切りはなしてある。內部の水壓に對して、隔壁と管との間に洩水なきやうゴムの嚢を用ひた。管は約3吋位撓んでも隔壁の接觸に差支へを生じないやうにしてある。

補強鐵筋に於ける歪みは 10吋の Whittemore の歪計を以て直接はかつた。歪計はコンクリートの中にドリルで穴をあけこの中にとりつけた。各測定に於てはゲーヂの讀みの少なる變化を見屆けるためアンヴアー（Invar ニツケル鋼の一種、溫度による變化を忌む學術用計器類製造に用ひる。）製の目盛測定器を用ひ、極めて小なる變化をも讀みとつたのである。

各測定は各一組づゝに行つた。即ち外からの荷重を一定にして置いて內部の壓力を變化して讀み、又內部の壓力を一定にして置いて外部の荷重を變化せしめてはかつた。

實驗値と理論的の應力

實驗によつて補強鐵筋中に生じた應力は外部荷重、內部壓力の組合さつた應力によつて生する歪の直接の測定値に得られる。歪は荷重零の場合のゲーヂの讀みと、今考へてゐる荷重の働いた場合のゲーヂの讀みとの差によつて與へられる。總ての場合に於て荷重零に對す讀みは水が管の中に滿ちた場合である。

鋼材に起る應力度は次の公式によつて得られる。

$$S=\frac{\triangle l}{l}E$$

茲に　S＝應力度（#/□″）

$\triangle l$＝ゲーヂ目盛の增加

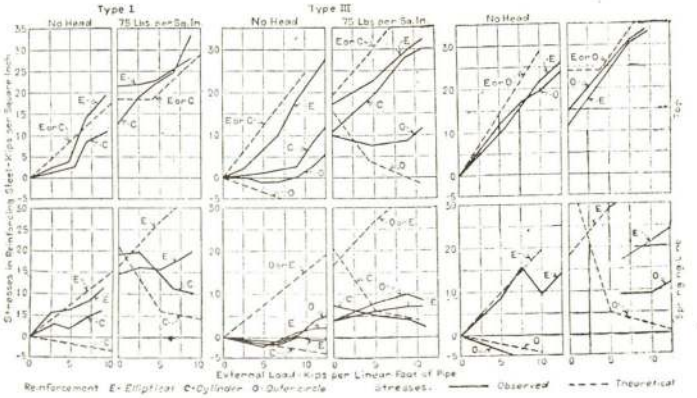
l＝ゲーヂの長さ（″）

E＝鋼のヤング係數（#/□″）

測定した應力は荷重に對して方眼紙上に印をして製圖する。總て測定値には誤差がある故、線は折線となる。第3圖は實測値と理論上の應力とをⅠ、Ⅲ、Ⅴの型につき圖示したものである。

理論上の應力は次の假定によつて算出した。即ち鐵筋とコンクリートの間は完全に附着し、コンクリートは引張應力に全然抵抗せず、斷面に於ては曲がる前に平面のものは曲つた後に於ても平面を保つといふ假定である。曲げモーメントは次の假定により算出した、即ち管の體積がその厚さの幾何學

的軸に集中したと考へ、これに直徑の上、下端に外部からの荷重が働いたと考へて算出するのである内部壓力は直徑62吋の圓管に働いたものと假定した。



第3圖 補强鐵筋に於ける實驗による應力、理論による應力の比較を示したもの。大體實驗値が理論による應力よりも少いことに注意されたい。

應力の檢査

第3圖をよく見る事によつて次の事を知る。或る實驗値は理論による應力によく一致してゐるが、他のものは理論によるものよりも可成り應力が小である。極めて僅かの場合が計算値よりも實驗値が大である。

コンクリートが引張力に全然抵抗しないといふ假定のもとに算出した補强鐵筋中の應力は、實際の場合にはコンクリートの一部が引張力に抵抗する實驗値による補强鐵筋中の實際の應力より幾分大である。曲げモーメントによつて起る應力の最も大なる點は、普通管の頂部に起るが、稀に管の曲り始めの線の近くに起る。

釣合の狀態にある任意の構造部材は、その任意の一點に於て外部から働くモーメント及こゝに働く外力は、その同じ點に於て材料の抵抗モーメント、抵抗應力に相等しい。管の頂部、或場合には曲りの始まる線の點に於てこの標準は一般的に直應力に對して成り立つ。種々の場合に於て斷面上の應力の實際の分布は、計算によるものより離れてゐる。此は多分コンクリートの表面に於ける龜裂により又コンクリートと鐵筋の附着力の缺點により管の構造の完全性の破壞によるのである。

結　　論

次の結論は、この研究に集められた條件の分析の結果、著者によつて得られたものである。

（1）既製品型の鐵筋コンクリート管は、曲げモーメントと直應力の組合應力に對する公式によつて設計せられたものであらう。

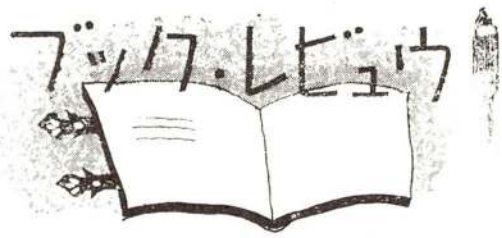
（2）鋼圓筒で補强された鐵筋コンクリート管は終局破壞する迄水が絕對にもらない。

（3）薄鋼管にて補强されたコンクリート管は、用ひられた鐵の總量に對し最高の强度を內部の鋼圓筒、外の方の圓形配筋、楕圓形配筋によつて生じてゐる。

（4）鋼圓筒とコンクリートとの附着は比較的小なる曲げ應力度によつて破壞される。鋼圓筒は抵抗モーメントに於ては賴みにならぬ。然し內部の水壓による直接引張力に對しては可成り抵抗する。

（5）楕圓形配筋のみのコンクリート管は水壓に對する抵抗が弱い。然し外部の垂直荷重に對しては龜裂の發生を後らし、管の有用性を幾分大ならしめる。この管に水壓のみ働くときには、楕圓配筋の楕圓の短軸に添つて管殼の外側のコンクリートに縱の龜裂を生じて壞れる。

（6）遠心力を利用してコンクリートを入れた管は强さも働きも、垂直に立てゝ置いてコンクリートを流し込んだものより斷然優良である。（堀口甚吉）



藤口甚吉

〔1〕**金屬材料Ⅳ金屬各論**　日本學術振興會編　昭和12年11月版　標準規格B5　950頁　岩波書店　12圓。材料學の知識は建築家にとつて一番といつてよい程大切なものである。各學校に於ては材料學は大體に於て、第一學年に課して建築學への入門にしてゐるが或る人が筆者に「材料學こそは建築家にとつて最も大切なものなれば第一學年にて課し、更に最終學年にて課せ」と話されたことがある。丁度中學校に於ける日本歷史（今は國史或は皇國史といふ）が第一、二學年に課し更に第五學年に課する如くにである。材料學はかく大切な學科であるにもかゝわらず、學習は種々な事情から徹底してゐない。之は範圍の廣範、體系のたゞざる事、各材料の進歩著しき事等がその重なる原因である。材料學の書としては濱田、渡邊兩氏の「建築材料學」が好參考書であるが、金屬等の各論の詳しい調査にはやはり、金屬材料の書を見る必要があつた。

今新に出た「金屬材料Ⅵ金屬各論」は日本學術振興會の編になる堂々たる書で、我國學問の進歩のシンボルとして諸外國に出してはづかしからぬの書と信ずる。この金屬材料はⅠ卷應力編、Ⅱ卷金屬特論、Ⅲ卷金屬總論、Ⅲ卷金屬各論、Ⅴ卷用途別索引のⅤ卷から成るらしいが、その第Ⅲ卷である。

本書は鐵並に非鐵合金の殆ど凡てにわたつて、この材料を類別し又細別し、一々其の性質を示す常數を記載された、一種の最新金屬事典である。又各材料毎に多くの用途を實例について示してあるので、之によつて現在我國に於て如何なる材料が如何なる用途に使はれてゐるか判然と知り得る

例へば鍋製サツシュに使用される極軟鋼について見れば

1. 製造法
2. 加工法 a）可鍛性 b）可鍛性 c）熔接性
3. 物理的性質 a）熔融點 b）比重 c）比熱 d）熱傳導率 e）熱膨脹係數 f）電氣抵抗
4. 顯微鏡組織
5. 機械的性質 a）抗張力 b）降伏點 c）伸 d）斷面縮 e）ブリネル硬度
6. 特徵
7. 用途

と統一的に記載あり、サツシュ用の鋼材についても化學成分加工法、機械性質にわたり詳細記述がある。

耐火、耐震建築としての鐵骨、鐵筋コンクリート構造、諸設備等に將來金屬を使用することいよいよ多くならうと思ふ。又代用品の使用等も漸次考へられなければならぬであらう。この時本書はこれ等に對し多大の貢献をなすの書であらう。兎に角、かゝる良書の出版されたことは我國學術界のため大いに慶賀致したい。

〔2〕**ヴオーリズ建築事務所作品集**　中村勝哉編輯。大版164頁。昭和12年7月版。城南書院發行。8圓　近江兄弟社、ヴォーリズ氏の作品は我々關西人にはなじみの深いものがある。我々のこれをみて常に感することは、その施工の如何にも行きとゞいたものゝ多いことである。これは建築費の多少といふ事もその因子の一つではあらうが何か異つた或一つのものがあるに違ひない。その解決を與へるべく造られたのが本作品集である。これはヴォーリズ氏が32年前教育的並びにキリスト教内容の事業に着手せんとして日本に渡來せんとした時、それ迄建築研究のために費された時の浪費を悲しまれ、又愛情措く能はざりし建築技師たらんとする夢想の放棄を悲しまれたといふ事であるが、その夢の實現が本書である。多くの所員の一致團結によつてなされたヴォーリズ氏のこれまでになされた1000にあまる作品中、代表的のものを集められたものである。

氏の作品の外觀が常に我々に感ぜしめるやうにこの作品集は決してモダンなものでない。學生の卒業計劃とは縁遠いものである。氏も本書の卷頭序文に「外國建築技師は、所謂モダン建築と稱する突飛な樣式を狂氣的にうけ入れることを喰ひ止める足止、又はブレーキとしての存在の價値がある」と述べられてゐる。

内容は學校、住宅、キリスト教關係建物が多い代表的のものは學校建築としての神戸女學院、關

西學院大學、住宅として京都のS氏邸、事務所建築として大丸であらう。神戸女學院はその綜合的計劃に於て、個々の建物の取扱ひに於いて此種學校建築中の最大の傑作でないかと思ふ。關西方面の學校建築に於て所謂學校建築らしいものは少く又感じのよいものは少い。私の見た範圍では京都府立第一中學がその感じに於て第一であつたが、ヴォーリズ氏の作、神戸女學院はこれよりもすぐれたものゝやうに感ずる。

氏が序文の第一に醫師、辯護士、建築家の三者が依賴者に對する關係について長く述べられてゐるが、建築家の認識に對して教へられる所が多い

〔3〕事務能率十二講　高田琴三郎著、昭和12年8月版。菊判416頁。巖松堂發行。2.5圓。本書は「いかにして事務能率を高むべきか、事務の科學的管理法」と書名の上に冠せられてゐる。由來建築家は美術的圖案家、設計家として終始する天才人もあるが多くは、複雜、多岐な事務に從事してゐる人が多い。故に「事務管理學」とも稱せられるべき學問は建築家の資格として是非必要なものであるが、建築學科設置の學校に於てこの講義の開かれてゐるものは殆どないやうな現況である

大林組の渡部圭吾氏はこの方面の研究家として知られ、同社のパンフレツトとしてこの種のものを發行されてゐるが、一般に賣り出されたものでない。

この意味に於て高田琴三郎氏の「事務能率十二講」は我々建築從業者にとつても敎ふる所多大の書である。

本書は

第1講經營と事務、第2講文書の作成、第3講文書の運搬、第4講文書の保管、第5講帳票の設計、第6講事務用機械器具、第7講事務室及び事務室設備、第8講人の採用、訓練、配置、第9講執務便覽、第10講事務組織の構成、第11講事務組織の運用、第12講事務改善の方法の12講に分れ、平易なる記述に、寫眞版を挿入され、本書一册の讀了によつて、事務の如何なるものか、又これを能率的になすには如何にするか等の基礎的事項は總て記述されてゐる。記述は一般事務を對象とされてゐる故、建築事務に應用するには幾分の改良を加ふるの必要があらう。又附錄には「事務管理に關する主要文獻目錄」が附せられ、簡單なものではあるが「事務管理全般にわたるもの」「文書整理に關するもの」「會計組織に關するもの」「事務室、事務用設備、機械器具に關するもの」「事務のハンドブツク」「雜」「人事管理に關するもの」「適性考査に關するもの」「身體檢査に關するもの」の各項目にわたり、内外書の書名、簡單なる紹介が附記されてゐて極めて便利である。一讀をおすゝめしたき書である。

〔4〕正倉院御物圖錄十　帝室博物館。昭和12年11月版　横30cm縱42.5cm　圖版68圖　帝室博物館發行　25圓。本書は正倉院御物の寫眞版を集めたものであるが既刊のものが、いづれもその出來榮に於て世界の何れの國に出してもはづかしからぬもので、常に好評を得てゐるものである。これ等御物の圖錄をくり廣げて我國民性が如何にも物の生命を尊ぶ國民であるかに驚き又、日本文化の日本國民性の良さが奥深く感ぜしめられるのである。これは、東洋の支那、朝鮮何れにも見當てることの出來ぬ日本人の魂の良さである。勅封であるとは言へ、かくも完全に昔の生活の有樣がわかるやうに各の物がよく保存されたものである。本輯は「中倉納物」の部で、梓弓、槻弓、鞆、胡祿、箭、手鉾、鉾等68が採錄されてゐる。版は縮尺六分の一等より現寸大迄あつて、各圖版毎に詳しい說明がある。

例へば第26圖玉虫飾箙の說明を示せば

（原寸原色）

一箭　全長85.0糎

矢羽は朽損甚しく何鳥のものとも見分け兼ぬるが、四枚羽にして内二枚は長く他の二枚は短い。矢筈には羽茎を被せ筈卷本矧ぎは樺、未矧は膠を用ひ、且つ筈卷と未矧ぎとの間に玉虫の羽を飾る

以上が說明の一例である。

印刷の鮮明、紙質の善良はチヨツト他に類例がない程度の出來である。

會　報

本協會員中軍務公用者氏名

12月號本欄にて發表後に於ける本協會員中の軍務公用者は下記の通りであります(加出順)

會　　員　辛木貞夫君　　特別賛助員　七利龍三君
普通賛助員　吉永定雄君

通　常　總　會

1、昭和十二年十一月二十九日大阪市北區中之島三丁目三番地朝日ビルヂングに於て昭和十二年度通常總會を開會す

1、出席者下記の通會員四二名

羽原　德衛	中野　吉郎	中村　義雄
本多　正道	井上　福藏	富士岡重一
竹腰　健造	堀口　甚吉	歡中　一眞
西村　信一	久保田英雄	湯川　浩
和田　登	尾龜清四郎	山手　研吾
大石　忠夫	横田　道夫	島田　儀
栗田　成計	早野　英一	坂本　啓一
清水　榮二	鈴木　孫市	田中　秀彦
村井　進	小川　陽吉	龜井幸次郎
新名　種夫	小林　俊三	酒井勇三郎
加田　安彦	大下順三郎	岩崎甚太郎
樋口辰太郎	岡田　孝男	中野順次郎
黒澤　研	片岡　安	中島　喜平
平野　忠雄	中西　六郎	芝田　知重

（次第不同）

1、午後五時五十五分一同着席開會會長片岡安氏議長となり本通常總會は去る十一月二十四日開催致しましたが出席會員定數に滿たざりし爲總會成立せず流會となりましたので本日は再度の招集なるにより定款第二十四條但書に依り定數なく總會成立に付開會する旨を告げ豫て通知せし如く下記事項を行ふに付投票ありたき旨を宣す。

1、監　事　二名の選擧

2、評議員　半數改選

1、議長投票の締切を告げ右二件の開票及採點は同時に行ひたし就ては開票立會人の選定を一任されたしとて之を諮り異議者なく下記の通指名依囑し開票を行ふ

開票立會人

監　事	富士岡重一
常　務	小川陽吉
同	新名種夫
會　員	中野順次郎
同	羽原德衛
同	岩崎甚太郎

1、次て議長より之より議事に移る旨を述べ先づ次の報告あり

1、昭和十二年度事業報告

中西主記常務より別紙報告書を朗讀報告あり右に對し議長より質問の有無を問ひたるも質問者なし、次て議長より御承認と認めます。中西主記常務より本報告書は此處に置きますから後刻御覽を願ひますとて議場の机に置く次て議長より更に今次上海へ調査の爲會員を派遣しましたが事緊急を要したる爲評議員會や總會に諮る暇なかりし旨を附言され經費等の點に於て將來適當の時機に報告承認を得る事と思ふと述ぶ

1、昭和十一年度決算報告

清水主計常務より別表報告詳細說明あり、次

て富士岡監事より本件査閲するに誤謬違算なきことを證明報告あり議長より質問の有無を問ひ質問者なきを以て御承認せられしものと認めてよろしきや否を問ひ承認のことに決定し次に本件に關聯して

1、昭和十一年度剰餘金處分の件に附議し先づ清水主計常務より說明あり質問者、異議者なく可決したり

1、昭和十三年度收支豫算の件

清水主計常務より別表原案收入及支出に付詳細說明あり次て議長より質問の有無を問ひ質問者なきに付贊否を問ひ異議者なく滿場一致原案可決したり

1、次て片岡議長退席に付竹腰副會長議長となり議事の終了を告げ選擧開票の結果に付次の通報告あり

1. 監事二名選擧投票總枚數五三一枚（總票數一〇五二票內白票一〇票）

（但し投票一枚に付被選擧者二名連記無記名投票とす）

當選　五一二票　古塚正治氏
同　五一〇票　清水榮二氏
次點　四票　渡部圭吾氏
（以下略）

2. 評議員半數改選の投票總枚數五二八枚（總票數一五七五票內白票六票無效三票）

（但し投票一枚に付被選擧者三名連記無記名投票とす）

當選　八六票　松井清之助氏
同　八二票　八木　憲一氏
同　八一票　中西　六郎氏
同　八一票　堀口　甚吉氏
同　七九票　石川　寬三氏
同　七九票　芝田　知重氏
同　七七票　大下順三郎氏
同　七七票　村井　進氏
同　七六票　山手　研吾氏
當選　七六票　久保田種吉氏
同　七六票　三浦　茂氏
同　七六票　伊藤　和夫氏
同　七六票　福知　秀夫氏
同　七五票　伴野　眞三氏
同　七四票　黒澤　研氏
同　七四票　內藤　亮一氏
同　七四票　平野　忠雄氏
同　七三票　矢田　鐵藏氏
同　七三票　横田　道夫氏
同　六九票　加納　眞一氏
次點　二票　小笠原祥光氏
同　二票　龜井幸次郎氏
同　二票　新名　種夫氏
同　二票　早良　俊夫氏
同　二票　横山　新造氏
（以下略）

1、是に於て議長より總會終了の旨を告げ一同拍手し閉會す。時に午後七時十五分

1、本議事錄の代表署名者に付議長より之を諮り議長指名に依り下記二氏を指名し承諾を得たり

大下順三郎氏　和田　登氏

評議員會

1、昭和十二年十二月四日大阪市北區中之島三丁目三番地朝日ビルヂングに於て評議員會を開會す。

1、出席者下記の通評議員二十三名監事壹名

評議員

片岡　安　松本　禹象　井上　福藏
伊藤　和夫　伊藤　武文　大下順次郎
久保田種吉　楠瀨　澈　黒澤　研
鈴木忠五郎　竹花　末春　武田　經一
內藤　亮一　中西　六郎　伴野　眞三
樋口辰太郎　平野　忠雄　福知　秀夫
矢田　鐵藏　堀口　甚吉　三浦　茂
村井　進　横田　道夫

監　事

古塚　正治

1、午後五時四十五分開會、會長理事片岡安氏議長となり只今出席二十三名なり、定款第二十四條に依り評議員全員の二分の一以上の出席に付本會成立の旨を告げ豫て通知したる如く次の選擧執行することを宣す

第一　定款第十七條に依る理事三名選擧

第二　定款第二十條に依る會長一名、副會長二名選擧

第三　定款第十七條に依る常務十二名互選

1、次て議長より右選擧方法に付衆議に諮り評議員三浦茂氏より前例による投票選擧に代ふるに詮衡委員制を用ゆることの提議あり依つて議長より之を衆議に諮り異議者なく詮衡委員制に依ることに決議し續いて議長より該詮衡委員の人員及選定に付其方法等を諮り議長一任となり議長より下記五氏を指名し承諾を得たり

久保田種吉　　黒澤　研　　武田　經一

竹花　末春　　内藤　亮一

1、是に於て詮衡委員は別室に於て直に同委員會を開く、此間評議員會は休憩することを議長より宣す

1、午後六時評議員會再開

議長より只今詮衡委員より下記の通り選擧することを報告ありとて之を朗讀す

理事　會　長　片岡　安氏

同　副會長　竹腰　健造氏

同　副會長　中澤誠一郎氏

常務　井上　福藏氏　常務　伊藤　和夫氏

同　伊藤　武文氏　同　鈴木　一幸氏

同　中西　六郎氏　同　樋口辰太郎氏

同　堀口　萬吉氏　同　松井清之助氏

同　三浦　茂氏　同　八木　憲一氏

同　山予　研吾氏　同　吉田　信武氏

（五十音順）

1、次て議長より右本日選擧するも理事は登記の關係上本年十二月十九日を以て就任することを附言し且右選擧に付其賛否を問ひ異議者なく賛成可決したり

1、尚議長より本會の議事錄代表署名者に付諮り議長一任にて次の二氏を指名す

竹花　末春氏　　三浦　茂氏

1、議長より選擧終了に付本日の評議員會は閉會する旨を宣し散會す

時に午後六時二十分

常務會（第25回）

時　　12月6日午後6時——8時

所　　建築材料陳列場別室

出席者　理事　松本副會長

監事　渡部監事

常務　井上主記、小川主記、樋口主記、加田主計、清水主計、新名編輯、堀口編輯、吉田編輯

議　事

1、十二月例會に關する件

2、昭和十三年度常務會に引繼事項の件

3、役員引繼會及役員、委員慰勞會開催に關する件

4、災害强度委員會より地質調査に關し追加豫算要求の件

5、災害强度委員會より風壓調査に關する謝禮の件

6、建築學研究諮豫算に關する件

7、名譽賛助員に關する件

8、職員下半期賞與及增俸に關する件

9、會員詮衡

報　告

1、基礎研究會近畿支部事務取扱に關する件

2、十一月分會計報告

3、七月自二十六日至三十日防空演習に於ける調査報告

十二月例會

時　　12月13日午後6時——10時

所　　協會倶樂部室

出席者　下記の通一三一名（次第不同）

一、午後正六時會長代理として中澤主記開會を宣し引續き本月例會として上海派遣一行の報告會を開くことに付一場の開會の辭を述べらる

一、次いで鳥井信氏演壇に立ち上海地圖により今回の調査全般に付二時間に亘る詳細なる報告あり

一、午後八時吉田信武氏より上海に於ける火災跡の狀況に付報告あり

一、次て八時二十分より八木憲一氏登壇、同氏は上海に於ける建築物の現在より將來に對する方向に付て報告あり

一、八時三十五分松井清之助氏登壇、同氏は反射幻燈を用ひ爆彈及火災の被害狀況に付說明報告あり（右報告の詳細は後日會誌に揭載發表の豫定）

一、次て質問後中澤主記より講演者に對する謝辭あり一同拍手を以て之に和し稀有の盛會裡に閉會す

中井新一郎	中澤誠一郎	淺野　新一
井上　福藏	森山　隆富	山手　研吾
玉置豐次郎	增井　敏克	松本　禹象
本多　正道	加藤　善吉	西林　岩助
粟井　一馬	中島　二郎	飯干　君美
松村　文甫	鬼武　信夫	桂川　弘
中野　吉纲	中島　勝喜	大下順三郎
横田　道夫	內藤　亮一	田中　秀彦
小川　陽吉	高津壯太郎	木村梅次郎
佐藤正次郎	本田　長次	龜井幸次郎
細江　和足	柏原　竹雄	谷　民藏
戴中　一良	田邊　右門	島田　儀
田中幸太郎	中村　正平	高井　眞二
伊東　恒治	山崎　巖	赤司　健三
篠原　太郎	瀧　邦一	大岩　近八
福知　秀夫	安田　則世	山崎　廣一
鈴木文次郎	昆　眞道	豐田啓之助
石井　猛	永瀨　狂三	武井　德松
尾龜清四郎	武田　經一	坂　靜雄
匂坂　弘美	長尾　清一	中島　敏雄
鈴木　一幸	政岡　基次	杉浦　重彦
伊藤　爲吉	日比　文雄	横山三四次
竹內佐平治	小笹　德藏	汲川彌太郎
池田　宮彦	前阪　勝三	原田　千歲
山本　千吉	田中　信夫	竹中　景一
遠山　勇吉	猪瀨幸太郎	三澤萬之進
左谷　陽充	左雲勘治郎	中野順次郎
矢野　藤一	川口　一二	平井廣一郎
前田仲右衛門	樋口辰太郎	浦　英之助
森田　勝三	島岡義太郎	畑中　善造
吉川　寬一	坂下　末藏	熊野　茂
板井　公威	福島　貫	恒岡　俊行
島田　一	武田　五一	高田利一郎
岡田　孝男	八尾　良藏	鈴木　孫市
酒井勇三郎	小田　正二	船木　鐵雄
小川安一郎	菅　陸二	淺井欽治郎
小松勝太郎	濱谷　經久	眞壁　博
政井　繁治	田中　昌司	菊地　芳
谷口　德政	荒井傳次郎	古宇田　實
橋本　太郎	松尾　岩雄	村瀨　鑛一
野中　藤市	木村　詢	川村　喬藏
阿部日出夫	劍持　剛	藪本久三郎
矢田　鐵藏	高木　登	山本　忠彥
島田　良藻	宮田　秀穗	

會員動靜

入會者

會員

田鑵　勝利君　東成區南生野町2ノ78（大阪市役所營繕課）

普通贊助員

小山　和助君　名古屋市東區大幸町297（都市計畫愛知地方委員會）

吉岡　健君　吳市中通4丁目17ノ1 秋吉方

吉村　光則君　山口縣下松町宮之洲山九運輸株式會社下松出張所內（山九運輸株式會社下松出張所）

退會者

會員

大崎　睿弘君　　森本　文章君

地方會員

神田　勇君　　杉山七藏君　　增田虎雄君

普通贊助員　荒木安太郎君

轉居轉勤

會　　員

三島　剛君　神戸市林田區池田上町103町月館

渡邊　平君　住吉區天王寺町3165

地方會員

砂田　敏郎君　孫吳河村部隊經理部

普通贊助員

上原　三郎君　廣島縣安藝郡江田島村海軍兵學校生徒館新築工事場清水組作業所

加納　重勇君　東成區北生野町1ノ69

桑田美代治君　佐世保市海軍病院兵舍新築場清水組作業所

中村　國男君　兵庫縣武庫郡甲子園中津94

西田　龜次君　府下濱寺町下1024

死　　亡

名譽贊助員

曾禰　達藏君　昭和12年12月6日逝去

終身贊助員

清水芳次郎君　昭和12年9月12日逝去

木村音右衞門君　昭和12年10月14日逝去

山添　繁藏君　昭和12年11月17日逝去

（謹んで哀悼の意を表す）

上海方面防空視察行程

11月20日（土）

午後10時7分　大阪驛を發。

11月21日（日）

午後3時5分　長崎驛に着。長崎水上警察署に出頭然るべき手續を完了。旅館上野屋にて一泊

11月22日（月）

午前11時　長崎港出帆。途中長崎縣廳に出頭。

11月23日（火）

午後2時　上海日本郵船滙山碼頭に着。直に旅館東洋館（在虹口、上海滯在中の宿所）に着。少憩後附近を一順。

11月24日（水）

午前　海軍陸戰隊本部に出頭、司令官閣下に面會、深謝の意を表し併せて武運長久を祈る。

午後　中山路を經て南市方面に向ひ、南停車場江南ドック、龍華寺等を視察。歸途自動車パンクし夜中約3時間戰場の氣分を味ふ。

11月25日（木）

午前　海軍武官室に出頭。

午後　虹口附近を視察。

11月26日（金）

午前　虹口警察署、日本總領事館等に出頭。

午後　所謂共同租界中の英租界に赴き書籍を物色或は附近を視察。

11月27日（土）

旗艦を訪問。浦東方面を視察。

11月28日（日）

午前　閘北方面、就中商務印書館、東和圖書館等を視察。某部隊長を訪問、御好意の野戰料理に舌鼓を打つ。

午後　四行倉庫、鐵路管理局、北停車場等を視察。

11月29日（月）

楊樹浦路及華德路方面を徒歩にて視察。就中、南洋煙草股份有限公司、大康紗廠、上海紡織會社等を詳細に視察。

11月30日（火）

午前　海軍主計官室、陸軍武官室に出頭。

午後　三井、三菱、工部局を訪問、英佛兩租界を一順。

12月1日（水）

午前大場鎭、眞如國際無線電臺を視察。

午後　上海商學院、江灣鎭競馬場、市政府、吳淞等を視察。

12月2日（木）

午後1時　上海出帆。

12月3日（金）

午後5時　長崎港に着。上野屋にて一泊。

12月4日（土）

午前9時25分　長崎驛發。

午後2時10分　博多驛着。同8時28分同驛發。

12月5日（日）

午前9時25分　大阪驛着。

關西理工團體聯合會主催懇談會

關西理工團體聯合會主催を以て懇談會を開催したり本協會は聯合會會員たるを以て竹腰副會長、中澤主記常務、樋口主記常務の3名出席したり記錄左の通り。

懇談會記錄

1、日　時　11月28日（日曜日）午前9時30分——午後6時

1、場　所　大阪偕行社

1、出席者　別表中、福留、井口、小竹、船久保矢部、鳥養、別宮、川內、高岸、谷口、井上、山口氏等 其他計45名

1、議　事

(1) 陸軍側池田、高島兩中佐より時局に關し講話あり

(2) 別表協議事項に就て協議せり

(3) 陸軍側より適當の時機に本懇談會を再開せんことを提議し滿場一致之れに決し午後6時過ぎ散會せり。

(4) 午後6時30分風月堂にて一同晩餐會を催し8時過ぎ散會せり。　以上

懇談會協議事項（各團體提出の分）

一般關係

1、都市の防空問題（日本建築協會、電氣普及會提出）
2、陸軍に於ける全國研究總動員（機械學會提出）
3、陸軍研究所（東京、大阪）の整備增設（機械學會提出）
4、研究事項の紹介（機械學會提出）
5、道路鐵道（土木學會提出）
6、港灣河川運河（土木學會、技術協會提出）
7、上下水道事業（水道協會提出）
8、鐵鋼並に一般金屬材料の合理的消費節約と熔接工業の利用普及及研究促進に關する件（熔接協會提出）
9、ゴム資源に就て（ゴム協會提出）

事變地域關係

1、北支に於ける土地調査（土木學會提出）
2、北支に於ける電氣事業（照明學會提出）
3、北支に於ける電氣機械器具製造事業（電氣學會提出）
4、北支に於ける電氣通信事業（電氣通信學會提出）
5、事變地域建設に對して熔接工法を利用する事（熔接協會提出）
6、北支資源開發上綜合研究機關の設立（技術協會、工業化學會提出）

其の他

1、技術家の尊重（各團體提出）
2、北支開發機關の首腦部に技術者を加ふること（電氣學會、照明學會、電氣通信學會提出）
3、技術者に對し北支視察の便宜を與へられたし（電氣學會、照明學會、電氣通信學會提出）

本號執筆者紹介

（五十音順）

伊藤正文	大阪市教育部建設課長
大倉三郎	京都帝國大學營繕課長
片岡安	工學博士・本協會會長・大阪市商工會議所副會頭
葛野壯一郎	葛野建築事務所長
龜井幸次郎	大阪府警察部建築課・技師
酒井勇三郎	會陽化學研究所化粧品工場
新名種夫	大阪市經理部營繕課設計係長
鈴木忠五郎	大阪府立今宮職工學校教諭
豐藤勇	洋畫家（獨立展）日本體育藝術協會々員
中野順次郎	大阪市立都島工業學校教諭
藤田靜雄	兵庫縣警察部保安課兼建築課
堀口甚吉	大阪府立西野田職工學校建築科長・本協會常務
本多正道	大阪市教育部建設課・技師
政岡基次	株式會社松村組
元良勳	大阪市土木部河川橋梁課・技師
モトノ・セイゴ	京都高等工藝學校教授
山口儀三郎	大阪市立都島工業學校教諭

新年號

編輯後記

★意義深き昭和12年に相次いで更に意義深き昭和13年が到來した。例年通り本年も正月號は斯家の大先輩竝に少壯學徒の論文を以て滿たされたが、何れも特に時節柄眞劍の檢討になる堂々たる玉稿のみである。年頭に當つて深謝する次第である。

★昭和12年は建築界に於ても實に多岐多忙であつた。併へば、市街地建築物法關係法規の改訂增補、防空法の制定等に依つて、建築家の責任も愈々重且大となつた。就中、防空法の制定は重大時局否永遠の國家政策上其の意義はまことに深い。

★臨時資金調整法、輸出入品等に關する措置に關する法律、鐵鋼工作物築造許可規則等の發布も我々建築家に投掛くる影響は甚大である。國策として樹立されたる以上、我々は充分なる覺悟と確固たる自覺とを以て、大いに之を歡仰し之を善處せねばならぬと思はれる。

★皇軍の威力燦と輝きたる上海の戰跡を隅なく視察して歸りたる鳥井、八木、松井、吉田の4氏は昨年暮歸阪した。其の旅行談は本誌2月號に、技術的報告は3月號に揭載の豫定である。又、鋸屋根の風壓に對する貴重なる實驗報告も災害强度委員會の手により完成せられ次號に揭載の筈である。期して待たれんことを。

★本會編輯常務として5ケ年間の永きに亘り終始一方ならぬ努力を拂はれた新名氏が今回暫く本誌編輯の第一線より退かれることになつた。然し間接的に我々を大いに指導援助下され、益々本會の爲御盡力賜るとの報に接し讀者諸兄と共に大いに慶び度いと思ふ。

★理論に實際に、建築界の前途や頗る多忙我々は聖戰に向ふ皇軍將兵の燃ゆるが如き意氣と希望とを體して、邦家の爲斯界の爲意義深き昭和13年に邁進し度いと考へる。

（吉田信武）

建築と社會
第21輯　第1號

毎月1回1日發行　定價　1冊　50錢（郵稅3錢）
12冊　6圓（〃36錢）
昭和12年12月25日印刷　昭和13年1月1日發行

發行・編輯
印刷人　小板常男
大阪市北區朝日ビル日本建築協會內

印刷所　プラトン印刷社
大阪市西區江戸堀南通2丁目13番地

發行所　財團法人　日本建築協會
大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
電話長北濱(23)4501番(9)
振替口座大阪39975番

特約販賣店　柳々堂書店
大阪市西區京町堀羽子板橋西
電話土佐堀2440番
振替口座大阪2084番

禁轉載
本號に揭載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告揭載料金

普通	1頁	1回	15,00
普通	½頁	1回	8,00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45,00
普通（前附第2頁）	1頁	1回	40,00
普通（後附第1及最終頁）	1頁	1回	25,00
アート（中插）	½頁	1回	20,00
表紙2	1頁	1回	60,00
表紙3	1頁	1回	45,00
表紙4	1頁	1回	80,00
建築事務所錄	1欄	1回	1,50
（建築關係業者案內）	1欄	1回	5,00

廣告揭載御申込は本會へ直接願ひます。
本誌購讀御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ、振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

建築と社會第21輯第1號　廣告索引

ア　旭硝子株式會社……61
　　淺野スレート株式會社……34
　　阿部鐵工所……50
　　有田製陶所……55
イ　岩元工業株式會社……46
　　伊奈製陶株式會社……17
エ　榮進社……20
　　英進商會……45
　　荏原製作所……25
オ　大阪窯業セメント株式會社……中揷
　　大阪伊丹商店……44
　　大阪組立コンクリート製作所……58
　　大野製作所……前附 1
　　大　林　組……9
　　大倉土木株式會社大阪出張所……8
　　岡田建材店……56
　　奥村重兵衛商店……43
カ　關城化學工業株式會社大阪營業所……表紙 4
キ　桐田商會……40
　　協和製作所……36
ク　黑川化學工業所……42
　　久保商店……36
ケ　建盛商會……47
コ　後藤商店……32
　　鴻　池　組……10
サ　佐渡島英祿商店……31
　　三機工業株式會社大阪支店……表紙 2
　　佐久間パブコ工業株式會社……39
　　坂本商會大阪支店……45
　　坂田ベンチレーター製作所……30
シ　清　水　組……11
　　城口研究所……19
ス　須賀商會……41
セ　政正合資會社……52
　　清光社……30
　　錢高組……12
タ　田島應用化學工業所大阪支店……前附 4
　　大和工業株式會社……25, 27
　　大洋組建材部……44
　　竹中工務店……13
　　田中昌司商店……47
　　田村商會建築材料部……49
　　田中工業株式會社……22
　　淡陶株式會社……23
　　ダンロップ護謨株式會社……中揷
チ　チヨーホー商會……56
ト　東洋リノリユーム株式會社……18
　　東邦建材工業所……53
　　東京電氣株式會社……64
　　東洋キヤリア工業株式會社大阪支店……表紙 2
　　東洋鋼材株式會社大阪出張所……表紙 2
　　東洋陶器株式會社大阪出張所……24
　　巴　商　會……48
ナ　內外土木建築材料合資會社……35
　　寧樂屋家具裝飾店……21
　　南滿鑛業株式會社……37
ニ　日本建築紙工株式會社……46
　　日本放熱器商會大阪支店……62
　　日東物產株式會社……33
　　日本金具株式會社……中揷
　　日本機械工業株式會社……54
　　日本窒素肥料株式會社……表紙 3
　　西原衛生工業所……57
　　西孫南店建築金物部……35
ノ　野澤幸三郎商店……59
ハ　汎建製作所……36
ヒ　平松釣戶車製作所……53
フ　藤木工務店……14
ヘ　ベニス工房……55
ホ　邦光化學工業所……28
マ　松井商店……58
　　松　村　組……15
　　松下電器株式會社コンヂット部……29
ミ　三井物產株式會社……51
ヤ　矢橋大理石商店……42
　　大和護謨製作所……60
ヨ　横河橋梁製作所……39
　　米本商店……32
　　米原商店……52
ラ　ライトラバー工業合資會社……63
リ　理化學興業株式會社……前附 3
　　リーダ建材工業株式會社……中揷
レ　玲光社(木內眞太郎)……37